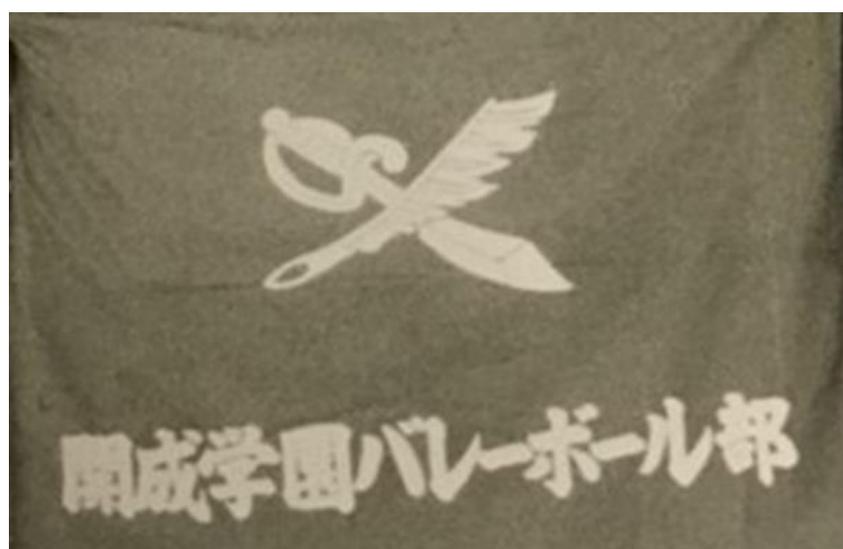


開成学園バレーボール部70年史



平成29年7月

開成学園バレーボール部OB会

目次

写真集－1

ユニフォームの変遷

懐かしい－コマ

開成学園バレーボール部70年史出版にあたって

開成学園バレーボール部OB会長 桑田起義・・・01

70周年記念事業実行委員長 松原秀彰・・・03

70年史編集委員長 佐藤 勇・・・04

開成学園バレーボール部顧問 奥山茂樹・・・06

開成学園バレーボール部顧問 宮 利政・・・08

開成学園バレーボール部顧問 須藤俊文・・・10

開成学園バレーボール部草創の記・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

各学年から思い出の記・・・・・・・・・・・・・・・・・・45

開成学園バレーボール部70年の主な歩み・・・・・・・・・・163

開成学園バレーボール部年次成績一覧・・・・・・・・・・165

写真集－2・・・・・・・・・・・・・・・・・・173

資料

部歌

編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・177

開成学園バレーボール部 70 年史出版にあたって

開成学園バレーボール部 OB 会会長 桑田起義

開成バレー部設立 70 周年を迎えて、関係者の皆様と喜びを分かち合いたいと思います。また顧問の先生方、並びに OB 各位の日頃の開成バレー部支援に心から感謝いたします。

佐藤勇先輩ご発案で部史編纂プロジェクトが立上り、片野昭秀先輩や小川宗男氏のご尽力により情報収集・記録整理及び編集が進められ、ついにこの貴重な 70 年史完成に至りました。創部当初の想像を絶する逸話の数々や手書きユニフォームはぜひ若い世代に知ってもらいたい開成バレー部の歴史のひとつです。さて私も開成高校を卒業して早くも半世紀近くになり、これまでの人生の中の開成バレーとの折々のつながりも思い出されます。この紙面をお借りして以下に私のバレー人生圧縮版を綴りたいと思います。

現役時代は様々な変化を経験しました。9 人制から 6 人制への移行とルール変更、精神論プラス体罰型指導方法から科学的指導法取り込みへ(ベースは依然精神論)、コンクリート舗装や土のコートから板張り体育館のコートへ、モノトーンのビンテージユニフォームからスマートな T シャツ型原色(濃紺)ユニフォーム採用へ、そして勝ちが増えるに従い女生徒主体の観客動員力向上と試合後のアフターケアによる生活多様化、等々。

同期は小川・小山・佐藤・竹内・長嶺・浜・山本各氏で、小山マネージャーの緻密かつ戦略的練習プログラムと頻繁な他流試合のおかげで、開成高校の思い出は殆どバレーコートの中です。しょっちゅう誰かが練習方法や攻め方(守り方は殆ど無い)、そしてスタンドプレー(横着プレー)の責任追及など言い争いをしているのが普段の練習風景でした。

高 2 の東京都新人戦で東京都ベスト 4 に残ったのは中村博次先生と私達 8 人の運の強さもありますが、(中学時代)顔も怖い大先輩(特に Y 先輩、T 先輩)の鬼の原始的指導、(高校時代)当時大学バレー部の先輩による論理追及型科学的指導、1 年上(片野昭秀先輩の代)及び 2 年上(結城先輩の代)による厳しい中村博次先生からの庇護、そして 1 年下(西村氏の代)を含めて後輩諸兄の練習・試合での強力なサポートの賜物だったと思います。同期(小山・竹内・浜・山本各氏)が詳細な手記を投稿しているのでぜひご覧ください。

会社員人生では開成バレーで鍛えた精神力・体力が何ものにも代えがたい財産でしたが、それ以上に助けられたのは理不尽に対する耐性と寛容精神の習得か

もしれません。また折々の会社体育祭のバレー試合ではスター選手並みの扱いをいただきました(低レベルチームにも華)。もちろんバレーで汗を流した後のビール旨さはゴルフの比ではありません。まさにひと戦の後の美酒です。教訓もあります。会社のバレーで2度大きな負傷(手足靭帯等損傷)をしましたが、どちらも海外出張の帰国翌日の練習試合でした。頭ではできても体がついてこれなかったわけです。

還暦を超えて第二の会社生活に入ってからには自重してママさんバレーに参加する程度ですが十分気分転換及び健康増進になっています。

以上、開成バレーの私の人生への関わり的一端をご紹介させていただきましたが、これからも **OB** 並びに現役の皆さんが開成バレーを通してより良い人生を楽しんでいただきたい、そして **OB** 各位にあつては現役の今後の輝かしい戦果と開成バレー部の一層の発展に思いを馳せて **OB** 会費を気持ち良くお納めいただきたいとの心からの期待をもって私の挨拶に代えたいと思います。

70周年記念行事実行委員長 松原秀彰

開成バレー部が設立されて70周年を迎えるにあたり、記念事業の実行委員長を仰せつかり、併せて70年史に挨拶文を書かせていただくことになりました、昭和49年卒業の松原です。まずは、70年という期間をずっと支えていただいた顧問の先生方、OB各位に心から感謝いたします。とくに、佐藤勇先輩、片野昭秀先輩、桑田起義先輩、小川宗男先輩には、70周年記念事業を引っ張っていただき、本当にありがとうございます。

開成そのものの歴史が約140年のようですので、70周年よりももっと長いクラブもあるでしょうが、このような長い年月を我がバレー部が歴史を刻んできたことは素晴らしいことだと思います。私も卒業してからすでに40年以上が経過していますので、ずいぶん後輩が増えたんだなあ、と感慨深いものがあります。現役時代の話は別の原稿で書かせていただきましたので、ここでは卒業後のOB会への私のかかわり方を少しだけ書きますと、昭和終りと平成初めのあたりで東大に残ったのでOB会の幹事長などをさせてもらい、OBチームの結成、会報の発行、会費の集め方、現役への援助などをスタートさせ、少し貢献できたと思っています。職場（研究所）が名古屋に移ってしまい、OB会にはご無沙汰することが多く、3年前に実家のある仙台に移動（東北大）し、東京を飛び越してしまったのですが、そろそろ桑田先輩から私の代あたりでOB会を牽引するように、というお達しを受け、最近ではできるだけ頻繁にOB会活動に参加しております。今後は、同学年の高塚君や、一年下の市村君などと一緒にOB会を盛り上げていきたいと思っていますので、どうぞよろしく願いいたします。

バレーボールというスポーツは、いろんな意味で絆を重視する要素が多いのではないかと思います。個人だけがいくら頑張ってもだめで、チーム全体でどう機能していくかが問われる典型的な団体競技だと思います。昨今のバレーの試合、ことに男子の試合を見ると、日本がかってほど強くないこともあってか、攻撃がパワフルすぎてすぐにプレーが終わる（途切れる）のを見ていて、バレーボールの本来の面白さと違うなあ、と思うのは私だけでしょうか。その点、女子の試合はラリーが続くことが多く、面白いと思って観ています。バレーボールの神髄というか醍醐味は、ボールを地面に落とさずにつないでいくということにあるのではないかと私は思います。

70年の間いろんな局面あるいはピンチがあったかもしれない我がバレー部が、何とかボールをつないで、顧問の先生や現役からOBに至る絆が続いてきたんだと思います。70周年を皆さまとお祝い申し上げると同時に、今後も永く我がバレー部が続いていくように皆さまのご協力をお願いする次第です。

70年史編集委員長 佐藤 勇

開成学園バレーボール部が2017年で創部70年を迎えます。

ここまで支えて下さった歴代の顧問の先生方、OBの皆様、そして現在活動してくれている現役諸君に心より御礼申し上げます。

この開成バレー部の70年の歴史を残しておきたいと思い立ち、2014年の11月にバレー部の草創期をご存じの皆様に声を掛け、お集まりいただきました。昭和26年卒の先輩方を筆頭に昭和30年卒の方まで7名のご出席で、「開成学園バレー部の草創期を語る」という座談会を行いました（詳しくは後掲をご覧ください）。戦後間もない昭和22年に創部された当時の話を皆様からお聞きすることができ、貴重な資料となりました。

私は昭和21年に生まれ、開成バレー部とほぼ同じ時を歩んできました。自分が70歳になってみて、まだまだ若いつもりですが、つくづくその歴史を感じます。戦後の貧しい時代から、復興期、高度成長期、オイルショック、バブル期とその崩壊という、いろんな時代をくぐり抜け、現在の開成バレー部が立派に活動し続けていることに深く敬意を表します。

さて、今回「開成学園バレー部70年史」を作成するにあたり、多くの方から原稿をいただきました。皆様の心の中に「開成バレー部」が核として存在していることを再確認できました。自分のことを振り返っても、中学1年生でまったく何もわからないでバレー部に入部し、優しい先輩たちにパスの仕方、サーブの打ち方などを教わり、徐々にバレーボールらしきものができるようになりました。上級生になり試合に出るようになると、「勝負」の面白さ・悔しさ、練習の楽しさ・つらさ、そして試合の後のすがすがしさなどいろんな体験をバレーというものを通して感じてきました。仲間の大切さ、練習することでしか乗り越えられない壁、コミュニケーションの重要さ、チームワークなど、その後の社会人として、家庭人として大切なことをたくさん学ばせて頂きました。その一つ一つが人生の中で大きな糧となっています。開成のような進学校は、世間ではともすれば「勉強」だけが評価されていますが、社会で大切なのは「人間性」です。現役諸君には、6年間つらいことから逃げずにバレー部を全うすることで、みんなから愛され、慕われる人間性の豊かな人間となってほしいと願っています。

最後になりましたが、この70年史を作成するにあたり、中心となって編集から年表の作成までを担当した片野さん（S44）、原稿集めを担当した小川さん

(S 4 5)、関さん(名簿整備も担当)(S 5 4)、全体を統括したOB会会長の桑田さん(S 4 5)、70周年記念事業全体をコーディネートした松原さん(S 4 9)、顧問の立場からご協力していただいた宮先生(H 9)に感謝申し上げます。

開成学園バレーボール部発足 70 周年へのお祝い

バレー部顧問 奥山 茂樹

この度は、開成学園バレーボール部発足 70 周年、おめでとうございます。2017 年は、私にとって勤続 22 年目に当たります。ということは、知らず知らずのうちに、発足 50 周年、60 周年を顧問として迎えていたということになります。今(2016 年 12 月末日)から 20 年と 9 箇月前、社会人 1 年目の私は、中村博次先生の熱意に押される形でバレーボール部の顧問を引き受けました。そもそも、バレーボールの経験が「中 3 の体育の授業で 2 回やったことがある」だけ、しかも当時はサーブが入れば得点になるような、戦術も何もない状態での経験です(今でも体育の授業で中学生がバレーボールを行っているのを見ると、同様の人が多いですね)。顧問になってからも、リベロなるポジションができ、ラリーポイント制に変わるなど、ルールそのものが自分の知っていたバレーボールとは異なっていたことも相俟って、当初はとにかく覚えることに必死でした。

ある程度ルールを覚えた頃、審判資格の取得を念頭に、練習試合の副審をしたことがあります。その時は、ルールはわかっているのにゲームのスピードについていけず、結局 5 つの反則行為に気づきながら 1 回も笛を吹けないという体たらくに終わりました。その後は、審判ができる顧問が入ってくれたこともあり、身の丈に合った仕事(延長の居残りや怪我人の付き添いなど)をするにとどめ、今に至っています。

今でこそその機会はほとんどありませんが、当時は監督として試合に出ることも多々ありました。監督は顧問教諭でなければならないという制約があるため引き受けましたが、基本的には、生徒やコーチが「タイムとってください」と言えばタイムをとり、「次の〇〇君のサーブのところで交代お願いします」と言えば交代申請をするという、「生徒やコーチに言われた通りに動く」監督でした。バレーボールの知識が増えるほど、口を挟みたくなるものですが、私の監督としての心得は当時から変わらず 2 つだけです。ひとつは「試合中は自分の考えを極力出さないこと」、もうひとつは「どんな状況になっても生徒たちを信じて待つこと」。

もちろん、試合が終われば感想を述べます。バレーボールの技術面、戦術面については、どう考えても生徒たちのほうが詳しいので、私が話すのは主に戦略面と、動物行動学の知見を生かした(ちょっと普通とは違う)視点での方法論でした。生徒たちは、バレーボールが好きで部活をやっています。当然、バレー

ボールの知識を貪欲に求めているでしょうし、そもそも体の大きさも運動量も設備も強豪校に劣る状況で勝ちに行くためには、知恵で対抗するしかありません。そのような生徒たちに対して、私ができることは何か。それを突き詰めていった結果が、「チンパンジーのグループ間闘争では声の大きいほうが勝つ」とか、「動物は想定外の事象が起きると混乱して正常な判断ができなくなる」などの挿話です。単に「声を出せ」とか「周りをよく見ろ」とか言うのでなしに、行動のひとつひとつに「そうすべき理由」をつけて説明するというやり方でした。

長い間、中村博次先生、栗原弘先生のサポートをする形で務めてきましたが、気がつけば顧問団の中の最年長になってしまいました。これまで、栗原先生と2人で顧問を務めてきた期間が長く、栗原先生には特にお世話になりっぱなしでした。バレー部の顧問として、生徒たちに何を伝えるか、保護者の皆様にどのようにご理解いただくか、といったことは、栗原先生から学んだところが大きいです。この場を借りて御礼申し上げます。

今後、実質的な指導ができない私が、バレーボール部にどのように貢献できるのかはわかりません。ですが、この部を経験した生徒たちが、その経験を未来に誇れる糧として生きていけるよう、サポートしていければと考えています。幸い、今のところ、部のOBとなった卒業生は、この部を愛し、後輩の面倒をよく見てくれています。このような伝統がこの先もずっと続いていけるよう祈念しつつ、挨拶の言葉に代えさせていただきます。

開成バレーボール部創部 70 周年によせて

バレー部顧問 宮 利政

1947 年に産声を上げたバレーボール部が創部 70 年を迎えられたこと、心よりお祝い申し上げます。それと同時にOB会として継続的に、現役生に対する財政的・人的援助をしてこられたことに改めて感謝したいと思います。

私自身、開成バレー部そしてOB会にお世話になった一人です。麻布との定期戦で怖いOBに萎縮し、春夏二度の合宿では海岸で花火をしたり近くの商店で買い食いをしたりとバレー以外の思い出の方が多岐に及ぶ気がします。今は亡き中村博次先生のご指導のもと、先輩後輩とかけがえのない時間を過ごすことができ、当時のメンバーが集まると昔話が尽きません。そんな私がひよんなことから教員となり、さらには開成バレー部の顧問となるに至ったのには、不思議な縁を感じます。

前置きはこれくらいとし、顧問として現役生の指導に携わって感じていることを述べたいと思います。

まずは、好きなことに取り組む貪欲さは全国出場の高校にも決して引けを取らないということです。体格や練習量で劣っている分をどのようにカバーするのか、必死に考えています。近年は他県の全国大会出場校と練習試合をすることもあります。物怖じすることなく、どうすれば相手に勝てるのか、ということ徹底して追求しています。開成が追求すべきは、「わからなくてもできる教え込まれたバレー」ではなく、「なぜそうすべきなのか理解して実践するバレー」でなくてはなりません。これは開成バレー部の伝統ではないかと勝手に思っています。

次に上下のつながりの強さです。代ごとの人数にもよりますが、他に比べてバレー部はこじんまりとした所帯です。その分、前後の代との交流は密で、遠征や合宿で苦労をともにする中で自然と絆が強まっているようです。卒業後も練習相手として指導しに来てくれることもよき伝統です。

一方、開成特有の大変さもあります。他の生徒が早々と部活を引退する中、バレー部はどの代も「関東大会出場」を目指して高三でも部活を続けています。勢い、4月は運動会活動と部活動とが重なり、練習時間も運動会活動のため制限されます。極限の疲労の中で学業と部活、運動会の鼎立に取り組まねばなりません。そこでも、過去に同じ困難を乗り越えてきた先輩の存在が励みになっています。

長い伝統に培われたバレー部ですが、大きく変わってきていることもあります。近年は保護者の方々も大会の応援に駆けつけます。この変化は大歓迎で、親子で部活に関わってもらうことで、ご子息の活躍する姿を間近に見てもらえますし、生徒たちには自分から出場機会を作ろうという積極性が芽生えます。他校との練習試合の増加も、同世代との交流拡大や切磋琢磨につながります。開成のもつ縦のつながりと、同時代の横のつながり、この二つによってバレー部の生徒は日々成長しています。

結びになりますが、開成バレー部が今後も永久に存続するためには、OBの協力が不可欠です。皆様のご協力を仰ぎつつ、脈々と受け継がれてきた伝統のバトンを受け継いでいくお手伝いをできたらと思います。

最近の開成バレー部

バレー部顧問 (2011～) 須藤 俊文

部活の意義は、様々あってもちろんよい。しかし、開成バレー部は、試合で勝つことを目指す部である。この心地よい緊張感は、大切にしたいと考えている。まれに、試合で勝つことよりもバレーを楽しむことを望む部員がいる。残念ながらその方針は脚下させて頂く。試合で勝つために時間を使うのと、楽しむために時間を使うのとでは、育つものが違うからである。勝つことを真剣に考えて、時には精神的にも肉体的に追い込まれる経験をする中で、できなかったことができる、勝てなかったチームに勝てる、そのことにやり甲斐を感じ、自信が増強され、そのことに喜びを感じられることこそが、バレーボールを通して彼らに経験して欲しいことだからである。おそらく、開成バレー部 70 年の歴史の中で、多くの先輩方が大切にしてきたことのひとつであると思われる。

主に担当する中学チームで、荒川区大会に続いて、5 ブロック大会をリーグ 1 位で勝ち上がったとき、強豪校の監督から学業もバレーも優秀だとお褒めの言葉を頂いたことがある。さらに「勉強では敵わないからバレーだけは勝たせてくれ」とまで言うてくださる。その言葉は非常に有難く、部員たちにとっても非常に励みとなったに違いない。そのチームとの対戦は、残念ながら大差で負けてしまった……。しかし、部員はバレーでは負けたけれど勉強で勝っているからいいのだなどとは微塵も思っていない。試合に負けたことを純粋に悔しがり、バレーでも勝つことを目指している。中学・高校時代、部活でも勉強でも趣味でも何でもいい、結果を出せるものが 1 つでもあれば、一般にはそれは素晴らしいことであるに違いない。しかし開成では、学業はできて当然でそれとは別に何ができるかが求められており、そこにひとつの価値があると考えている。すなわち、部員らにとって二兎追うことは当然のことなのだ。ここが開成バレー部の素晴らしいところである。

私の知る限りでは、中学チームが都大会でベスト 8 (≡関東大会出場) になったことはない。調べてみると、東京都の中学バレーでは、ベスト 8 に入るチームはほぼ決まった指導者のチームで占められている。大会や練習試合などでは、それら関東・全国大会常連の監督の方々の話を聞く機会がある。ある監督は「練習は裏切らない。」という。またある監督は「“高さ”ではなくバレーボールで勝たないとだめだ。」という。また別の監督は「全国で勝てるかは JOC 数で決まる。」という。(共感はしなかったが「3 時間の練習より 30 分のスカウトだ。」

というの聞いたことがある。) 開成バレー部にはこれらの要素は 1 つもない。それでも、ネットを挟んで同じルールで試合をしないといけない。もちろん、練習時間を確保する努力もするし、同じ練習を繰り返して 1 つの技術を身に着ける努力もする。バレーボールを知る努力もする。しかし、他のチームを真似てもそれらのチームに追いつけないし、ベスト 8 に入ることも難しい。試合に勝つための要素は 2 つである。

まずは、他のチームに追いつく努力はしながらも、他のチームがやらないようなこと、開成バレー部のウリをつくることである。ヒントはルールブックの初めに記されている競技の本質にある。

(抜粋) —— 試合の目標は、相手コートにボールを落とすために、ネットを越してボールを送ること、そして相手チームの同様な努力を阻止することである。チームは、返球するために、ボールを 3 回打つ (ブロックの接触に加えて) ことができる。

ボールは、サーバーが、ネットを越えて相手コートへ打つサービスによって、インプレー状態になる。ラリーは、ボールがコートに落ちるか、ボール “アウト” になるか、または正しく返球できなくなるまで続けられる。—— (『2016 年版バレーボール 6 人制競技規則』より)

すなわち、相手コートにボールを落とすか、相手に正しく返球させなければよいのであって、レシーブ、トス、スパイクという典型的な攻撃は、結果として有利であるに違いないが、それが全てではないということである。この大きな許容の中で、自分たちのウリを企画することが 1 つである。

もう 1 つは、通常 100 回繰り返して身につける技術を、20 本でできるようになることである。これは不可能である。しかし、その 20 本が “すべて意識された 1 本の積み重ね” でありその過程で生じるであろう失敗が “意味のある失敗” であればどうだろうか。すなわち、考えてプレーすること、考えられたプレーで 1 点を重ねることである。

これらはそう簡単なことではない。しかし、こういうことに好んで挑戦したがるのが開成バレー部員である。その姿は清々しくそして頼もしい。そして、そのような部員集団に、顧問として関われることは、遣り甲斐以外の何物でもない。チームは、80 周年、90 周年、100 周年と、これからも真剣勝負を続けていくわけであるが、大事な試合こそぶっつけ本番でたたかったりはしないわけであり、やはり日々の練習という試行錯誤の過程はこれからも有意義でありたい。

寄稿

開成バレー部 創部70周年に寄せて

大瀧 利尚(昭和25年)

開成バレー部創部70周年おめでとうございます。創部当時在籍した一人として感無量です。

私は1944年4月開成中学校へ入学し、戦火の激しくなった12月に止むなく下谷（現台東区）から、母の生まれ故郷仙台へ疎開し、仙台育英中学へ転校、翌年8月に終戦を迎えることになりました。

1949年4月疎開先仙台から横浜鶴見へ戻り、開成高校3年に復学しました。

仙台へ転校した翌年からバレーボールをはじめ、1948年秋の県下大会で当時不敗を誇っていた古川高校と決勝で対戦し、2対1で惜敗したものの、私はHLとしてチームメイトのBCと二人がベストナインに選ばれました。

開成に戻ったものの、未だバレー部はなく、同好の士が集まって夫々パス・トス・サーブ等を練習していると云った状態でした。其の様な中、当時東京理大へ進まれた出野寛二先輩が、折にふれて顔を出され、パス・トス・レシーブ・スパイクの練習を見てくれたことは有難いことでありました。

1学年下に、近藤和夫君、塚田謙仁君、野水善三君、吉村功君、渡辺自営君が居り、此のメンバーが創部の中心メンバーだったと思います。

さらに1学年下に、岡部雅臣君、渡辺泰君、永峰祥司君がおり、長身の岡部君が入って漸くバレーチームらしくなって来たなと感じました。

中学に野水君の弟の清君が居り、練習に参加して、ボール拾いに汗を流していたのを覚えていますが。

夫々「ケンジン」とか「ジエイ」「ゼンちゃん」と呼び合って練習していたのが、よき想ひ出です。

1951年秋、突然永峰祥司君が鶴見の拙宅へ顔を見せ、荒川区民大会へ出場したいがメンバーが揃わず、先輩にも参加して欲しいとのこと、快諾して馳せ参じたところ、出野

先輩も居られ、最強チームが出来たのは言う迄もありません。会場は駒込高校グラウンドで、連戦連勝で結果は優勝と云うことで、永峰君の努力の甲斐があった一日でした。永峰君とは、翌年から、神奈川リーグで、彼は東京水産大、私は横浜国立大のメンバーとして幾度か対戦した記憶があります。彼の早逝は残念です。心から冥福を祈ります。

当時の球界を振り返ってみると、9人制が中心（1954年にオール香港の6人制チームが来日、当時オール神奈川大学の選抜チームとして参戦した記憶があります。）で、男子の実業団では、広島の嚶鳴クラブが、圧倒的に強くその他、

広島の呉専売の8人攻撃（BC一人が守備に入り、残り8人は全員攻撃に参加する）

東レ滋賀のFC 日野選手の小柄な身体から繰り出す平行トス（ネットの白帯に沿って、トスを流しFとH又はF・Fで攻撃する）。

チーム名は失念したが、4・3・2システムと云って、前衛4人後衛2人の陣形で戦うチームもあった。

大学では、早、慶、明、日が強く、早大FC 古我のヘソの辺りから繰り出すトスは絶妙で、後年彼が岩田三郎選手とNKKの選手として、神奈川大会で横浜国立大学と対戦、コテコテにやられた記憶がある。

慶応にはBC 松平選手（後年全日本男子監督、バレーボール協会会長）、日大には笠原選手が活躍していた。

最近専らTV 観戦で、家内と二人夫々の最良チームや選手を応援しているが、相手の動きが読める選手が活躍しているように思います。

其の意味でアタッカーよりセッターやリベロの一挙手一投足に目が離せません。

開成バレー部に栄光あれ！

大瀧利尚先輩（昭和25年卒）は、この投稿を頂いた後、2015年3月7日に病没されました。心からご冥福をお祈り申し上げます。

開成バレー部の思い出

塚田 謙仁(昭和 26 年)

本題の思い出です。

- ① 破れたボールの外側の革を、家へ持ち帰って縫ったことがよくあった。
- ② 校庭で練習するのが当たり前で、あの講堂（体育館？）で始めた時は床の滑りに慣れるのに手間どった。
- ③校庭の砂場で「スライディング レシーブ」の練習をして、胸を強打して息を詰まらした事があった。（結局うまくいかず、最後まで出来なかった）
- ④バック陣からも攻撃出来ないかと思い、バックライトの貴兄から（新井くんだったか？）トスを上げてもらってバックセンターの自分がサーブ風に打つ練習をした事もあった。（当然オーバーハンド。もちろん、うまくいかず）
- ⑤少しでも強いサーブを打ちたいと、ランニングサーブを練習をした。（これは実戦でも役に立った事がある）
また、親指を中側に折り、親指と人差し指の面（手の甲の側面）でサーブした事もあった。
- ⑥早弁（2 時間目？）を済まして、昼休みにはもっぱらサークルパスを楽しんだ。
- ⑦本当はサッカー部に入りたかったが、サッカーシューズが手に入らず諦めた。（サッカー部にとっては好運か？）
- ⑧コーチも監督もいないのに、良くやったと思う。（すべて自習）
岩谷先生が部長だったが、実技の指導はなし。
- ⑨「バレーボール」（だったと思う？）という解説本があり、「パスの仕方」などの写真があったのを覚えている。
- ⑩大学などの試合を見に行った事もあった。
慶応大のバックセンターに当時すでに有名になっていた松平隆康（元全日本監督）がいて、ポマードでしっかりと七・三に固めた髪に鉢巻きをソッと乗せていたのを覚えている。
また、実業団では「東レ九鱗会」が有名だった。

書いてる内に少しずつ記憶が戻ってきた。

だが、これが精一杯だ。

開成バレー部で学んだ事は多いが、何と云っても大きいのは

《チームワーク》

の大切さだった！

（記憶違いが多いと思うが、カンペン かんべん）

―――よろしく頼むよ、ナベ様―――

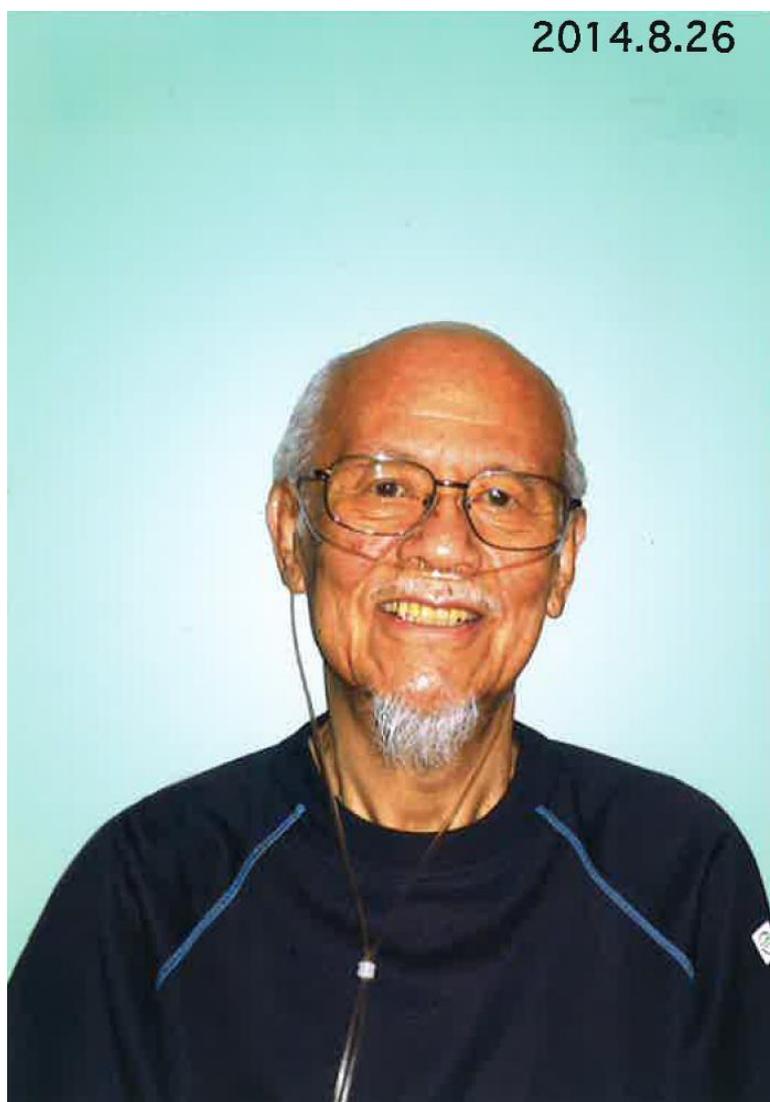
ヤー、ご無沙汰してます。
今回は世話役をお願いしており、感謝してます。

老生、
原因不明の「膿肺（肺に水がたまる）」になり、酸素ポンベを手放せない状態なので欠席せざるを得ません。

残念です！

諸兄によろしくお伝えください。

この八月に撮った写真を同封しました。
(かつての美少年も、形無しです)



2014.10.22

塚田謙仁

バレー部の思い出

渡辺 泰(昭和 27 年)

自営さん、吉村さんから電話をもらって吃驚でした。お二人とも元気そうで何よりでした。あれから 70 年と聞いてすっかり忘れていた開成時代思い出しております。

小生若干足腰が弱っていますが、小康状態でまだまだ頑張れると思っています。子供 3 人で孫 7 人です。十何年か前に妻がスイミングスクールで遊泳中、脳内出血で救急病院に入れられました。記憶障害の後遺症が残り、今では認知症です。徘徊があるので、私が老老介護でつきっきりです。本人にはGPSを持たせているのですが、目が離せません。声をかけていただいたのにそんなわけで欠席させていただきます。

出野さん

出野さんの優しい指導で、初めてバレーボールを手にしました。いつも突き指でした。出野さんが試合中ジャンプして足首にネットの下がからんだのを覚えています。当時はネットの幅が広がったけれど、あの人は膝をまげてジャンプしていたと思います。いつもにこにこして面倒見てくれていました。

うさぎ跳び

よく塚田さんにうさぎ跳びやらされました。日暮里駅で足が痛くて後ろ向きになって階段を下りたのを覚えています。

土浦の合宿

初めての合宿で楽しかったことよく覚えています。夜受験勉強していたのが忘れられません。よく動き、よく勉強する。開成だからでしょう。

練習

監督がいないで自主的にやったこと。練習が嫌になったことがなかった。楽しい思い出だけです。

食べ物

当時は食べ物がない時代で、思い出すのは「なにはや」、今川焼、アイスなど空腹の練習後楽しんだこと。ある試合の昼に野水さんからもらった真っ白いパン、美味しかったと忘れていません。

コート

校舎前の砂の運動場、うらの「日暮し幼稚園」跡の地ならししたりして作った土のコート、天井の低い体育館、よく我慢して練習した。

試合

塚田さんの「開成ファイト」、一度東京大会で準決勝に勝ち残ったりした。

色々あったけれど、とにかく懐かしい思い出です。

よろしく

編集後記

開成バレー部があと2年で70歳になります。

開成バレー部は昭和22年に、出野先輩（昭和24年卒）を中心に誕生しました。

そのころを知っておられる大先輩方に、その当時の記憶を語っていただき、それを開成バレー部の部員全員に知ってもらおうと、この企画をしました。

昭和26年卒の渡辺先輩に音頭を取っていただき、同期の吉村先輩、野水先輩、近藤先輩、昭和27年卒の新井先輩、昭和30年卒の進藤先輩、小西先輩には、座談会で楽しい話をたくさん聞かせていただきました。

昭和25年卒の大瀧先輩からは、ご寄稿を頂きましたが、この冊子の出版を待たずに逝かれてしまわれたことは、残念でなりません。

昭和26年卒の塚田先輩、昭和27年卒の渡辺先輩からもご寄稿を頂きました。

このように、多くの先輩たちが作ってくれた開成バレー部が、岩谷先生、伊藤先生、上迫先生、中村先生、栗原先生、奥山先生、宮先生、須藤先生というすばらしい指導者に支えられ、70年の歴史を刻んできました。

そして、これからも若い世代が、開成バレー部が大切にしてきた、「チームワーク」の伝統をしっかり受け継いでくれることを期待しています。

佐藤 勇（昭和40年卒）

各学年から思い出の記

昭和26年卒

吉村 功

昭和21年の4月に開成排球部は誕生しました。私は2学期に入部しました。遠い遠い70年前のことで少しずつ思い出しながら書いています。間違えがあるかもしれませんが。最初はどの様に募集したかも分かりません

二階の教室から運動場というか庭で円陣パスをやっていました。

なんとなく楽しそうでしたのでいつの間にか其の円陣の中に入れてもらいました。長谷川君とか1日の長がある人が何人かいました。

上級生は4年の(旧制)の出野寛二さんと鈴木さんの二人でした。後は全部二年生でした。鈴木さんはマネージャーでした。長谷川君、川崎君、高橋君、木尾君、佐藤君、渡辺君、塚田君、近藤君、野水君、吉村を出野さんがまとめてくれました。

しかし他校と試合ができるチームにはほど遠い状態だったと思います。

出来立てのチームでしたので出野さんにご苦勞を掛けました。その出野さんも数年前にお亡くなりになりました。実に残念です。

出野さんが卒業し高3に大滝さんが転校されてきました。それと1年下に渡辺 泰君。岡部君。佐伯君が前衛に 永峰君が中衛 荒井君、が後衛で育ち始めてきました。

我々が高2になったときやっと試合ができるようなチームになりましたが試合に勝ったという記憶がありませんでした。大体1回戦で負けていたように思いますが、開成高校の近隣の学校との練習試合では勝ったり負けたりの状態だったと思います。

この時期になりますと高2で残ったのは、渡辺君、塚田君、近藤君、野水君、吉村の5人でした。

チームの中では高3の大滝さんがずば抜けていました、しかしあとの8人が大滝さんとの隔たりがあり、なかなか得点には繋がらなかったと思います。

その大滝さんも 昨年なくなりました。

高3になり前衛レフト岡部 ,センター渡辺泰、ライト佐伯、中衛のレフト野水と近藤、センター吉村、ライト永峰、後衛のレフト渡辺自営、センター塚田 ライト荒井がチームとして頑張りました。その間中学生も育ってきましたが我々が高3の時は高1がおりませんでした。

中3にはレベルが高い部員がそろっていました。

高3の春の大会(憲法大会と言った様に思います)で1日目を勝ち残り当時の顧問の岩谷先生に報告に開成に行き是非明日は来てくださる様をお願いしました。おそらく先生も驚

いたのではないかと今思っています。翌日準々決勝か準決勝に進みました。最後の相手が都立城南高校だったと思います。

その時のコート周りにはあまり人だかりがなかったように思えますのでベスト4までいったのかもしれませんが。最後の決勝を見たときは夕方になっていました。

春の関東選手権大会に選ばれ1回戦で都立千歳高校を破り神奈川の武南高校に負けました。理由にはならないかも知れませんが夕方暗くなりボールが見えませんでした。

夏、初めて合宿を茨城の阿見町の水戸屋旅館に宿泊して日本体育大学のコートを借りて練習をしました。霞ヶ浦の湖畔で練習が終わると泳いだのを思い出します。

日本体育大学と練習試合をして2-0で勝ったのを思い出します。日体大がベストメンバーだったかわかりません。

合宿の間土浦一高とも練習試合をしました。見るからに強そうで全員坊主頭で日焼けした逞しい体つきをしているので驚きました。確か2セットと21対16位で負けたと記憶しています。

秋の関東選手権に高3は関西に修学旅行のため1日目は出られませんでした。2日目2回戦目の最中に横浜の翠巒高校にやっと我々はたどり着きメンバーチェンジをしました。記憶は定かではありませんがベスト8だったと思います。夏に練習試合をした土浦一高は準優勝でした。その後先輩の出野さんが理科大のチームを引き連れて開成のコートで練習試合をした事がありました。2-0で勝ちました。でも出野さんも喜んでくれたことを思い出します

当時の開成バレー部はどんなチームだったのでしょうか。今考えるのに比較的サーブが安定していたのではと思います。中衛からの両翼は重いスパイクでした。前衛のコンビも良く取れていたと思いますレシーブも穴がなかったのではと思います。

コーチもなく基礎も分からないで、ただただバレーボールが好きで高校時代を過ごした集まりだったのではと思います。

私は大学に入り体育会でバレーボールを続けました。どの様な練習をしたらいいかと尋ねられますが、ひとりひとり特徴があります。が大事なものは耐空力(ジャンプ力)とバレーの基礎を学んでくださいそして自分に合う形を見出してくださいといつもお話しています。

昭和31年卒 32年卒 (写真での投稿)





鎌田明加菅田
液田藤原村



明加田鎌
液藤村田



昭和34年卒

記録なし記憶あいまい

石束 晃一

卒業してからほぼ60年 ぼけの進行を実感している私に 部史編集に協力せよとの要請がありました「今のうちにまとめておきたい」という佐藤編集委員長の考えには全面的に賛成ですが はたして私がお役に立てるかどうかわかりません 試合の記録なし記憶もあいまいですが 思い出すまま書いてみます

草創の記

原稿を書くにあたり 過日お送りいただいた「開成バレーボール部草創の記」を読み返しました

大先輩の皆さんの記憶力には圧倒されました 小西 進藤両先輩の以外は名簿でお名前を存じあげるだけの方々です 座談会や寄稿文を読んで当時のご苦労 雰囲気は良く分かりました

中学入学とバレーボール部

昭和28年 ちょうど草創記の先輩方が卒業されたあとに入学したことになります 中1から卒業まで部活はバレーボール部ひと筋でした

コートは砂というより小石混じりの校庭 同期の新入生は私を含めて6名（澤田 渡辺 杉山 多田 折戸 折戸は若くして亡くなりました）2年生部員なし 3年生は播磨 長田両先輩 このお二人にはずいぶんと「かわいがって」いただきました

中学チームはその後入部した後輩諸君の活躍で次第に「チームらしく」なりました

高校チームは高1（31卒）高2（30卒）とも部員数は充実していたようですが あまり試合を見学した記憶がありません 中学生から見て高校生は「怖いおじさん」でため口で再三叱られました

中学高校を通じて対外試合をするための員数集めが課題でした 私も中3で高校の試合に出ていました 残念ながら戦績については語るべきことはありません 当時練習も殆ど屋外で体育館はあまり覚えていません テレビで最近の試合を見ていると「卓球」と「ピンポン」以上の差があり 今昔の感があります

うさぎ跳び 腹筋 かめ

そんな弱小チームでしたが練習は熱心にやりました 記憶に残っているのはアタックレシーブサーブより練習前後のウサギ跳び 腹筋 かめです

うさぎ跳びは説明不要でしょうが「腹筋」は仰向けになって両手を首のうしろにまわし膝を伸ばして足を地面から5cmくらい上げたまま30cmくらいまで上下するもの「かめ」は

しゃがんで足首を持って歩きます 部の良き伝統でしょうか 草創の記にもありましたが
これはきつかったです

腰痛に悩む昨今 本当に体のために良かったのかどうか 考えます 後輩諸君にも強制し
た私としては何とも言えませんが

合宿と上迫先生

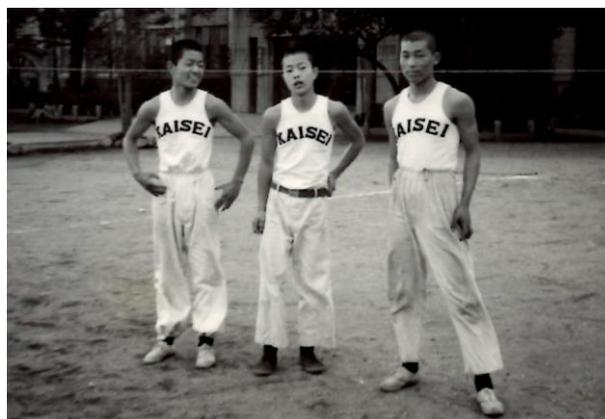
ある年 夏合宿で神奈川県追浜へ行きました 私どもが入学する前年のオリンピックヘル
シンキ大会でメダリストになられた上迫忠夫先生が部長（顧問？）として参加されました
器械体操部と合同だったと思います 関東学院大の体育館を借りて練習しました 他校の
バトミントン部と一緒にでしたが選手たちはバテると体育館の外へ連れ出され頭にバケツか
ら水をかけられていました

「これが運動部というものか うさぎ跳びで悲鳴をあげている我々は何なんだ」とショッ
クでした

合宿中のある晩先生と 町の飲食店に入りますと大男の米兵が二人 テーブルをはさんで
ビールを飲んでいました 間にあるジョッキは一つ 把手が二つあって直径15cm以上高
さ25cmくらいありました

このジョッキから二人が交互にグイグイと飲んでいました 何故か軽いカルチャーショッ
クでした その際上迫先生からビールをご馳走になったかどうか昔のことで忘れました
先生とはOBになってからも何度かご一緒する機会がありましたが その温かなご性格と
立派な酒量が忘れられません 先生が亡くなられたとき（昭和61年）は駅から葬祭場ま
で制服の在校生が間隔をおいて並んで会葬書の案内とお見送りをしたものです 先生が亡
くなられて今年（2016）は30年になります

駄文にお付き合いいただきありがとうございます 最後に部誌編集をされる後輩諸君に
心からお礼もうしあげます



昭和35年卒

33年記

平松 久和

34年組は、阿部、菅原（3兄弟の中）、山下、中島、戸張と平松です。31、32年は（私は中3から入りましたので）草創記の先輩方が多数練習にこられ、大いに励まされ充実した日々でした。32年上迫先生が練習に出られてみんな元気づき、先生のジャンプ力に驚嘆致しました。またその後先生のお宅に呼ばれ、楽しいお話し、おいしい料理とメダルに感激しました。練習では野水先輩とパスをはじめるとボールが手許でビューッと迫ってきてびっくりしました。また長田先輩は練習後語って、土手を女子を乗せてバイクで走ると空気銃で撃たれたと足の傷を見せてもらいました。カッコいい！映画の一コマのようです。33年、私たちに代が替わると、偉大な先輩達は大学卒業となり練習への御参加は吉村先輩ともうお一人です。身体能力の高い新人が多数入ってきてみんな元気で練習してました。しかし試合は全敗だったと思います。一度だけテストで2回戦は棄権と言いにいった憶えがあるような。何とかしようと、1点とったら集まってみんなでゲロゲオと叫ぶとかしました。また主砲が身体が固そうだったので、まずはこれからと柔軟体操で背中をみんなで押しこんだらおこらせちゃいました。ウサキ飛びはよく罰で回りました。

そんな中で一人が練習の最中に世間話をしだしました。応える者は一人だったのですが、いつの間にかほぼ全体に広まりました。全員一列に並ばして端から平手打ちしました。手をあげた先きに2階の職員室が見えました。

中村先生は、33年は数度練習に出て下さり、その時はみんな元気になりました。先生の日体大卒業時、総長から授与された銀時計にはみんな目を見張りました。

後日私が教員になったとき、生徒らがミーティング、ミーティングと言っているのを聞いて、すぐ、そうだあの時に知っていればと後悔しました。当時のみなさんごめんなさい。中村先生は34年から指導に入られたようです。その頃お会いすると中村先生は一言おっしゃいました。「お前らはくさった鯛だ。」部員に部活が身につけていないんだと受け取りました。思わず目を伏せました。

卒業後は夏の合宿に参加させてもらいました。岩井、追浜、神城、今思い出してもなつかしいです。神城の合宿所に着いて部屋に上がると生徒らがいた。中村先生は急に机をドーンと飛ばして「何だ！お前ら、何故俺に言わず帰ったんだ。」大変怒っていました。例のテスト前は2回戦棄権のことらしい。まだ続いているのかと思った。先生ご葬儀のとき、何とか女子校のというのを聞いて、先生はそっちに夢をかけたのかと納得した。あれ！いつから合宿の案内は来なくなったのでしょうか。

戸張はどうしたのでしょうか。阿部君は病気療養中です。菅原君は亡くなりました。中島君はわかりません。山下君はまだ現役中で不動産を動かしています。

楽しかった日々、すばらしい先輩たち、特にお世話になった石東さん。何度も叫びましたよ。部員のおしゃべりはその後も続きました。

昭和36年卒

バレー部の思い出

弁護士 小田木 毅

1. 私は、昭和30年4月開成中学入学、36年3月開成高校卒業にて、現在74歳であるので、開成バレー部でバレーをやっていたのは今から60年も昔のことである。
2. バレー部に入った動機は、中学1年のとき、背が低く悩んでいたところ、眞島綱夫先生の保健体育の授業で「背が伸びるのは夏、体重が増えるのは秋」と教わり、背が伸びるといふ夏の合宿でトスをやっていたら、背が伸びるのではないかと考えたからであった。これは、効果てきめんで、中3、高1の夏に毎年7~8cm背が伸び、現在は177cmにて身長は見劣りしない。
3. 中学2年、3年の夏の合宿は、追浜の、学生が帰郷してガラ空きの関東学院大学の学生寮が宿舎で、歩いて10分位のところの中学校の体育館と運動場で練習をした。当時は、ヘルシンキオリンピック銅メダルの上迫忠夫先生がバレー部と体操部を掛け持ちで指導されていた。高校1年の時に、日体大銀時計の中村博次先生が赴任され、バレー部を専任で熱心に指導された。
合宿中の練習は、先輩がきてくれ、結構きつかった。合宿明けの帰宅時、駅の階段の昇り降りに脚の筋肉痛でヒイヒイした。
練習中に水を飲むことは厳禁で、ヘマをすると罰としてうさぎ跳びや亀歩でコート一周などということがあった。
その後、夏の合宿としては、長野県白馬や山中湖での民宿、春の合宿としては千葉県岩井海岸での民宿に行った。
4. 山中湖での合宿の時であった。落語の「てんしき」(註)を知っていた先輩OBが民宿のお嬢さんに生徒たちが「てんしき」を欲しがっているのをお願いします、と頼んだ。お嬢さんは食べ物だと思って、父親の主人に告げたところ、落語を知っていた主人は笑いこけてしまい、我々も大笑いをしたことがあった。
註：「てんしき」【転失気】落語。医者 of 言った「転失気」という語が「屁」のことと知らなかった和尚が、その意を尋ねに行かせた小僧から「盃」のことだと嘘を教えられ失敗する。
5. 当時の部員数は、中学、高校ともそれぞれ7~9人で、中学の大会に9人揃わず、高1から1人借りたり、高校の大会に中3から1人借りたりして辛うじて9人揃えて出場したこともあったが、大体1回戦で敗退して、2回戦に進むことはなかった。
6. 当時のチームのメンバーは、フォワードレフト三崎哲郎、センター三浦宏元、ライト谷川進、ハーフレフト板橋功定、センター増田邦彦、ライト市原喜之、バックレフト菊地武昭、センター小田木毅、ライト大木豊(故人)の諸氏であった。

中村博次先生がチーム補強のため、バレー部入部を誘ったのが、背の高いフォワードレフトの三崎哲郎君とセンターの三浦宏元君であった。

三崎君のアタックのボールはグラウンドの塀を越えて外に飛び出してしまったことがよくあった。

その三崎君は、52歳で陶芸を始め、65歳で日本伝統工芸展に初入選、連続4回入選して68歳で日本工芸会正会員に認定され、その入選作は毎年全国の三越での巡回展にて展示されており、今やこの道の達人である。

バレー部当時、彼にこのような才能がひそんでいるとは誰も思いもよらなかったが、このような友人がでたことは嬉しい限りである。

7. 卒業後も1、2回は合宿にOBとして参加したが、鍛えた後輩のなかに、昭和43年卒の高名な飯村敏明知財高裁部総括判事兼所長がおられたことを開成法曹界の席で本人から打ち明けられビックリした。
8. 中村博次先生とは、卒業後家庭教師の口を紹介してもらったり、一時ご自宅の町屋のアパートの2階を借りて住んだり、いろいろお世話になった。長男智博君の仲人を務めさせてもらった。
9. 今になって、バレー部に入ったお蔭で身長が177cmに伸びたこととバレー部合宿中のきつい練習をなんとか乗り切った経験が後の大学、司法試験受験、コロンビア大学ロースクールマスター取得の勉強に当っての精神的強さにつながったと感謝している。

近況について

1. 私は現在弁護士47年目にて、毎日事務所にて執務し、裁判所等にも出かけている。また、上場会社の社外監査役や諸団体の役員も掛け持ちし、結構忙しい毎日を送っている。
2. このようななか、4年半前、私が仕事で海外出張中に家内がスキー中脳内出血で倒れ、右半身不随と失語症の後遺症が遺り、初台リハビリテーション病院に6カ月の入院後、現在は長男家族との二世帯住宅に暮らしている。家内は杖をつきながらも自分のことは何でもできるまでに回復しているが、利き手の右半身不随のため家事ができず、朝、夜の食事や洗濯、入浴、車椅子での外出等専業主婦のような仕事も同時にこなしている。
ここでもバレー部で鍛えた身体が役立っているようである。

2016.11.24 記す

昭和37年卒

開成バレー部の思い出

安井 高明

私は台東区で育ち、住み続けて73歳の今日に至っています。

中学受験について私自身は特に考えもせず両親の言うがままに開成を受験し入学できました。

校門（現在と同じ位置）から入った左側に校舎があり、右側にはグラウンド、それを囲むように各クラブの部室がありました。

先輩たちから各クラブの紹介をされ、排球部からの誘いによって

入部しました。小学校では特別の運動はしていず塾通いの日々でしたが、開成中学入学を機にそれ迄と一変した生活が始まりました。先輩たちの厳しい指導のもとに、一緒に入部した友人達との楽しく苦しい部活動が開始です。先輩が投げってくるボールをなかなか打ち返せずとんでもない方向へ飛んでいってしまい、そうすると御仕置としてコート一周の「ウサギ飛び」が待っています。時には数週のこともありました。思い返してみると、よく続いたものと我ながら感心しています。勿論その頃は九人制でした。中三になるとポジションが決められ試合に出場できるようになりました。

我が家の前にある、御徒町中学校（現御徒町台東中学校）を会場に試合をしたこともあります。現在は都大会で優勝をしています。

（練習がそれなりに厳しいようです）

最初の合宿は追浜だったと記憶があり、昭和31年頃はまだ食糧難の名残りでお米を持参しました。先輩達が指導の為に合宿先に駆けつけてくれました。普段の練習通りボールをうまくうけられないと

「ウサギ飛び」のしごきが待っていました。熱中症という言葉もない時代で、水分補給にもあまり気を使わなかったと思います。

夜は疲れ果て即就寝という次第です。この様な合宿生活の中で先輩と親睦が図れて良かったと思います。

入部時と卒業時のメンバーは変わっていますが、排球部の活動に励む学園生活の中で卒業できたことは振り返れば大変しあわせなことです。

卒業して約55年の歳月になりますが長いようで短かかったです。

今でも会合の後に良き仲間（先輩・後輩）と酒を飲み語り、この上ない幸福感を味わっています。

平成28年10月28日

昭和38年卒

ネットを挟んで60年《開成 VS 麻布定期戦に思う》

芥川 修

開成学園排球部が歴史を刻んだ70年の中で我々世代は60年を過ごしたことになりますが、その歴史の中で最も多く試合をした相手は麻布学園だと思います。お互いの文化祭に招待しあい、三校リーグ・五校リーグで対戦し、今年で35回目となる開成 VS 麻布定期戦が毎年4月に開催されています。お互いを私学の雄として意識し合い自然と交流を深めたものと思いますが、中学で初めて麻布との試合に臨んだ時は衝撃でした。当時私立男子校の生徒は皆5厘刈りの坊主頭が当たり前と思っていた私の前に現れたのは髪をふさふさと伸ばして垢抜けたメンバーで坊主頭は一人しかいませんでした。下町カラー丸出しの開成に対して麻布は山の手というのが第一印象でしたが、中学入学早々にボートレース応援で厳しい洗礼を受けて新たに対校戦意識という感覚を植え付けられていた我々世代にとって、何となく麻布だけには負けたくないという意識が芽生えていたように思うのは私だけでしょうか？ 以来60年…現在に至るまでライバル意識を持って毎年試合を続けるなんて思ってもみませんでした。



〈昭和34年11月3日 開成文化祭にて開成&麻布中学メンバー：開成中学グラウンド〉

高校卒業後に麻布とバレーボールの試合をした覚えはありませんでしたが、よもや又その機会が訪れようとは思ってもみなかったところに昭和57年に始まったのが開成 VS 麻

布定期戦の中で行われる超 OB 戦です。高校、中学の現役戦と卒業後間もない世代の OB 戦に加えて年齢30歳以上で戦う超 OB 戦は昔懐かし9人制でロートルでも出場可能と言う事だったので、おっかなびっくり顔を出したところ、麻布コートのフォワードセンターに同期の嶋田君を見つけて一瞬中学時代にタイムスリップした感じの興奮を覚えました。以来この時の興奮が病み付きになり、毎年興奮を求めて試合に出場しています。今では出場選手の最年長になりながらも嶋田君とはお互い先に引き下がるわけにはいかないと意地を張り合っている感じですが、流石に70歳を超えての試合出場は厳しい為、そろそろお互い引き際と思っていたところで新たに定期戦の勝敗には関係ない50歳以上の超々OB戦が新設されるとの事ですので、又々バレー寿命が延びたかなと思っています。果たしてネットを挟んだ勝負は何時まで続くのでしょうか…？

近年、定期戦の対戦成績は開成現役陣の充実で麻布を圧倒し続けている為、麻布は超 OB 戦だけはなんとしても取るとの意気込みでおり、毎年麻布昭和40年卒の平塚君から頂く年賀状には「今年の超 OB 戦は絶対麻布が勝つ！」の一文が必ず添えられています。

定期戦後に開かれる中学・高校・OB 全員での懇親会と肩を組んでのエール交換にも昔を思い出して熱が入りますが、何時までも素晴らしいライバルとして勝負し親交を深めていきたいものです。



〈平成17年4月10日 開成&麻布超 OB 戦メンバー：麻布学園中庭〉



〈H19.4.8 開成超 OB チーム：麻布旧体育館〉 〈H27.4.5 開成超 OB チーム：麻布新体育館〉

創部 70 周年今昔 昭和 22 年～平成 29 年
(1947 年～2017 年)

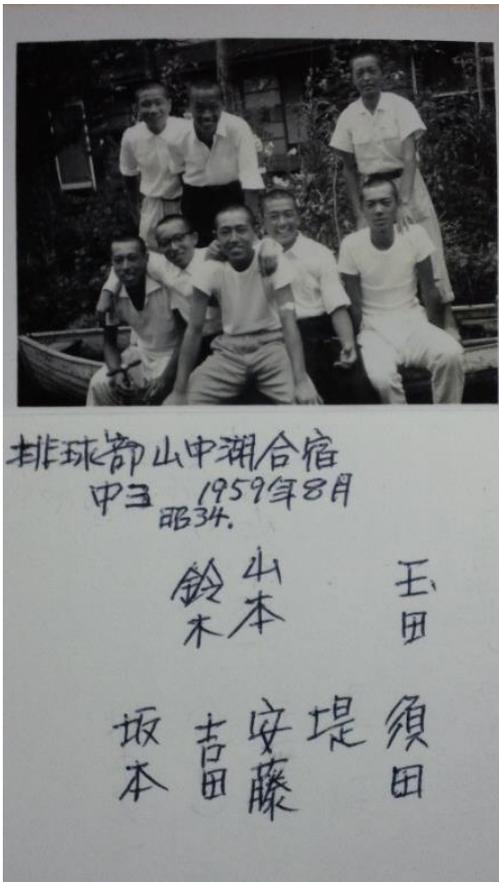
玉田 恒久

中1入部当時は創部10年という若い排球部でした。OBもまだ少なく、組織的なものはありません。それでも、昭和26年卒の吉村さんを始め数名のOBの方々からは練習をみていただきいつも楽しい交流がありました。先輩方は皆さんやさしく和気あいあいの雰囲気でしたが、昭和32年卒の播磨さんの叱咤激励はとてすごいものでした。当時、高1の平松さんや中3の三浦・三崎さんの代の方々へは“それはもうコテンパン”。我々、中1中2の子供たちに危害？は少なかったのですが、ある意味“新鮮な練習会”となりピリッとしたものとなっていたように思い出されます。

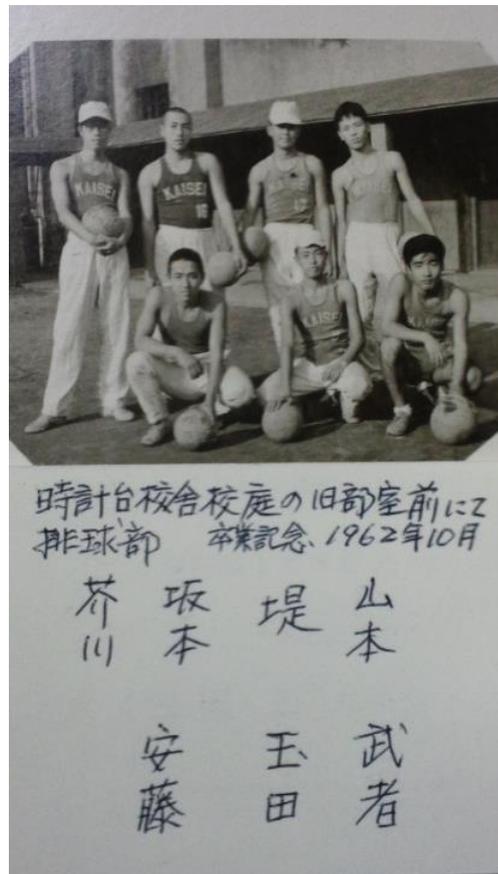
当時、ご指導いただいた顧問の先生方は岩谷先生、石橋先生そして昭和27年ヘルシンキ五輪器械体操銀銅メダリストの上迫先生、ご自身の身長半分程の垂直ジャンプ力でのバレーボール裁きは目を見張る華麗なものでした。

中1、中2時代の夏合宿は器械体操部と共に追浜、中3からは新卒赴任の中村先生ご指導のもと山中湖。14、5才で既にOB風体の者が若干名いたことが添付写真で分かります。

<昭和34年8月 中3山中湖合宿>



<昭和37年10月 高3卒業記念練習会>



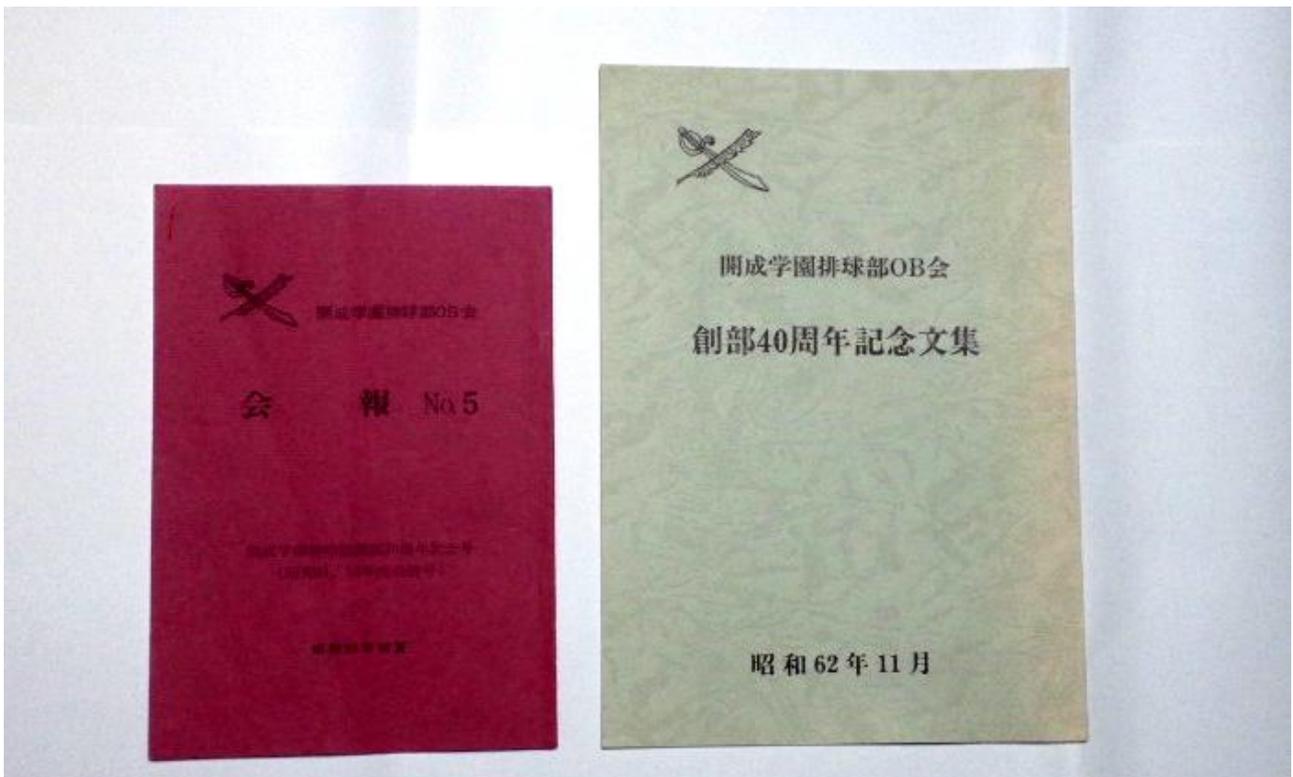
高校時代には麻布、東邦との三校リーグ(春・秋)と日比谷、小石川、上野、麻布との五校リーグも創設されて試合数も徐々に増えていきました。昭和36年度の高2では年間33試合をこなし、11月には六人制大会も初めて導入されました。

<昭和36年度33試合 戦績 21勝12敗>

7 15				25		6 10		14		5 7		5 6		22		4 19		月 日
0 1 2	2 1 1	0 1 2	2 1 1	2 1 0	2 1 1	2 1 0	0 1 2	2 1 1	2 1 0	2 1 0	2 1 0	2 1 0	0 1 2	2 1 0	0 1 2	セ ット		
小石川	日比谷	聖橋	雪ヶ谷	江北	竹早	東邦	化工	藤城	志村	成城	麻布	東邦	新宿	豊昭	聖橋	対 戦		
同	五校 リーグ	同	同	同	全日本 予	(練習)	関東 本	同	同	関東 予	同	三校 リーグ 春	同	都大会 予	(練習)	備 考		
12 3		23		17		10		11 5		24		10		9 3		7 16		△ 昭和36年度成績 21勝12敗 ▽
0 1 2	1 1 2	2 1 0	0 1 2	2 1 0	2 1 0	2 1 0	0 1 2	2 1 1	2 1 0	1 1 2	1 1 2	2 1 0	2 1 1	2 1 0	1 1 2	2 1 0		
明治	鶴ヶ丘	日大	城北	聖橋	小石川	日大 豊山	岩倉	日黒	武蔵 ヶ丘	麻布	東邦	明大 中野	藤城	北野	駒込	麻布	上 野	
新人 本	私学 祭本	同復活 戦	同	同	新人 予	私学 祭予	同	六人 制予	同	三校 リーグ 秋	同	同	同	同	団体 予	同	五 校 リ ー グ	

平成22年に2年後輩OBの佐藤勇さんから誘われるままに2年間ほど土曜午後の中高練習に顔を出し孫世代の現役後輩たちと接する機会がありました。我々世代と比較して、雲泥の差とも言えるチーム統率力とシステムチックな練習、何よりも部員数が多かったことに驚きました。六人制でも部員が多いことはとても頼もしいことです。若い顧問の先生方やOB達の熱意ある指導ですくすく成長していく姿には大いに感銘を受けました。重要な大会を控えてのなぜかエース級メンバーの捻挫、試合途中での思いもよらぬ精神的な脆さ、大会と中間考査日程との重複、等々の不安定感が我々の現役時代を重ね合わすかのような不思議な感覚もあり益々愛着を感じました。そして中高現役とOBが強い絆で結ばれていることも確認できました。その孫世代の若者たちももう卒業の時期となり、これから良きOBとなって現役部員を側面から支え、心身共に健康で立派な社会人へと巣立っていくことでしょう。毎年の代替わりと引き継ぎを繰り返しながら、この“継続”の力を輝く未来に繋いでいくことを祈念いたします。創部70周年！まことにおめでとうございます。

<中1最初のユニフォーム・高校使用の運動帽・卒業記念マスコットボール>



<創部30周年記念号・創部40周年記念文集>

昭和39年卒

我ら昭和39年卒

宮崎 直樹

我々は昭和39年に高校を卒業した学年である。終戦の年（昭20年4月—21年3月）に生まれ、翌年から始まる第一次ベビーブームの直前の人口の最も少ない谷間の世代でもあり、今から思えば戦争の爪跡が色濃く反映された年代でもあった。

開成バレー部で我々はどんなチームであっただろう。私は中2の秋に入部したので、試合に出るようになったのは中3からであった。4月の麻布対抗戦からスタートし、多くの練習試合を含め、連戦連敗であった。しかし夏を迎え、山中湖の合宿を経て秋になるころ、逆に連戦連勝となった。井上、鈴木の両エースを擁し、バックで守りを固めている私も負ける気がしなかった。10数連勝を重ねたあと、11月の私学祭の準決勝あたりで初めて敗れてシーズンを終えた。

高校生となった年に6人制が導入され始めた。しばらくは9人制との併用で、卒業するまで、公式戦は9人制が主であったと記憶する。6人制はまだ新しい試み、という感じで、プレーはスローで、トスはともかく高く上げろ、と言われた。サーブ権が無いと得点にならず、実力差が大なる時は、15-0でセットを失うこともあった。（勝つこともあったが）。高校からの入学者からたくさんの入部者があり、高1の夏の岩井合宿はにぎやかであった。腰から下の球に対するレシーブについて、下に潜り込んで回転しながらでもオーバーハンドでのレシーブにこだわる我々に対して強豪小岩1中からの入学者菊池はアンダーハンドの組み手レシーブで良い、と強固に主張し何度もケンカになったが、半年も経たずに決着した。私も含め、誰も下に潜り込まなくなったのである。6人制はこのようにバレーの技術に大きく影響を与えていった。

高校においてもフォワードライトの鈴木、ハーフレフトの井上の破壊力が際立つチームであったが、関東大会出場等の戦績を残すことはできなかった。5校リーグなどがスタートしたが、思うように勝てず、悔しい思いをした。いずれにせよ我々の年度だけでチームが組めることは少なく、1級上の山本先輩、芥川先輩らをはじめとする猛者達や、下の学年の佐藤、萩原、杉野らとでチームを形成していた。

私の開成での現役時代は3-4年であり、高2夏の神城合宿などのそれなりの思い出はあるが、むしろ卒業後のOBとしての間の印象の方が大きい。期間もはるかに長いこともあるが。私が入部したときから顧問は中村先生であり、私にとってはバレー部といえば中村先生であった。先生は合宿等にどんどんOBを招集した。まさに召集であり、大学生の間は後輩の面倒を見ることがほとんど義務である、現在の開成バレー部OB会を今の形に創り上げた功労者である。

私は農工大でバレーを続け、大体同じ時期に上智で鈴木が、東大で佐藤が、少し後に学芸大で片野（昭）がバレー部で主将などの主要なポジションで活躍し、開成バレー部OBで

あることを大きな誇りに感じた。

勿論大学ではバレーを続けない者も多い。もう一方のエース井上は慶応大学に進学し、ヨットなどの若大将的（私の勝手な印象だが）な学生生活を経て名門企業鐘紡に入社した。彼は中学、高校の開成バレー部それぞれの部長としてチームメートを支えてきただけでなく、我々昭和39年卒学年の中心とも言える人気者でもあった。高3で青組団長を務め、卒業後何年か後の熱海での同期会の大宴会場で彼が音頭をとって浴衣姿の全員で棒倒しを再現する、という腕白を繰り広げたことが忘れられない。

鐘紡では順調に昇進を重ね、40代早々に主力鈴鹿工場の工場長となった時は、「いよいよ念願の現場です」と年賀状で張り切っていた。

正月元旦のニューイヤー駅伝の鐘紡チームの応援で駆けつけ、テレビに登場したりした。彼がこのように現場を大事に思う意識を身に付け、運動部を応援するのは開成バレー部で部長を続ける間に培われ、彼の人格として形成されていったに違いない。

人事部長として東京本社勤務になって間もなく、腰の痛みを訴え、翌年あつという間に肝臓がんで世を去ってしまった。まだ52歳であった。

平成に入り構造不況とリストラの嵐に見舞われた鐘紡での人事部長としての彼のストレスはいかばかりであったろう。彼は日本経済の曲がり角の時代の荒波の中で命を落としてしまったのだ。

彼は学生時代私にこんな話をしてくれた。慶応の開成バレー部の先輩から「大学4年間の間に一度は何らかの形でリーダーシップをとれ」とアドバイスされた、と。

私もこの言葉を語り継ぎたい。若き開成バレー部OBの活躍を祈る。



昭和38年3月30日 岩井合宿

昭和40年卒

中学時代の話

佐藤 勇

私が中学一年生で開成に入学したのが、昭和34年4月です。

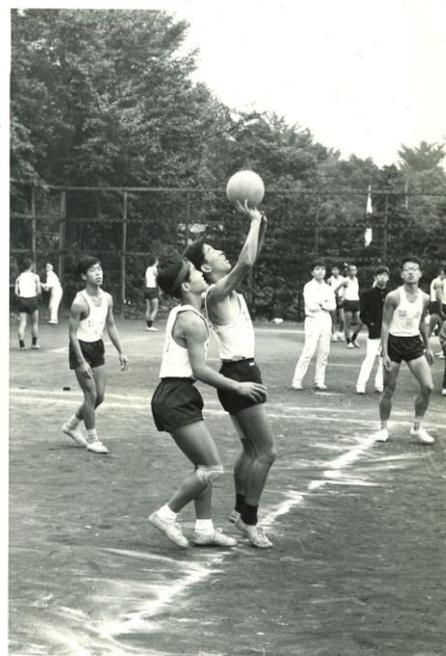
小学校のころは越境で文京区の小学校に通っていて、家に帰ってくると遊ぶ友達もいませんでした。そんなこともあって、中学に入ったら部活に入ってたくさんの友達が欲しかったのです。いろんな部の中で、比較的優しそう先輩がいた（ような気がして？）バレー部に入りました。

ちょうどその年にバレー部顧問の中村先生も開成に赴任して来られました。生徒よりも早くグラウンドに出て、コート準備をされたり、それまで無かった準備運動を作られました。それまでの上迫先生が比較的自由に活動させてくれていた（らしい）のに比べ、なんでも自分流にしようとする中村先生のやり方に、最初は上級生たちは反発していたことを覚えています。

その年の1年生は最初は数人でしたが、1年の2学期までには20人近くまで増えていました。そのころは9人制でFRはエースでキャプテンの中村くん、FCは堤くん、FLは蛭名くんまたは尾野くん、HRは荒木くん、HCは萩原くん、HLは私佐藤、BRは左利きの杉野くん、BCが舘崎くん、BLが加藤くんだったと思います。

3年生になって荒川区の春の大会で強豪荒川七中に勝って優勝しました。そして荒川区代表で都大会に出場しました。都大会は初出場で、みんなコチコチで、何もできずに敗退しました。夏も都大会に出場し、1回戦は勝ちましたが、2回戦であと一歩のところまで負けてしまいました。

ただし、麻布（都大会にも出ていないくせに）だけは天敵とでもいうのでしょうか、勝てませんでした。そのころは春の麻布の文化祭、秋の開成の文化祭で試合をしていました（確か駒場東邦を含めた3校リーグでした）が、1回も勝ったことはありません。そして11月に行われた私学大会で事件は起こりました。優勝を狙っていた開成は、順調に勝ち進み、準決勝で因縁の麻布とぶつかりました。1点を争う戦いを展開しましたが、一歩及ばず、敗戦してしまいました。我々選手は力いっぱい戦ったので、悔いは無かったのですが、中村先生が敗戦に激怒、「グラウンドを走ってこい！」。怒ったキャプテンの中村くんが、「僕ら一生懸命やったのに、なんで怒られなきゃいけないんだ！」と猛反発、私がとにかく彼の腕を引っ張ってグラウンドを走り出しました。そのこと



がきっかけで、部員が退部し4人（萩原・杉野・加藤・佐藤）だけが残りました。高校に行ってから弱体のチームとなり、下の学年と併せても8人しかいませんでした。幸いこの年から完全に6人制に移行したので、試合に出場はできましたが・・・。なんともほろ苦い開成バレー部の思い出です。



昭和41年卒

関東高等学校男子バレーボール大会と横浜公園体育館

西山 祐二

私が開成中学バレー部に入部したのは、中学1年(1960年)の9月に入ってからだった。中学に入学して運動部に入るとは決めていたが、バレー部に入部した積極的な理由はあまりなかったように思う。それでも当時の中学の砂の多いアスファルトの校庭で、無心にボールを追いかけるという、運動に熱中するときの特有な快感を感じていた。

当時はもちろん、中学は9人制の時代であったが、1964年の東京オリンピックを間近にして、6人制移行への機運は高まっており、中3(1962年)の合宿でのミーティングでは、6人制のルール(アンダーハンドレシーブでは組手でないとホールディングの反則となるとか、アタックラインを超えてバックが攻撃に参加できないなど)やローテーション、フォーメーションについての勉強を行っていた。今ネットで調べてみると、大松博文監督率いる日紡貝塚女子バレーボールチームが東洋の魔女と呼ばれたのは1961年の欧州遠征での22連勝がきっかけだったとのことなので、当然、6人制バレーは身の回りに迫ってきており、開成高校での試合はすでにすべて6人制になっていたという頃である。

ところが、突然、「9人制の関東大会予選に出るぞ!」との号令が、1964年(今考えればまさにオリンピックイヤー)に中村先生から下る。1964年のわが高2の部員は4人(西山、益田、永島、由田)、高1の部員は2人(田辺、片野)。6人制なら間に合ったのに、9人制を今更やるには選手が足りない!!

そこで、高3ですでに勉学モードとなっていた3先輩(佐藤、萩原、杉野)に無理やり加わっていただいて、さらに中学生数名も補欠という名前で加え、関東高等学校男子バレーボール大会東京都予選に出場することとなった。

ところが、時代のトレンドはすでに6人制となっており、この年に東京都予選にエントリーしたのはわずか8校。わが開成は、決勝戦にて駒沢大学付属高校に惜敗するも、東京都第2位の成績を以って堂々東京都大会を勝ち抜き、東京都代表の6校に選抜された。

そして、とうとう関東大会本大会出場となり、開催地である横浜へ。日時や移動、宿泊などの記憶は、なぜか思い出せないが、横浜平沼橋近くの平沼高校体育館で前日に練習、本番の9人制大会は、当時、中区横浜公園(現在も同じ名前と同じ場所にある。横浜スタジアムがある)のなかにあった、横浜公園体育館で行われた。この建物は、元は米軍用のフライヤージムという名の室内運動場であったものが改修・改築されたもので、この大会のあった数年後の1972年には老朽化のため取り壊されたと伝えられていることから、当時もかなり古びていたことがその特徴的なかまぼこ型外観とともに強く印象に残っている。一方、6人制の大会も同時に横浜市内で開催されており、そちらの会場は、1962年に開館したばかりのピカピカの横浜文化体育館だった。自分たちの試合後、6人制大会を見

学で横浜文化体育館へ行き、体育館のフロアの床材がきれいに光って、6人制と9人制の待遇の差に愕然としたものだった。

ところで、試合は第一回戦の対戦相手、茨城県の名門、県立水戸工業高校に抑え込まれ、いいところなく一回戦敗退となってしまった。試合終了後、横浜体育館の脇の空き地のようなところで、中村先生から長いお説教をいただく羽目となり、無念の敗退の故かどうか、その時の気持ち自体は覚えていないものの、なぜか涙がこぼれたことだけは、記憶している。開成バレー部初めての関東大会出場は、かまぼこ型の横浜公園体育館と同じように遠い記憶のかなたへと去って行ったが、かつてあのぼろ体育館が確かに横浜の地に存在したように、開成バレー部の関東大会出場の足跡と涙もあの体育館とともに横浜の地に刻まれている。



横浜公園体育館のかつての姿

「みんなで作る横浜写真アルバム <http://www.yokohama-album.jp/>」より引用



関東大会会場前にて

昭和42年卒

昭和36年4月～42年3月の記憶に残っている出来事

片野 清昭

・昭和36年夏合宿（岩井海岸）

私は中1で体育部の合宿なるものは初めてでした。両国駅からSLに乗って岩井駅で下車、民宿で荷をほどき練習所の小学校のグラウンドに向かいました。宿舎には体育館がまだなく、小学校の校庭に向かいましたがコートらしきものはなく、「エッ」と思いましたがコート作りから練習は始まったのです。ポールを支える杭打ちや砂利拾いで半日近くを割かれ、ボールに触れたのがやけに嬉しく感じられたものです。

合宿中には岩井と那古船形の水泳部の宿舎の間を往復するマラソンが行われ、夏真っ最中の中、何とか完走しました。そんな中で高校キャプテン、皆さんご存知のYさん（八ちゃんとも言います）が自分の走りが終わってから中一だった我々を迎えに来てくれたことを思い出します。リーダーの何たるかを示していただきました。

・昭和38年（春か秋か不明）区予選を勝ち抜き都大会出場

学習院女子部の広いグラウンドにたくさんのコートを整備して行われました。私学祭なども行われたと記憶していますが、なかなかの壮観でした。試合の方は1回戦で猿江中に敗戦してしまいました。私事ですが、相手のチームのフォワードレフトに小学校の同級生がおり、当時高級技とされていたクイックを撃ち込まれ完敗でした。

・昭和39年5月16・17日横浜で開催された関東大会に9人制で出場。1回戦で日立工業に敗れる。

現在の横浜スタジアムの脇（今は春になるとチューリップがきれいです）にあった、かまぼこ型の古い体育館でした。中村先生の追悼文集中、S43・5「関東大会会場にて」の写真はこの時のものと思われます。（文末に記念メダルの写真を添付）当時は9人制から6人制への移行期で、関東大会も両方実施されました。開成は駒大高校に次いで東京都予選を2位！で勝ち抜き出場しました。（実は9人制の予選出場は8チームでした・・・）

・昭和40年国体予選でベスト8（於：駒大高校）

今では春高バレーの常連校になった東洋高校を破りベスト8に。技巧のエース・キャプテンの田辺、対角の強打のエース・結城、サブの金森、西野、富部、鶴沢などがまとまって戦いました。その試合後相手が聞こえよがしに「審判校はいいよな～」ときわどい判定に文句をつけていましたが、それは無視でした。準々決勝ではミュンヘンオリンピックの金メダリスト森田淳悟を擁した日大鶴ヶ丘に敗れましたが、身長190cmの高さを実感しました。160cmの片野がセッターで入り前衛の時はアタッカーが2人で右へ左へとブロック

をしていました。大変だったと思います。リベロ制があったらと時代の流れを感じます。

- ・昭和41年関東大会予選（於：聖橋高校） 運動会と重なるも高3も交えて出場
秋に開催されていた試合で当時運動会も秋、受験を前に引退が当たり前の時代でした。すったもんだしたすえ、出場し負けてしまったのですが、運動会の応援団長が体操部で「俺でも出たよ」と言ってくれたのがうれしい思い出です。

- ・昭和41年度支部選抜大会（於：日比谷高校）に田辺（高3）と結城（高2）が選ばれて出場

当時の東京都は4支部に分かれており各支部から選抜されたメンバーで対抗戦が開かれていました。そんな大会にわが開成から2名の代表が選ばれ、その後中央大学で活躍した嶋岡や野田等と戦ったのです。日比谷高校の狭い2階のスタンドから応援したものでした。

こんなこともありました

- ・中学生が高校の大会に出場

「草創の記」によると、当時からの伝統(?)のようであるが、今の時代ではありえないですね。

- ・中学の区大会を旧体育館で実施

天井が低い上、梁で支えられていましたがその梁の間を通すサーブでポイントを取った後輩がいました。

- ・合宿で都立高校の女子部と練習試合をやりました。(岩井だったか神城だったか?)

- ・大会名不明

1セットを取り2セット目のメンバー6人を全部替えたが負けてしまった。

- ・スライディング（今はフライングというのでしょうか）をした後で、T先輩から「のたうち回ってるんじゃないよ！」と非情なお言葉をいただきました。

- ・白馬村の合宿での先輩からのランニング指示を現役が拒否

当時の仲間と会うとよく話題に上る出来事ですが能天気だった私には記憶がなく、何か情報がありましたら加えて下さい。



(関東大会記念メダル 「YOKOHAMA 1964」の文字が見える)

昭和43年卒

結城 教仁

創部70周年おめでとうございます。部史に刻めることたいへん光栄に存じます。中村先生の熱い愛情に包まれ、期待を寄せられながら、お応えできなかつたこと、今でも心残りです。卒業からもう半世紀を経過しようとしています。退職後、新しい夢に向かって歩き始めましたが、同時に終活も考える高齢者になりました。

バレー部との正月は、昭和45年卒の新年会で開けます。毎年小川宗男君（昭45）のご尽力で、途切れることなく続いています。上海在住の小山誠一郎君（昭45）が帰国する春節前後に開催されます。毎回お誘いいただいて恐縮いたしております。この会では、昭和45年組8名に加え、芥川修先輩（昭38）、山本純一先輩（昭38）、佐藤勇先輩（昭40）、片野昭秀君（昭44）、松原秀彰君（昭49）、関茂和君（昭54）、他校から麻布谷山雅裕君（昭43）、小石川酒井文彦君（昭45）の皆さんと楽しく懇談させていただいています。昭45年組ほどまとまりの良い学年はありません。現役時代さほど上手だとは思えませんでした。都ベスト4という金字塔を打ちたてたのだから、恐れ入ります。慶応バレー同好会にこの45年組から小川君、浜和男君、佐藤智由起君、小山君が入会してきた。開成色にならない様に気を配りましたが、無理でした。よく連んで遊びに出掛けました。この頃から浅草界限で小川君にはお世話になりました。

開成バレー部では、中村先生が担任する昭49年組が多数入部していました。小生の体力が一番充実していたころで、開成で、合宿で、他校で一緒にかなりきつい練習をしました。合い間に野球などしながら。時々宴席に参加させていただいていますが、この学年とは思いが尽きません。月日の流れは早いもので、そういう後輩たちも還暦を過ぎてしまいました。残念なことにいつも兄貴分として出席していた矢澤俊彦君（昭48）、山本雅司君（昭48）のお二人が先立ってしまいました。この会には、市村幹司郎君（昭50）、松下和正君（昭50）関君（昭54）が出席されています。松下君は仕事柄飲食店関係で絶大な人望を得ています。

飲みに行くと言えば、物流つながりで稲垣誠二君（昭46）とよくご一緒しました。稲垣君が運輸会社の社長時代は赤羽で、警備会社に転職してからは新橋で。

名古屋では、松原君（昭49）に誘われて、東海支部開成会に出席したとき（驚くことに小生は若手に入る）田村鉄興志先輩（昭31）からお声を掛けていただきました。名古屋在住の佐藤君（昭45）、松原君（昭49）、島川誠一郎君（昭51）に京都から石塚伸一君（昭49）が合流し、錦に繰り出していました。

まだまだ話は尽きませんが、取り上げる事が出来なかつた数々の事柄、ご容赦ください。開成バレー部OBは何処へ行ってもいらっしゃいます。

昭和43年卒は12名です。関野洋一君が鬼籍に入ってしまう残念で寂しい限りです。鵜沢豊君、宇田川雄司君と一緒に4人でカラオケに行ったのが最後になりました。同期で

年2回会食していますが、リタイア組が増えてきました。話題はもちろん健康について。現役の頃の話にも花が咲き、OB会名簿に残らなかった同期も…。(飯村敏明君、石井英夫君、池田真郎君、伊藤英明君、川野忠明君、滝谷佳男君、戸田吉政君、花里恵知郎君、平田俊光君、森田育男君、……)

80周年、90周年。100周年とご発展を祈念いたします。

開成バレー部の思い出

43年卒 田中俊一

私がバレー部に入部したのは、昭和37年中学1年の2学期からだと思います。特にバレーに興味があった訳ではないのですが、なにか運動部に入りたいと思い母に相談したところ、母が学生時代にやっていたバレーを勧めてくれ入部した次第です。その当時のバレー部は体育担当の中村博次先生が顧問をされており、1年生で身長の高い生徒には片っ端から勧誘し、同じクラス(1年6組)でも、結城・金森・富部・西野・鹿江・石井・平田・鵜澤・和田・永田等十名以上がバレー部に所属しておりおそらく運動部としては最大の人数を誇っていたのではと思います。当時は、中学はまだ9人制でしたので、背の小さかった私でも頑張ればレギュラーになれる可能性ありそれなりに練習に励み、中3からバックライトのレギュラーを獲得しました。2年の時だと思いますが、我々の練習態度が悪かったからか、当時のキャプテンだった田辺さんに「お前らは何のために練習してるんだ」と怒られた事がありました。田辺さんからしたら「強くなり試合に勝つためだ」というような答えを期待してたのだと思いますが、私が「身体を鍛えるためです」とまるでKYな答えをし田辺さんを困惑させたことを覚えています。田辺さん、その節は申し訳ありませんでした。開成中学バレー部は人数も多く身長もあり結城という大エースがいたのでそこそこ強く、荒川区の大会で負けるなど考えられずいつも都大会に出ていたと思います。昭和39年中3の都大会では、優勝候補の文林中学(文林は昭和38年と41年の都大会優勝校)と対戦しましたが、途中まで開成がリードしており、「文林が負けてるぞ」という周りの声が聞こえ会場がざわめき始めたのをよく覚えています。最終的にはサーブのダブリ等こちらのミスがでて1-2で負けてしまいましたがあとわずかで勝てたと思うと残念です。結城は、中3の時、当時高校日本最強だった中大杉並の中村四朗先生にスカウトされたという逸話の持ち主で、中学生でありながら高校の試合にでていた(今ならコンプライアンス違反で対外試合禁止になりそうですが)ほどの凶抜けた力を持っていました。我々のチームは良くも悪くも結城のチームだったと思います。

高校に入る段階で受験準備の為か(?)大勢いた部員も減りました。

バレー自体も9人制から6人制にかわりましたが、都大会でもベスト16か8には入れる程度の力は持ってました。高1の時のレギュメンは、田辺さん、片野さん、結城、富部、金森、鶴澤か西野だったと思いますが記憶は定かではありません。2年になると、結城、西野、金森、富部、鶴澤、田中がレギュメンで、秋には西野が引退し代わりに渡部が入ったと記憶しています。高校時代で最も記憶に残っているのは、私学祭の決勝で後の全日本メンバーとなる嶋岡等を擁した高校日本一の中大杉並と試合ができたことです。4-15、1-15で全く歯が立たなかったのですが、中大杉並はその年のインターハイ決勝で広島崇徳高校に我々と全く同スコアの1-15、4-15で圧勝したので、崇徳と同スコアなら我々もなかなかのものじゃないかと密かに思っていました。

開成バレー部史上最高の成績を残したのは、桑田君・浜君等の我々の2年下の45年卒だと思います。なにせ、都ベスト4に2回も入ったのですから。

とはいうものの、個々人の資質でいえば我々は絶対負けていなかったと思っています。

45年卒は中学時代は大した戦績を残してなかったと記憶しています。

それがなぜ高校に入り急に強くなったか不思議でなりませんでしたが、最近45年卒の皆さんと話をして理由に思い当りました。要は開成らしい頭を使ったバレーをやっていたのです。私の好きなノムさん(野村克也氏)の弱者の理論をその当時から実践していたのだと思います。勝つための工夫を山本君や小山君を核に皆で考えていたようです。

それに引き替え、我々は、結城という絶対的エースがいた為にいざとなれば彼に上げればなんとかなるといふ甘さがあったのだと思います。中学からなまじっかそこそこ強かった為バレーを甘く見た結果だと思います。こういう事は何にでもいえることで、慢心は成長の敵なのですがその当時はあまりにも子供でわからなかったのです。

私は大学入学後も、40年卒の佐藤さんがキャプテンをやっていたことからバレー部に入部し、更に就職後も先輩に引っ張られ社会人バレーをやる羽目になり、思えば随分長いバレー人生を歩みましたが、それもこれも中学1年でたまたまバレー部に入部したおかげです。今は会社をリタイアし外にでる機会も少なくなりましたが、最も頻繁に会っているのは、開成をはじめ大学・会社のバレー部仲間です。開成バレー部の同期生で高校2年まで在籍した仲間は、残念ながら鬼籍に入ってしまった関野君を含め、結城・金森・富部・西野・鶴澤・渡部・和田・宇田川・宮川君に私と11名います。今は年2回のバレー部同期会で昔の話や孫や病気やお墓の話をしながら盛り上がるのが最高の楽しみです。

開成バレー部に入ってよかった。

開成バレー部、私の人生を豊かにしてくれてありがとう。

以上

昭和44年卒



夢

匂坂 芳典

中学3年生でバレーボールを始めたのは1964年東京オリンピックで選手達が見せたプレーへの憧れと、当時からの親友だった丹野広蔵君が既に入部していたことが動機だった。おかげさまで小学校高学年からの肥満体形が鍛えられ、自分ができるとは思っていなかったプレーへ手が届くようになったのは大きな喜びだった。また、パスが相手への思い遣りを育くむように、クラブ参加に伴う主体的な意思決定への意識覚醒、全体の中の自分の役割認識、運動系クラブ独特の上下人間関係など、入部時には考えてもいなかった数々の貴重な体験ができた。すぐ上下の学年が質、量共に優れていたこともあって、ベンチウォーマーとしての参加は当時は精神的な負担もあったが、今ではそれさえも大切な経験である。中学高校クラス仲間達とは別の社会の貴重な体験はそれからの私にとっては他では得られないものとなった。バレーボールそれ自体も多くの新しい友達作りの機会となった。研究所勤めが続いた30代後半から40代に渡り仕事後に楽しんだ世界各国の研究者達とのバレーは、仕事上の付き合いだけでは得られない信頼感、人間的な深みを得る得難い場であった。

学生の頃は日本では唯一のノーベル賞受賞者であった湯川秀樹博士に憧れ、物理学の門をたたき、それ以降、興味が導かれるままに進めた数学、言語学、人間情報処理といった学問への追求は、各分野の先人達への憧れが一つの大きな動機となってきた。夢は必ずしも現実にする事ができないが、夢を追いかける上で、ボールが地面に着くまであきらめない精神は、今でも脈々と息づいている。人生三万日、翻って現在の自分を見つめた時、残された日々をどう過ごすかは、「何がやりたいか?」「何をすべきか?」に縮約されることに気づかされた。勤め先の学生諸君にも「夢」を聞くようにしているが、現役の学生諸君、先輩諸氏のお持ちの「夢」や如何? 今日一日、今の一時を味わい尽くしながら生活を楽しまたいと思っている。

谷間の学年、昭和44年卒

片野 昭秀

中学時代

中一52番、中二28番が私のもらったユニフォームの背番号だと記憶している。上の学年はそれだけ大人数だった。特に一つ上の学年は故中村博次先生が担任してただけに、先生の肝いりで体格、運動神経がよい人間ばかり大勢そろっていた。都大会には必ず行っていた。従って私たちの学年はチームとしての練習をする時間が少なかった。

新人戦の区予選は七中の体育館で行われた。加えてプレーしたことのない体育館での試合。当然のように何もできず1回戦敗退。春の大会は五中で外の土のコート。アスファルトのコートでしか練習をしたことのない私たちはやはり勝手が違いまたまた1回戦敗退。

ところが、夏の大会に奇跡が起きた。なんと1回戦を勝ちあがった。都大会出場校を決める当日は雨模様の天気。予定していた学校は外のコート、他の学校の体育館も使えず、急遽開成の古い体育館いや講堂に毛の生えたような建物で試合をすることになった。実力では勝る十中が相手であった。地の利を生かしといたいが天井の低い講堂では練習をしたことがなかった。その中で、中二原君のはなったひよろひよろサーブが（失礼）、一度ならず二度三度低い天井の三角をした梁の中を通り抜けた。面食らった相手はレシーブミスを連発、開成はこの試合をものにし、3大会ぶりに都大会出場権をものにした。

それから猛練習が始まった。当時大学1年の佐藤勇先輩が大学の練習の合間をぬってつきっきりで指導してくださった。ところがここで一問題。都大会中に合宿を組んでいたのだ。私達の学年が



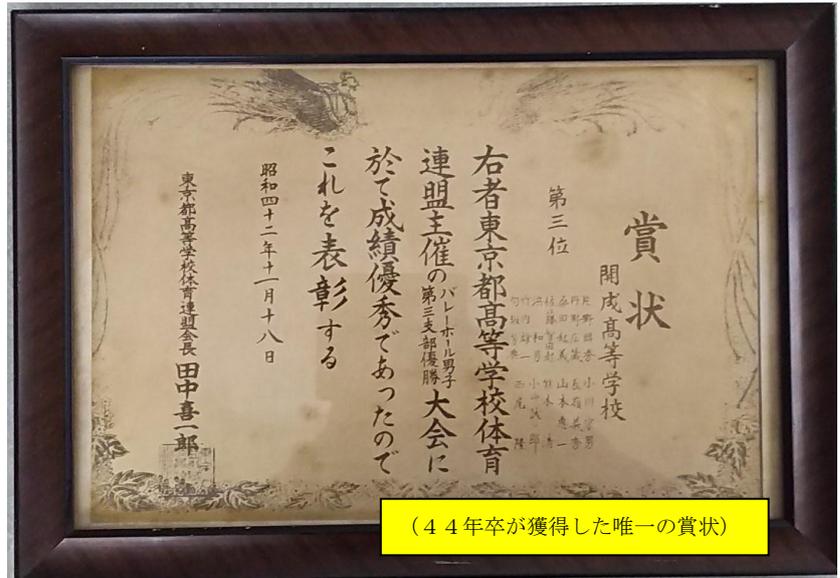
(昭和40年中学生だけで行った合宿 高校生は後から合流)

都大会に出るとは夢にも思っていなかったのだろう。そこで先生は、予定を変更し中学生だけで一足先に合宿に行くことを決断してくれた。

そして迎えた都大会。対戦相手は一橋中。半年前にはあれだけひ弱だったチームが、夏の練習、合宿を経て力をつけた。都大会の場所で1セットを奪いセットカウント1-1。勝負の3セット目も16-11とリード。誰もが開成の勝利を信じ、応援に来てくれていたOBの山本、武者先輩はご褒美のアイスクリームを買いに行ってくれた。ここから悪夢は起きた。開成はそこから1点しかとれず、相手は10点。終わってみれば17-21での敗戦。悔しくてかぶっていた帽子をコートにたたきつけた。帰ってきた両先輩は啞然としていた。

高校時代

42年卒・都ベスト8、43年卒・都ベスト16、44年卒・??、45年卒・都ベスト4・関東大会出場、私達と上下4学年の戦績である。そして、43年卒は春の関東予選まで出た。(当時は高2の冬、新人戦が引退試合だった。)先生そして43年卒はどうしても関東大会に行きたかった。もちろん私も行きたかったが…。というわけで44年卒が中心に(と



(44年卒が獲得した唯一の賞状)

言っても中学時代の仲間は次々にやめていき、残ったのは3人、レギュラー6人中4人は高一だった。)実際に大会に出たのは、6月のインターハイ予選からだった。当然のように1回戦負け。8月の国体予選は、後に関東大会に行く実力を持った高一のお陰で1回戦は勝つことができた。5校リーグは1勝し最下位だけは免れた。

秋の支部大会。この頃いくらか力をつけてきた私たちは2回勝つことができた。3回戦は開成B(高三)チームとあたることになった。試合の前に中村先生は高三に向かって「お前たち、ここは負けてやれ」と言われた。すると金森先輩が「いやです。」と一言。がちんこ勝負となった。練習をしていないといっても相手は都ベスト16を維持していたメンバーである。こちらはといえば中学時代から谷間の学年。どうころんでも勝ち目はないが試合はやってみないと分からない。あれよあれよという間に得点を重ね終わってみるとストレート勝ち。第三支部ベスト4となった。卒業する際、先生より「片野、一番思い出に残っているのはどの試合だ。」と聞かれ、即座に「支部大会で高三に勝った試合です。」と答えた。先生は「俺も同感だ。」とおっしゃってくれた。

合宿

夏は神城、春は岩井での合宿が中一から高2の春まで続いた。

神城では、練習後に宿舎の前を流れる小川で風呂代わりに水浴びをするのが楽しみだった。岩井での練習場であった小中学校にはネットを張る支柱が無く、学校から皆で運んでいった。食事の際には缶詰を一人3個ずつ持参しおかずの足しにした。どれも今では考えられないことである。

高2の夏現役最後の合宿は、岩井での宿舎だった前芝荘の新装なった体育館で行われた。なにせ体育館で練習などしたことがない私達だ、体育館用のバレーボールシューズを新調して合宿に向かったものだ。一面しかないため体育館での練習時間は、中学生は午後、高校生は午前と夜であった。体育館で練習できない時間は、海水浴で賑わっているのを羨ましげに横目で見ながら、「陸トレ」と称し「開成ファイトオー」と蛮声を張り上げながら岩

井の海岸を走ったりウサギ跳びをしたりした。

開成・麻布定期戦

昭和57年に始まった。現在実施されている大会の骨子はこのときに決められた。中学戦、高校戦、OB戦、2勝した方を総合優勝とするのが普通の考えだ。OB会幹事長だった小生はその年30才になった。卒業したてばかりの若手が戦うOB戦では自分の出る幕はない。そこで30才以上の超OB戦を考え、勝ち数が同じになったとき総合優勝は高校戦の勝者とすることにした。超OB戦は小生の我が儘から誕生したものである。35年経った今も脈々と引き続かれていること嬉しい限りである。麻布・谷山先輩に言わせると、面倒くさいから新しい方法を誰も考えようとしないとのことだが。

超OB戦を戦った両校の主力メンバーも高齢化してきた。開成超OBも半数が60台のことがある。そこで、シルバーOB戦（50才以上）をエキジビジョンで行なうことになった。定期戦での楽しみがまた一つ誕生した。

故中村博次先生

伝説の多い先生だ。先生の伝説の一コマを紹介する。

先輩の親御さんがお亡くなりになり私が現役代表で通夜に参列することになった。当時は校則で帽子着用が義務であった。守る者はあまりいなく先生の前ではかぶり普段はカバンの中に入っていた。さて、通夜当日待ち合わせの場所に向かった私は、当然のように帽子をかぶって行った。日暮里駅に向かい歩き始めると先生はいきなり「おい、帽子を鞆にしまえ」とおっしゃった。面食らった私はどうしたものかとまごまごしていると「早くしまえ」と追い打ちをかけられた。はて何処に行くのかと思いきや、行く先はなんと焼鳥屋。先生はビールを飲み始め、私は焼き鳥をごちそうになった。さすがにビールは勧められなかったが。

まだまだ語り出すと次から次にでてくるが、それは他の学年にお任せしよう。



中村博次先生、昭和44年卒3名



卒部（卒業）記念トロフィー

昭和45年卒

私たちが強くしたあの夏の練習

山本 恵一

先日のことです。関君（S54年卒）と話したときに、同期の佐藤（智）君のポジションを聞かれました。佐藤君が桑田君の対角でエースであったことを伝えると、初めて聞いたと言われました。私たちが新人戦で東京ベスト4に入ったことは良く知られていますが、どのようなチームであったかは全く知られていないということに気づかされました。70年誌という機会を得たので、私たちがどういうチームで、強くなったきっかけともいえる夏休みの練習のことを記してみます。

試合開始時のフォワードは桑田君、小川君、浜君、バックは佐藤君、山本、竹内君でした。セッターは小川君と山本。いわゆるエースであるレフトは桑田君、この対角が佐藤君です。フォーメーションはセッターがライトに入り、浜君と竹内君がセンタープレーヤーになるというものです。このフォーメーションのメリットは（1）ブロック力のある浜君と竹内君がセンターに入るので、守備力が向上する、（2）速攻や変化攻撃がやりやすい、（3）セッターのブロックに対する負担が減り、トスワークが良くなるなどでした。攻撃パターンは平行、Aクイック、Bクイック、レフトのアタッカーがAクイックに入り、同時にクロスしてセンターがBクイックに入る変化攻撃（“X”と呼んでいました）で、高3の関東大会時にはバックBも行っていました。当時の主流は3枚攻撃でしたが、色々な形の速攻を実際に使えたチームは私たちぐらいだったと思います。特にXは面白いように決まりました。

最初からこのフォーメーションだったわけではありません。高2の関東大会出場時はセッターをセンターに配置した一般的な2枚攻撃のチームでした。この関東大会は甲府で開催されましたが、1試合目で何もできないままに負けてしまいました。原因はセッター（特に私）の経験不足とブロック力の弱さにありました。関東大会後には3枚攻撃を試したこともあったのですが、しっくりきません。夏休み前にセッターをライトに配置するフォーメーションにたどり着きました。このフォーメーションを考えたのは浜君か佐藤君ではなかったでしょうか。

私たちの1学年上は片野さん、丹野さん、匂坂さんの3人でした。片野さんと丹野さんがセッター、匂坂さんはマネージャーでしたので、桑田君、佐藤君、浜君、竹内君は高1のときからアタッカーとして試合に出ており、多くの試合を経験していました。高2で関東大会に行けたのはこのおかげでした。

チームとして私達を強くしてくれたのが夏休みの練習、特に合宿でした。休み中のスケジュールを考えたのはマネージャーでの小山君です。確か夏休みのほとんどが練習だったと思います。8月には内房の岩井で合宿が行われました。この練習スケジュールも小山君が考えたのでしょうか、ハードでした。起きてから眠るまで練習漬け、休めるのは食事の

ときだけです。今までの合宿では最上級生の高2が一番風呂でしたが、この合宿では高2の入浴が一番遅かったのです。高2は下級生の練習が終わった後も、練習でした。午前はレシーブ、午後はアタック、その後に試合形式の練習を行ったと思います。中村先生と佐藤(勇)先輩に練習を見ていただきました。きつかったのはアタックの練習です。2段トスが中心の練習でした。この練習でアタッカーは2段トスを打てるようになってだけでなく、ネットから離れたトスを打てるようになっていました。セッターである私にとっても2段トスを上げ続けることにより、ジャンプ力が大きく伸びました。2段トスは手先では上げられません。体全体、特に足腰を使うことが必要です。この繰り返しで私のジャンプ力は向上し、ブロックも強くなっていました。

合宿が終わった後に私学祭があり、準決勝で初めて駒大付属（当時東京2位）と対戦しました。平均身長は私たちと変わらないので、舐めていたのですが、試合が始まると全く歯が立ちません。他の高校に通用していたアタックが彼らのブロックの餌食となってしまったのです。上位チームに対しては、打ちやすいネットに近いトスはブロックの餌食になるということを思い知らされた試合でした。「オープントスはネットから離そう」と言い出したのは、確か佐藤君だったと思います。合宿の練習の成果がここで生きてきました。全員ネットから離れたオープンで打てるようになっていたのです。当時のルールではブロックも含めて3本で返さなければいけなかったので、2段トスからアタックを打てるということは攻撃の点で大きな強みになりました。

新人戦はシードがないので、全校とも予選から参加することになります。予選で対戦する高校と私たちとの実力差はおおきなものでした。試合の緊張感を高めるために、中村先生の指示は「このセットは零点に抑えろ（当時はサービスポイント制なので可能でした）」、「このセットは速攻のみ」、「このセットは桑田と佐藤はフェイントのみ」と言ったようなものでしたが、先生の指示通りに試合できるレベルに達していました。

夏休みが終わり2学期を迎えると練習に対する姿勢も変わっていました。当時の練習は火曜、木曜、土曜で中学の校庭が練習場所でした。雨だと練習できません。もちろん月曜、水曜、金曜も練習できないのですが、小山君がやりくりし、雨の日は体育館のある高校に練習試合を申込み、ほぼ毎日練習ができました。城北高校には練習試合で本当に世話になりました。（小山君が月曜、水曜、金曜をどうやりくりしたか思い出せませんが、毎日練習をしたことだけは覚えています。）全員バレーボールが好きでした。毎日の練習も苦ではありませんでした。練習嫌いだった私も夏休みが終わった頃には、練習であれ、試合であれバレーボールができるのが面白くなっていました。いつの間にか全員「バレーボール馬鹿」になっていたのです。これも小山君のおかげでしょう。私たちのキャプテンは桑田君でしたが、影のキャプテンは小山君でした。

このことも上げておきます。私たちのフォーメーションは教えられたものではありません。攻撃パターンも含めて自分たちで考えたものでした。回りからみると練習中は言い合っていたように見えたほど（単なる喧嘩だったときもかなりありましたが）、話し合いました。どうすれば勝てるかを常に考えていたと思います。

最後に、指導者にも恵まれました。中村先生には速攻を手取り足取り教えていただいた

のですが、佐藤（勇）先輩の存在も大きなものでした。マッハの導入など新しい練習方法を教えていただいたうえに、合宿だけでなく、普段の練習も見ていただき、レシーブなど基本から鍛えなおしていただきました。中学時代は都大会に行ったこともない私達がベスト4になることができたのは、適切な指導による豊富な練習量あり、しっかりした（鬼？）マネージャーがいて、そして全員がバレーボール馬鹿になれたからだと思います。あの夏休みの練習があったからだったのです。

やらされる練習から、自分で考え実行する練習へ 45年組8人の誇り

小山 誠一郎

1. 45年組の原点

同期8人の中で、私小山が中3になってからバレー部に入部し、中村先生から「小山、お前はマネージャーをやれ。」と一言、その後の道が決まってしまった。遅く始めたが皆に早く追いつきたい一心で練習に精を出した結果、バレーボールの魅力に取りつかれ練習が楽しくてならず、毎日でもボールに触れていないと居られなくなり、同期の7人からは練習日を増やし、練習試合を組み、練習を強制した張本人のように思われているようであるが、今思うに、何よりも自分が練習したいという気持ちが強く毎日練習するのが当たり前と本気で思っていた。それにみんなも一人としていやだというものはおらず同調してくれたことが、チーム力をつける礎となったと思う。

中3の時は9人制、荒川区の区大会でさえ出ると負けの体たらくのチームであった。皆がその屈辱をばねにして、高1前の春合宿から始まった6人制に向けての「やらされる練習」が始まった。高2のレギュラーが片野さん、丹野さんのセッター2人のため、アタッカーの桑田、浜、竹内および佐藤の4人が高1からレギュラーとして養成、この時の経験が後に実を結ぶことになる。佐藤はハーフセンターで4人の中で身長も一番低かったが、6人制への移行のチャンスにアタッカーへの転身を自ら望み、キレがあり威力のあるスパイクが打てるアタッカーに絶対になるんだ、という強い意志を持ちそれを目指した。対人レシーブではキャプテンの桑田と組み、至近距離からスナップを聞かせたスパイクを桑田に浴びせ、常に妥協せず気迫を込めた練習を日課とするようになり、人一倍努力を重ねた。それを傍で見ていた我々一人ひとりが影響を受けない訳がなく、皆が自分たちでやる練習へと変わっていった。

2. 転換点：9人制から6人制バレー（バレーコートのある体育館がなかったこと）

我々の練習のホームグラウンドは中学校庭のアスファルトの全天候屋外コートであった。体育館はあることはあったが、天井が低く、古い木造構造で構造用部材がむき

出しの状態でありバスケットボールはできたが、バレーボールはできない。練習日は火、木、土の3日であったが、テニス部（軟式・硬式）やバスケット部、ラグビー部と交渉しほとんど毎日コート1面は確保した。中学時代の9人制から6人制に変わりレシーブ範囲がより広くなり、それまでの回転レシーブでは前には対応できずスライディング（フライング）レシーブにも取組み、アスファルトコートに腹から落ちたり、顎を擦りむいたりして皆が習得していった。試合に臨んでは、開始の礼の後、やる気を鼓舞するスライディングパフォーマンスを誰からともなく始めていた。

3. 大学体育会レベルの練習方法の導入と情熱ある指導者

高1になってからは、それまで合宿での指導が普通であったOBの中で、東大で現役のプレーヤーとして活躍していた佐藤（勇）先輩が忙しい中時間を割いて我々の練習を見てくれるようになった。その内容もバレーではなくバレーボールの近代的練習法を取り入れ、個々の基礎の力の強化を図ってくれた。

中でも印象深い練習は、「マッハ」と呼ぶ体育館の隅のコーナーで2mほどの至近距離からボールを矢継ぎ早に打ち、左右交互にステップしレシーブする練習。連続して打ってくるため常に体勢を低くし、初めは正面で受けられるが、次第に一步踏み出さないと届かない処へ正確に狙って打ち続けるので、打つ方も技術と体力がないとできない練習である。

シート練習でも、相手コートに卓球台などの台の上から打ち、コート内には6人が入りレシーブの実戦に近い練習（もちろん、ブロックも2人が跳ぶ）、これもブロック練習とレシーブ練習としては有効な練習であった。

4. 控え選手のレベルアップ、やらされる練習から、自分で考え実行する練習へ

試合が近くなるとシート練習（チャンスボールから、サーブレシーブから、レシーブから）が多くなるが、目的はレギュラーのためのチーム練習。我々控えは練習の効率を少しでも上げるため、ボール拾いとボール回しに全力で取り組むこと。シート練習も6人以上いないと練習の質も上げられず、うかつに練習もさぼれない。気の抜けたプレーを見せられたら1mの距離からボールを思い切り叩き付けてやりたい気持ちを抑え、コートの周りから常に声を掛け締まりのない練習を排除させることが大事な役目。1学年下の西村・上野を始め長嶺、小山の「控え組」はいつでもレギュラーを食ってやるぞ！という気持ちで練習に臨んでいた。レギュラー組が少しでも気の抜けたプレーをすると「バ声」を浴びせる代わりに声をかけた「カイセイ、ファイト、Oh、ファイト、Oh・・・」

シート練習の相手をする控えのレベルアップがレギュラーの力を押し上げたと自負している。レギュラーがチャンスボールを生かせず、単調なオープントスで打ってくるようだと、西村、上野、後藤らのブロックの餌食となり、Aクイックで打つと見せかけて平行トスでエースが打つ、など工夫して攻めないと決め手にならない。また、2枚セッターであったが2人のアタッカーが時間差攻撃や移動攻撃を幾通りも考え、

幾度も繰り返し練習し自分たちのものにして、攻めるパターンが単調にならないよう工夫をした。これが我々の強力な武器となっていった。

新人戦都大会初戦で、対戦相手は覚えていないが1セット目を自らのミスでチームもバラバラ、相手に先行され、ベンチでスコアを付けていた私の頭を、背中を、尻を何度も引っ叩いていた中村先生の我慢も限度を超え、背水の陣の2セット目、先生は浜、佐藤の2人以外のレギュラー4人をスタメンから外し、控えのメンバーに入れ替えてチームに「活」を入れた。試合を投げたようにも取れるがそれでも控えのメンバーが伸び伸びとプレーし、チーム力は下がるどころか上回っていた。チームのムードが乗ってきたところで1人ずつレギュラーをコートに戻し、その勢いで2セット連取。そして勝てばナンバーワンの中大付属との決勝戦という、その前の準決勝の対駒大高校戦では善戦しながらも体力的に持たなかったため全くと言っていいほど悔いはない。この前の試合のほうが控えの我々にとっては遥かに印象深い。新人戦でベスト4まで残れたのは、この試合でチームが崖っぷちに立たされた中、控えの選手が普段の練習からレギュラーに負けてたまるか！という意気込みを力に変え、練習での力を出せたこと。そのあとレギュラーが自分たちのできることを精一杯やり、ベスト4を自分の手でつかみ取ったこと。全員の意思と力で勝ち取れたこと、これこそが45年組8人の誇りです。

5. 8人の紹介

- ・浜：どんなトスでもうまくつなぐ手先の器用さ。
- ・佐藤：キレと破壊力のあるスパイク、浜との移動攻撃、時間差攻撃は 決定力大。
- ・小川：任せて安心、安定したトス回し。
- ・竹内：タイミングが合えば相手のエースもシャットアウトのジャンプ 力。
- ・桑田：困った時のエース頼み、キャプテン力はチームの要。
- ・山本：得意はA・Bクイック、平行など早く、冷静なトス回し。
- ・長嶺：ピンチでも動じない平らかな心を持つ、ピンチサーバー・レシーバー・アタッカー。
- ・小山：練習の虫、縁の下の力持ち役のプレイングマネージャー。



私学大会3位
メダル

新人大大会都3位盾



45年卒 竹内 雄一

高校2年の時の、関東大会2次予選は今でもいくつかの場面を鮮明に覚えています。

この試合に勝てば、ベスト16。 出場校は12校だが中村先生の力？で関東大会出場が決まるという試合。

相手は、城西高校、セッター2枚は小柄だが、エース2枚が強かった。

第1セット 12対15

第2セット 16対14

セットカウント 1対1だったが、

第3セット 8対13

と引き離された。 当時はラリーポイント制ではないが、いずれにしても逆転が難しい点差になってしまった。 当時東京都 No.2 の駿台高校との練習試合で、13:0で勝っていたのに、13:15で負けた事あるので、逆転は常にあるかもしれないが、、、 このケースはさすがに厳しい点差。こちらはミスが一つも許されないという切羽詰まった状態になってしまった。

当日は開成の運動会と重なってしまい、晴れの棒倒しと張り切っていたが、運動会にするかバレーの試合にするか、中村先生が皆に希望をつのり、悩んだ末？ かどうかは兎も角、全員バレーを選んだ。学校行事に出ないでバレーの試合にでると言う事で中村先生と学校側とは相当悶着があったと聞くが、皆の希望が聞き入れられ2次予選に参加となった。

8対13と引き離されたとき、これで負けたら、運動会さぼった意味がないし、中村さんも面目丸つぶれになると、『ダメ男』と言うあだ名を拝命した私が奮い立った位なので、全員が奮い立っていたと記憶している。

とにかく凡ミスは絶対にしないと、サイドアウトを繰り返しながら、じりじり盛り返し、12対13まで来たとき、(前衛は桑田・竹内・山本の時、相手のアタックかサーブか忘れたが、(いつもは竹内がドジるのだが) 私の次にレシーブに問題がある後衛(佐藤、浜、小川)でその後、慶応に行った XX 君がミスをして、12対14になり、相手のマッチポイントになってしまった。この時、初めて XX 君の尻を引っぱたい。いつもは、タケウチーッ、モウ少しどうにかしろよと言われている自分が、必死になっていた事を良く覚えている。その後、追いつき・追い越し、15対14のマッチポイントを握った。最後はエースの桑田(セッターは山本)が決めた、桑田にオープンの絶好のトスが上がった、私は決めてくれと祈ったし、皆も決めてくれと見つめていたと思う。普通ならばバット決められるような絶好のトスだったが、桑田は明らかに？緊張して腕を振り切らないようなアタック、でもさすがエース、相手にはまさかのフェイントアタックでこれが決まった。(竹内のアタックのような感じ)。いつも余裕の桑田でも緊張するのが分かって、桑田も俺と変わらないところあるのだとちょっと嬉しかった??

試合後、いつも、何か一言注意がある中村先生が、皆を集めて注意なし、褒められはしな

かったが、『ご苦労』という言葉だけ。しかし先生が何を言いたいのか良くわかったし、短い一言が心にしみた。

半世紀近く前の試合ですが、今でも鮮明に覚えている。もしかしたら、その後の自分の人生にも影響があったかもしれない。

高校2年の時の棒倒しは私がないのに2組（白）が優勝、高校3年の時、2組は、桑田のクラス（緑）に負けて準優勝だった。

余談：

この翌年も関東大会出場。私は大学入学後、一時、体育会のバレー部に所属、そこで横須賀高校出身の友人と仲良くなった。彼に『開成は2年連続 関東大会出場』と自慢したら、その友人は『ソリヤー凄いな』と。私は鼻高々。ところが、中村先生がこの友人の事を知っており、横須賀高校は関東大会ではベスト4、彼はその時のエースであると聞かされ、私は赤面の至り。高慢になってはいけなかつくづく反省した。彼は先日私の単身赴任先の神戸に遊びに来て旧交を温めた。なぜか心が和む友人。バレーを知って、人を知るかな。

中村先生と八人の侍

昭和45年卒 浜 和男

東洋の魔女が金メダルを獲得した1964年10月、私のバレーボール人生がスタートした。それはつまり中村道場入門ということであった。

中学1年の秋、アジア初の開催となった東京オリンピックの放送に私は釘付けになった。初めてオリンピック競技種目となったバレーボール女子の大松監督、河西主将・半田・宮本・磯辺・松村・谷田の顔は今でも脳裏に浮かぶ。

東京オリンピックから4年後の1968年秋、我々は開成排球部史上空前絶後と言われた東京都ベスト4という快挙をやり遂げたのだ。メンバーは桑田・佐藤・小川・山本・竹内・長嶺・小山そして浜の8人。監督は鬼の大松ならず中村先生だった。その感激は自分自身のバレーボール人生の中で特別な意味を持つことになる。高校2年の時だった。

七人の侍いや八人の侍の顔が揃ったのは中学3年の時だった。当時中村先生の指導は2年上の結城チームに集中していた。先生はその学年担当でもあり我々は見つめた記憶が殆ど無い。中村先生が我がチームを真剣に指導され出したのは結城チームが引退した時からだった。高校1年の秋であった。その間は5年先輩に当たる佐藤勇さんに専ら面倒を見て頂いていた。1年上の片野さんがセッターのチームで小川と山本が控えだったが、2・3回戦は勝てるチームになっていた。高校1年から2年に進学 of 春休みの合宿に入り漸く同期8人が揃った。我々は徹底的に練習し、中村先生も本格的に指導体制に入つて頂いた。

夢中になって練習に励んだ。フォーメーションも実によく研究した。桑田・佐藤のオープンに竹内・浜のセンター攻撃、小川・山本の2枚セッターに代打の切り札長嶺。オールラウンドでマネージャーとしてチームの纏め役の小山と、技術的にも人間関係でも素晴らしいチームが出来上がった。中村先生との一体感と信頼関係もこの時構築された。

それからの快進撃は見事だった。2年連続関東大会出場、私学祭ベスト4、東京都新人戦ベスト4と面白いように勝った。

中村先生に徹底的にしごかれた。木棒で殴られ、葉缶の水を掛けられ、怒鳴られた。スパルタに反抗しながらも頭脳プレーでコンビネーションを徹底的に追求した。一方我々は基礎トレーニングには努力を怠った。そのつけが新人戦で現れた。対戦相手の駒大付属に勝てば決勝進出である。1セット目は開成が取った。メンバーを入れ替えて臨んだ試合だが、フル出場の竹内と浜が足をつった。体力不足だった。

負けたことは残念だったが、しかし後悔はない。我々のスタイルのバレーを追求した結果だからだ。

その日の夜、佐藤さんに連れられ渋谷に繰り出した。制服を着たまま祝杯をあげた。ベスト4を素直に喜んだ。

それからの中村先生との付き合いはバレーボールの監督と教え子という枠を超えた。人間と人間との関係が始まったのだ。

8人で良く先生のご自宅に伺った。最初は駒込だった。近くにうまい麦とろろを食わせる店がありかなり食べた記憶がある。次が落合の自宅だ。御自宅ではビールばかり飲まされた。8人のうち桑田と小川は先生に仲人をやって頂いたこともあり、彼らが中村先生と我々のパイプ役となった。

私の結婚式では中村先生にスピーチをお願いした。こうして家族としてのお付き合いも始まった。その後2000年3月4日、桑田のシンガポールからの帰任と竹内のアメリカ赴任を祝して、8人組が夫婦連れで揃った。その時も中村先生に参加頂いた。亡くなる前の最後の同期会だった。先生はお孫さんの話をしきりにされていた。その顔はただ優しいお爺さんの表情をしていた。先生が亡くなられた翌年の我々の新年会はその時と同じ浅草の「きく田」で行われた。

我々昭和45年卒の同期会は45年余に亘り小川の世話役のお陰でいつも浅草だ。そして今日2016年8月6日はリオ五輪の開会式でリオのカーニバルが我々開成バレー部45年組の原風景である浅草を思い出させる。

1964年東京オリンピックでスタートした我々のバレーボール人生は、来年開成バレー部の70周年を経て、2020年に東京に戻ってくる。バレーボールの復活を願うばかりだ。

頑張れニッポン！ 頑張れ開成！

2016年8月6日

昭和46年卒

開成学園バレーボール部での思い出

上野 晋

私が開成学園でバレーボールと出会ったのは、昭和41年（1966年）頃でした。当時、体育の授業は、ヘルシンキオリンピック体操競技の床運動や跳馬でメダルを獲得された上迫忠夫先生が担当されていたのですが、バレーボールの授業を分担された中村先生が、身長だけは高かった私に目を付け「バレーボール部に入れ。」と半ば強制的に声をかけて頂きました。当時の私はいわゆるもやしっ子（現在は見る影もありません）でしたが、運動は得意な方でしたので、折角声をかけていただいたのだからと甘い気持ちで入部しました。

その当時、バレーボールは結構な人気スポーツでした。昭和39年（1964年）の東京オリンピックで、大松監督率いる女子代表が金メダルを獲得し、また、名セッター猫田を擁する男子代表は銅メダルを獲得しました。特に男子代表はその後、松平監督の元、世界の強豪となり、大古、横田、森田などの大砲アタッカーをセッターの猫田が自在に操り、メキシコオリンピックで銀メダルを、ミュンヘンオリンピックでは金メダルを獲得しました。

さて、授業から始まった私のバレーボールでしたが、中学時代は9人制のセッターを任せられ、入部間もなく試合に出場しました。まだバレーボール部の仲間の名前を十分把握しておらず、トスを上げる人の名前を間違えないように試合展開以外で気を遣ったことを覚えています（当時は、トスを上げる時にアタッカーの名前を大声で叫んでいました）。中学3年になるとアタックの練習を始めました。ところが、なかなか打点のタイミングがあわず、力のないアタック練習が数カ月続きました。それでも何とかアタックを打てるようになり、6人制のレフトポジションを与えられました。個人的にはセンターのハーフトスやクイック攻撃、そしてセンターでのブロックが好きだったように思います。その頃、東京都の高校バレーボールは中大付属高校の全盛期で、全日本にも選ばれた小林、丸山の両選手を中心に連戦連勝を続け、試合前の練習から会場の注目を集めていました。中大付属は第1回の春高バレーで優勝したと思います。私学祭でも注目の的でしたが、幸いにも我々の代は中大付属との試合経験はなかった、つまり対戦するところまで進出出来ませんでした。

記憶に残っているのは夏の合宿です。確か、千葉県岩井の前芝荘に宿泊し、併設された体育館で1週間程度、汗を流したものです。

当時、体力を消耗するので試合中や練習中は水を飲むな、が鉄則でしたが誰ひとり熱中症にはなりませんでした。50年前ですので、今ほど気温は高くなかったのでしょうか。我々の時代、日頃のバレーボールの練習はアスファルトの運動場でしたので、フライングの練習といえば砂場を使うという有様でなかなかうまくありませんでした。さすがに体育館でのフライング練習は効果があり、結構上達した覚えがあります。この前芝荘も今はもう無くなっているのではないのでしょうか。

高校卒業後、大学の同好会で細々とバレーボールを続け、就職後も2年ほど会社の同好会レベルのクラブで活動をしていましたが、その後はまったく無縁でした。今回、開成バレーボール部70周年の原稿執筆の機会を頂戴し、忘れかけていた思い出を振り返ることができました。今後も、後輩が良い思い出を作れるようお祈り申し上げます。ありがとうございました。

思い出ともいえない思い出

柏女 霊峰

2016年7月5日、70年史の名簿編集の労をとってくださっていた小川宗男氏(S.45年卒)から、突然の原稿依頼が舞い込んできました。テーマは特に定めませんが、バレー部時代の思い出を綴ってほしいとのことでした。それから、家探しを始めましたが、数枚の写真以外はみつけることができませんでした。そのため、思い出にもならない思い出話を綴る羽目となりました。

私は、中学3年途中に入部しました。それまでは体操部に所属していたのですが手首を痛めてしまい、これからどうしようか考えていたときに、当時の顧問だった中村博次先生にお声をかけていただいたと記憶しています。確か、堀江君も一緒に入部したのではなかったかと思います。

途中入部で、しかも身長も低い私にとってはレギュラーなど望むべくもなく、補欠として練習に励んでいました。1年先輩の45年卒のメンバーは強力で、私たちにとってはあこがれの存在でした。私たちの年代は総勢14名程度(入退部がありました…)で、西村部長のもと上野君、後藤君、柳君、大江君、文君がレギュラーで、井上君、田村君、稲垣君、堀江君、内海君、佐藤君、慶野君、それに柏女が交替要員でした(他にも同期がいたらごめんなさい。)

特に私はピンチサーバーか守備要員以外にあまり試合に出る機会もなく、そのうち、中村先生からマネジャーをやるように指示されることとなりました。1年ほどプレイング・マネジャーとして試合の手配や交渉やスコア付けなどを行い、それはそれで充実していました。関東大会予選や国体予選にも出ていましたが、最強時には、結構いいところまでいったような記憶があります。後藤君の名セッターぶり、上野君の華麗なスパイク、大江君、西村君の野性的なスパイク、フェイントがうまく決まった文君、器用な柳君の巧者ぶりなど、それぞれの個性的なプレーが光っていたことを思い出しています。

卒業後は大学時代や千葉県児童相談所時代に、ときどき友人や職場仲間とバレーボールを楽しみましたが、仕事や生活の慌ただしさに紛れて麻布戦や総会などには参加することなく、不義理をしています。それでも、テレビでのバレーボール観戦は、今でも楽しみの一つです。

そんな私ですが、創部70周年と聞くと懐かしさがこみ上げてきます。幹事の方々にはご迷惑をおかけいたしますが、せめて記念式典には出席させていただきたいと思っています。貴重な機会を与えていただきましたことに、心より感謝いたします。バレー部の今後のご発展を祈りいたします。



写真: S.46年卒メンバー、S.45年卒メンバーの合同写真

昭和47年卒

開成バレー部の思い出

松田信彦

私は、小学校のころから運動は大の苦手、運動部に入ることなど全く考えていなかったのですが、中学1年の春に、一足先にバレー部に入っていた同じクラスの後閑君の誘いで入部しました。その時は、後閑君の他、勝田君も先に入部していました。

今でも苦しい練習しか思い出はないのですが、普段の練習よりも春、夏の合宿が辛いというより恐怖でした。6年間のうち、ほとんどは千葉の岩井で合宿しましたが、中一の最初のころは、長野県の白馬村で合宿したように記憶しています。同期で白馬合宿の経験者は、自慢ではありませんが、私と後閑君、勝田君の3人だけだと思います。

当時は体育館ではなく宿泊所である民宿の近くに野外のコートがあり、そこまでランニングして練習をしました。当然、雨が降れば練習は中止です。練習の嫌いな私は、毎日明日は雨天中止にならないかと願って床につくのですが、宿泊所の民宿の前に小川が流れていて、朝、まだ寝ているときにその音がまるで雨が降っているように聞こえるのです。よし、今日こそは、練習は中止だと思って外を見ると、ピーカンの青空でがっかりした思い出があります。

中一なのにまるでうぶな私たちをOBの先輩が心配して、真剣に性教育をしていただきショックを受けた記憶（私たちだけではなく中2の西村さんたちも真剣に聞いていました。）があります。風呂は小さな風呂しかなく、先輩たちの出るのを待ってられず合宿所の前の小川で体を拭いたり、ほとんど入れなかったため、自宅に泥だらけで帰って母をびっくりさせました。

岩井の合宿では、缶詰の思い出がなつかしいですね。全員が缶詰を持ち寄って、おかずの補充をしました。まるで戦時中の学童疎開と同じです。

確か、1人3個持参するというようになっていて、うちの母は当然、自分で持参したものは自分で食べることができるのだらうと勘違い？し（普通はそう思いますよね。）牛肉の大和煮、カニ缶など結構高価なものを持たせてくれたのですが、合宿所に到着するや否や、全員の持参したものはすべて強制放出させられて、配給となりました。まさに戦時中の配給制そのものです。で、当たり前のように2回目の合宿からは、みんながそうするように3個セットの割安な缶詰しかもっていきませんでした。

その3個セットの定番が、確かフレーク缶で、それもサバだったような気がします。とにかくあまりおいしくなかった。

にもかかわらず、マネージャーだったので食堂で中村先生のすぐ横に座らされて、毎回出るのがフレーク缶。「松田、この缶詰はうまいぞ、もっと食べ！」と無理強いされ、閉口した思い出があります。今でも、ツナ缶は食べますが、さばのフレーク缶は見るのもいやです。

結局、高価な缶詰は合宿最後のOBの打ち上げの酒のつまみになっているというのは今でも同じでしょうか？

開成バレー部70年史に掲載する戦績については、私は何も思いつきません。岩井の合宿で絞られた思い出、悲壮な覚悟?で僕らだけで夜明けの自主トレを行なったこと、ママさんバレーチームの練習相手をさせられた等の情けない思い出しか無いです。

それでも昭和47年卒業組の自慢は、還暦を過ぎても11人全員が健在で連絡が付くことではないでしょうか？先日も新年会を開催し、久しぶりに旧交を温めました。

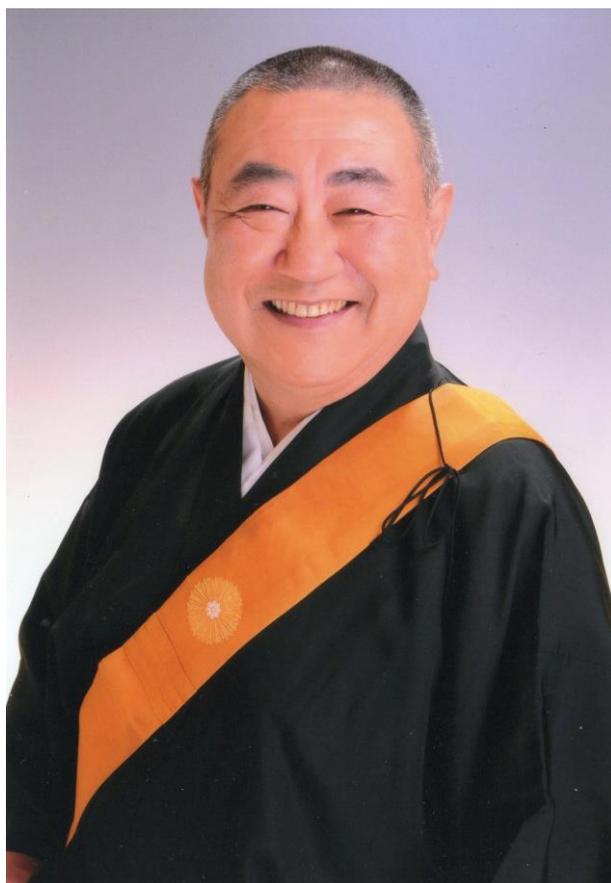
これも開成バレー部という存在があったからだと思います。

これからも開成バレー部の末永いご発展を祈ってやみません。

昭和48年卒

故矢澤俊彦和尚

平成28年4月ご逝去



ご自宅を会報発送の作業場に提供してくれる等、OB会の活動には大変ご尽力いただきました。ご冥福をお祈りいたします。

昭和48年卒

故矢澤俊彦君のこと

小泉 哲郎

矢澤とは50年前にお互い新入部員として、中学校舎前のバレーコートで会って以来の付き合いでした。『クリクリとした目で坊主頭が似合うな』と思ったら、それもそのはずお寺の息子。

バレーコートといっても屋外で地面はコンクリート。フライイングレシーブをすると、ユニフォームが破けたり顎を傷つけたり・・・。上下の学年の強力な陣容に比べ、僕らは矢澤以外からつきし弱体で歯がゆかったことと思います

矢澤のポジションは、中学では9人制の要であるハーフセンター、高校は6人制のセッター、もちろん中高とも頼りになるキャプテンでした。

岩井の合宿でエロ次（失礼。故中村先生）にどんなにしごかれても、当時の全国高校三冠王中大付属との試合で完膚なきまでにやられても、いつも笑顔で僕らを奮い立たせ引っ張ってくれたことを思い出します。

昨年3月中旬に開成の同級生から『矢澤君が本日肺の手術を受け無事終了。1週間位したら退院』とのメール。3月23日に『すぐに良くなるだろう』と気楽な気持ちで見舞ったので、1時間以上2人でとりとめのない話をしました。

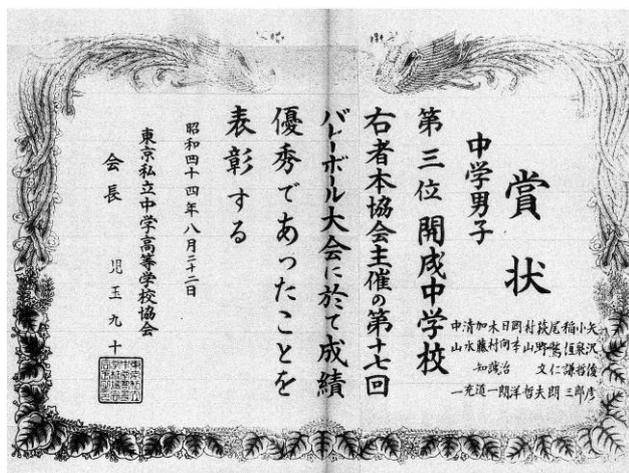
今考えると、彼は最後のつもりで付き合いしてくれたのかもしれませんが。『リハビリ準備だ』と言って、病室から歩いてエレベーターまでいつもの笑顔で見送ってくれました

4月15日の告別式当日、少し早めに行って彼が住職をしていたお寺（法真寺）のまわりを見て回りました。これだけ付き合いながら仕事の話はほとんどしなかったのに、開山500年近い法真寺の由来を初めて知りました。

式の最後の挨拶でご子息が参列者に対し、『父の底力と温かさに支えられてここまで来た』と話しておられたのが心に残ります。

通夜の帰りに高校卒業同期6組の何人かで飲んだ時、誰かが『矢澤はみんなのアイドルだった』と言っていました。本当にいるだけで、みんなが明るく楽しくなる奴でした。

中学、私学大会3位



昭和49年卒

バレー部6年間の思い出

松原 秀彰

昭和49(1974)年の開成バレー部卒業生は19人いる。もう60才を過ぎバレー部時代の記憶は少しあやしくなっている。でもまだ多くのことが鮮烈なので(鮮明とは言えない)、記憶が無くなる前にこの創部70周年記念の記事に残しておきたいと思う。

私達の学年は、まずは中村博次先生を抜きには語れない。以前、中村先生追悼の文章では先生を主役にしたので、今回は我々が主役で書くことをお許しいただきたい。とにかく中村先生は我々が中一(1968)のとき、何と50人近くを一挙にバレー部に入れてしまったのである。よく教員の間でこの行為が問題視されなかったかと思う(たぶんされたと思うが)。私の場合はおまけがあって、不幸(?)なことに私の4組の担任が中村先生で、直接先生から誘われるのに加え、たぶん父兄面談の時にでも言われたのだろうが、私の両親からも、「担任の先生があそこまで誘ってくれるのだからバレー部に入ったらどうだ。」と、入部を勧められてしまった。まだウブな(?)年頃だったので先生や両親の勧めを素直に聞き入れることにした。はじめてバレー部の練習にでてみたら、まあ50人中一がバレーのコートを囲む光景は、「何じゃこれは!」と思った気持ちとともに、今もって鮮烈に覚えている。私達の開成の学年の卒業40周年をやったときに、「僕もバレー部だったんだけど覚えている?」という声を何人にもかけられた。一学年300人で、その6人に1人がバレー部だったわけだから、まあそういうことになる。当時、つまり私達が中一(1968)の時、バレーボールは男子がやるスポーツしてメジャーではなかったと思う。私もバレーボールは女子のスポーツと思っていた。それでも、男子バレーが東京オリンピック(1964)で銅、メキシコ(1968)で銀、ミュンヘン(1972)で金、と男子バレーの人気はうなぎ上りの時代に、私達はバレーボールをクラブとして選んだのであったと思う。

しかし、私は、そんな一学年が50人もいるバレー部をいつやめて別のスポーツ部に入ろうか、ということをしばらくはずっと考えていた。そう考えていた理由を、この際だからもう少し書きたいと思う。一つは、バレー部の練習に出ても球に触らせてもらえないのである。基礎トレがほんと多かった。合宿なんかはとくにひどく、砂浜で走ることに球に触らされる練習を繰り返しやらされた。バレーと言えば、アタックを打つこと、レシーブで球を地面に落とさずにつなぐこと、サーブは誰にも邪魔されない攻撃、などにあこがれて入った私にとっては、「これがバレーの基礎か?」と疑うほどひどいメニューであった。また、それを実践したOB、先輩の方々の意地の悪さは半端ではなかった(ごめんなさい!)。しかし、おそらくは中村先生自身が、「あの人数を減らせ!」、という指令を出したと思うので、あのOB、先輩方にはあまり責任はないのではないかと思う。

さて、もっと大事な話(理由)をここでは書きたい。私がバレー部を移ろうと思った最大の理由は、このメンバーではなかなかレギュラーになれないな、と思ったことだと思う。

これは単に人数が多かったからというだけではなく、運動神経のいい奴がたくさんいたのである。他の運動部の同級生には悪いが、たぶん体育の授業でバレー部の連中がいろんな試合、例えばバスケットボール、ハンドボール、サッカー、陸上、・・・、そして運動会、棒倒しなどをリードしていたと思う。私はほんと真剣にハンドボール部に転部しよう思っていた。しかし、バレー部に残った。その理由について書き残しておきたい。

その大きな理由の一つは、実は上に書いたことと同じである。レギュラーになるのは大変なのであるが、1軍と2軍の練習試合のレベルが高いのである、ゲームとしてやっていて面白いのである。中学時代、私達は9人制でバレーを始めた。攻撃と守備の役割分担がある9人制はとても面白かった。攻撃と守備の両方とも、レギュラー争いは熾烈で、その分、対外試合は強かった。開成の中三は、今でもそうだと思うが、高校受験を気にしなくてクラブ活動にどっぷりつかることができるのでとても有利である。まず、予選の荒川区大会は常に完勝で難なく都大会通過であったと思う。中三の時、東京大会は9人制と6人制が両方あり、その二つともベスト8になったし、かつ私学際(9人制)は優勝した。たぶん、中学の成績では、開成バレー部の歴史の中で一番ではないかと思う(違っていたらごめんなさい)。

ここでまた中村先生の話をちょっとすることになるが、先生は開成バレー部中高の監督として最も面白い時期ではなかったかと思う。というのは、桑田さんの学年(当時高二、三)は東京都でベスト4まで行っていたし、我々の中学もベスト8まで行っていたからである。私がここで最も書きたいのはそういう中村先生のことではなく、私達は桑田さん達の練習や試合をほんとにあこがれをもって見て中学のバレーをしていたということである。おそらく、私達の誰しもが桑田さんの学年の誰かのプレーを見本としていたのではないかと思う。私は佐藤智由起さんにあこがれていた。

さあ、中村先生もOBの方々も期待したろうし、そして私達自身も、高校に行ったら強くなりたい、またなれると思っていた。私自身もバレーがとても面白くなり、転部を考えることはなくなっていた。また、中学時代のキャプテンは稲垣謙三君であったが、高校では私がキャプテンをすることになった。今の体育館は、私達が高一の時に完成し、当時部長は一年上の山本先輩で、体育館の使用頻度を決める部長の集まりに出席して、「バレー部の割り当ては週2日しか取れない」、と言って私達が待つ部室に戻ってきた。私は、先輩である山本さんを、たいへん申し訳ないことに、怒鳴って、「何やってんですか、そんなこと呑める訳ないでしょ、絶対週3日です。」と、確か会議をやり直しさせた、と記憶している。中村先生にも状況を言って、「先生の力でも何とかして下さい。」と、ちょっと禁じ手を使って頼んだのではないかと思う(影響があったかどうか不明)。その辺はかなり記憶が曖昧ではあるが、結局、新しい体育館の使用は、バレー部は火、木、土ということになった。

高校での戦績の前に、ここで私がバレー部に残ったもう一つの理由を書いておきたい。バレー部の仲間との関係が大事だった、それを切りたくなかったということに尽きる。バレー部の練習以外の時にも仲がよかったと思う。音楽、小説、映画、キャンプ、旅行、マージャン、ナンパ(?)・・・、いろんなことを一緒に楽しんだ、ふざけた、悲しんだ(?)・・・。バレー部の練習、試合、合宿とあわせると、ほんと相当に長い時間をバレー部の友人と一

緒にいたことになる。まあ、このことは私達の学年に限ったことではないとは思いますが、私達の学年の特徴は、人数が多くて、いろんな組み合わせがあって、ほんといろんなこと知っている奴がいて、バレー部内の付き合いだけで、飽きることがなく、完結していたと思う。

さて、これから高校での戦績について書くことにする。上の学年が少なかったお陰で高一から私達の学年が多く入ったチームで試合させてもらった。さすがに高校のレベルは高く、高一の時は支部大会止まりだった。高二の春の関東大会予選ではベスト16まで勝ち進んで、関東大会出場枠の13校に入れたいかと期待したが、だめだった。この頃のチームのタイプは攻撃型だった。弱点は守備であった、それからサーブであった。ベスト16前に負けてしまうことがあった。サーブレシーブから崩れることが多かった。取りこぼし（と私は思った）で負けてしまったとき、試合後、私はレギュラーをビンタしてしまった。「何でお前からビンタされるのか分からない。」と言われた。でも喧嘩にはならなかった。レギュラーは全員、ベンチおよびベンチ以外のメンバーに申し訳ないと思ったからだと思う。

そこで、私は、体育館での早朝練習、ネットを張っても可能な昼休みの練習、体育館を使用できないときの外での練習を提案し、サーブレシーブとサーブの練習を重ねた。また、チームを守備を優先したメンバーにもっていった。反対意見もあったと思う。高校から開成に入り、バレー部に入ってくれた石塚君（彼も中学時代はベスト8だった）の存在は私にはありがたかった。家が近いこともあって、よく私のやり方を相談した。「お前の思った通りにやればいいんじゃない。」というようなことを言ってくれた。でも、私のやり方が本当に正しかったのかどうかは今もって分からない。

高二の最後の試合、つまり秋の新人戦は、私達のピークではなかったかと思う。チーム力は安定し、取りこぼしをすることはなかった。ベスト16までは順調に勝ち進んだ。そこで、中大付属と当たった。第一セットは何とセットポイントをとっていた。清水君のサーブミスエース連発がすごかった。私も調子がよく、長身の相手のブロックを弾き飛ばしたり、フェイントしたり、面白いように決まった。相手の監督（中村四郎先生？）が、タイムアウトを取った。選手はみんなすごい勢い（強さ）でビンタをされた。私達はそれを見てビビってしまった。それはそうだろう、東京都で優勝をしようとするチームが、ベスト8への試合で、しかも開成に負けたら大変なことになってしまう。その頃はラリーポイント制ではないので、なかなかあと1点が取れない、何度かサーブ権が移って、結局ジュースで第一セットを取



られた。第二セットもそれなりに競ったが、最後は私のアタックがブロックされて（と言ってもコート後方におちるタイプ）、ゲームセットであった。その後、中大付属は確か優勝したと思う。タラレバではあるが、別のチームと当たってれば、少なくともベスト8は行けたと思う。それだけいいチームに仕上がっていたと思う。中村先生からは、「私の好きなタイプのチームになったな。」と言ってもらった。

新人選が終わり、高三で宿願の関東大会を目指すかどうかを皆で話し合った。いろんなことを話したような気がする。私は、全員がやり続けて、新人戦と同じチームで戦いたかった。しかし、ほぼ半数は高三ではやらない、という選択となった。そして、一年下の市村君の学年に「関東大会までやらせてもらいたい。」とお願いした。彼らにはこれだけでなくいろいろ迷惑をかけたと思う。私は、チームの編成を高二、高三の連合とし、レギュラーにも高三4人、高二2人とした。攻撃力はイマイチだったが、守備はよく、安定していた。関東大会予選では、ベスト16まではやはり順調だったと思う。ベスト8への試合では、駒大高（確か都で準優勝）と当たった。2セットで負けたが、かなりいい試合をしたと思う。今度こそは関東大会出場が決まった。中村先生は、決定（ベスト16からの選抜）の会議の時に、「今年は最初の枠に入れてくれよ！」と言ったと私達に報告してくれたが、本当にその場で言ったのかどうかは、私達の誰も知らない。とにかく、やっとな願がかなって嬉しかった。

関東大会は、埼玉県熊谷であった。そして中間試験とぶつかっていた。中村先生と一緒に校長室に行って、「関東大会に出たいので中間試験を休ませて欲しい。」とお願いした。クラスに帰って皆に「どうだった？」と聞かれ、「行けることになった。」と言ったら、みんなから「いいなあ！」ととてもうらやましがられた。確か、試合前日に出発し、開会式に出て、その時に中村先生が、「私は審判でなく、監督で来たんだよ。」と別の先生達に自慢げに話すのは、私達も嬉しかった。泊まった宿でのお風呂に先生や皆と一緒に入りながら、「東京以外の場所にこうして試合に来れたんだなあ。」と思った。試合は、国学院栃木というところと当たった。東京予選で負けた駒大高の連中が、「フレフレ開成！」とスタンドから応援してくれた。しかし、完敗だった。私達は安定したチームだったのに、緊張してしまった、本来の力を出せなかった。こういう大会は、やはり経験が必要だと思った。去年、関東大会に出ていればこうはならなかったと思った。負けた後、東京にすぐ帰って、中間試験の後半は受けなくてはならなかった。確か1回戦に勝ってれば中間試験の間はずっと熊谷



昭和48年度
関東高等学校男子バレーボール選手権大会
44.6.2 (土) 熊谷市立市民体育館

にいられたはずであった。帰る途中のどこかで何人かで残念会をやった記憶がある。

高校時代では結局、中学で出したベスト8の壁が越えられなかった。キャプテンとしての私のやり方がよくなかったなあ、と反省することがある。中村先生からは、「日体大の学生かOBをコーチにつけるか?」と言われたことがあるが、断った。中村先生の強力（強引?）な指導も拒否し、OBの方々からの指導も遠慮した。自分たちで考えてやりたかったのである、それが開成のバレーだと思ったのである。私なりにいろいろ考えてやったのであるが、結果はベスト8になれなかったのだから、失敗だと思う。授業中に隣の席の奴から、「おまえはいつもバレーのことばかり考えているなあ、その絵はフォーメーションのこと?」と、覗かれていた。もう一回やり直すことができるのなら、いろいろアイデアがあるが、最も大事なものは、強豪チームともっと沢山の練習試合をしておけばよかったと思う。私にとってはバレーどっぷりの楽しい6年間であったが、キャプテンとしての私はかなり強引なところもあって、同学年の連中、後輩諸君にはかなり迷惑をかけたと思う。この場をお借りして謝っておきたい。

思い出したことを長々と書いてしまったが、まだ大事なことを書き忘れたこともあるような気がする。バレー部のOB、先輩にはとても世話になった。何ととっても、結城さんと矢澤さんには特別に面倒をみてもらった。最後に19人の名前を書いて終わりにしたい。青木、石塚、稲垣、老川、岡本、荻野、尾鷲、清水、柏女、加藤、木村、高塚、丹治、中山、堀口、保條、松原、村山、山崎（現、井上）。



昭和50年卒

故杉山君を偲びつつ 現役時代の思い出を語る

開成卒業後間もなく、帝国ホテルで開催した排球部創部30周年パーティのお手伝いをしてから早くも40年、70周年を迎えるに当たり、同期で酒を酌み交わしながら当時の思い出を語り合いました。

折角の機会をいただいたので、できるだけ生の声の形で記録しようと思い、鼎談形式に若干編集しました。

- A：昭和50年卒の我々は卒業時には7人と、当時のバレー部顧問の中村博次先生が学年担任であった諸先輩のいわば「団塊の世代」の1年下として、また、中学時は9人制から6人制への移行期に当たったので両方経験した学年だったよね。
- B：当時は体育館もなかったのでアスファルトのコートで、スライディングで上着はボロボロ、今ではちょっと考えられないけど炎天下でも水を飲むのは厳禁で、当時発生し始めた「光化学スモッグ」もものともせず練習したよね。うさぎ跳びや腹筋もよくやったけど、いまでは膝や背筋にはよくないといわれる体勢だった。でもおかげで？丈夫な体になったよ。
- C：そうそう。特に低学年のときには、今日はコートのなかで3人レシーブ練習のチャンスがあるかな？なんて思いながら、せめてボールを後ろに逸らすものかと、ね。
- B：合宿でもお風呂の順番が回ってこず、シャワーで済ましたのも今となれば懐かしい思い出。
- A：合宿といえば、先日当時毎年春夏に行っていた岩井の「前芝荘」を訪ねてみたんだ。今は代替わりもあって廃業したとのことだったけれど、当時のおかみさんはご健在だった。
- C：さすがに40年の月日の流れ、本当に懐かしいね。熱く焼けた砂浜での「陸トレ」や蒸し風呂のような体育館での「マッハ」はしんどかったあ。
- B：さて、肝心のスコアブックなど当時の正式な記録がどうしても見当たらないので、みんなに当時の成績を思い出して欲しいんだけど。
まず中学時代は初めて区大会に出たときもほとんどぶっつけ本番のような感じで、どこまで通用するのかとても不安だったことは今でも脳裡に焼き付いているよ。
- A：残念ながらその新人戦は初戦で惜敗したけれど、その後は9人制・6人制とも区大会では優勝し、都大会にこぎつけたっけ。
- C：3年の時にはたまたまそれが運動会当日に重なったこともあって、俵取りにも参加できず、申し訳ない思いで一杯だったなあ。
- A：高校に上がってからの1年間で、このままバレー部を続けようかみな悩んだ時期で、中学からの仲間が数名辞めてしまったのは残念だった。

そんななか高校編入生の今は亡き杉山君が対角エースとして入ってきてくれたのは心強かった。合宿ではピアノで「月光」を披露してくれて、一切楽器のできない僕にはとてもまぶしかった。

中学時代の坊主頭から解放され、某君などは髪を伸ばし過ぎ、と中村先生に注意され、試合の合間に坊主頭になって帰ってきたら、さすがの先生も慌てて散髪代を出してくれたのも懐かしいね。(笑)

C：そうだね。我がチームは、狙い澄ましたストレートを武器とした絶対エースと、その対角で頑張ってくれた杉山君になんとかつなげて決めてもらうという単純なスタイルだったけれど、支部予選では5点以上取られることもあまりなく、2試合連続零封したように記憶している。結果どの大会でもベスト16以内に入り、特に当時の東京都3位、強豪校の駒場学園にストレート勝ちしたときはうれしかったなあ。

B：我が同期は人数も少なく、長身のプレイヤーもいなかったけれど、十分渡り合えたってことだね。それと通常なら引退の1学年上の諸先輩と一緒に最初で最後の泊りがけの遠征として関東大会に行ったのもトピックスだね。天井の高い立派な体育館で緊張が解けないまま国学院栃木に1回戦負けしたのはくやしかったなあ。

A：今年還暦を迎える我々としては、2年前にあっという間に人生を駆け抜けたような杉山君を失って、今もポッカリ穴があいたようだけれど、バレー部で培った絆はこれからも大事にしていきたいね。

B・C：これからもよろしく。



高校では6人いた同期全員がレギュラー。下級生を入れても9人だけのチームになったが、絶対エースを中心に相手の挑発に乗らないクールな試合運びで、当時の全国レベルでも強豪校の駒大高などと対戦、敗れたものの、多くの大会で都ベスト16になるなどの記録を残すことができた。

昭和51年卒

島川 誠一郎

51年卒は上野・上田・島川の3人。9月初めに仲良く20kgほど増量した体で集まり思い出話をした。／上野は中高をバレー部で通したが、上田と私は高校からの入部組。上田は松平監督の「ミュンヘンへの道」に感動して硬式野球部から転部し、私は多分暇を持て余していた所に同じクラスの上野に誘われ入部した。上田は2ヶ月でフライングレシーブの名手となり、私も卒部前にはアタックラインの前に打ち込めるようになったが、強くて生意気な1年後輩達を超えるまではいかなかった。／上野の話では、我が学年も中1の頃は10数名居た。問題はバレー部の「団塊世代」。中村先生が学年担任だった2年先輩が56人も入部して、我が学年は玉拾いもままならずハンドボール部に大量転部したという。／一番思い出されるのは岩井海岸での夏合宿。合宿が近づくと気分が落込んだ。合宿所には現役を上回るOBが待ち構えていて息もつけない指導。当時は「根性」の時代。練習中の水分補給は厳禁。兎に角喉が渴いた。練習後は水を飲めるが、我慢しているから飲む量も多い。松下さんは洗面器1杯の水を一気飲みした。／5校リーグでは他校の女子マネジャー達がまぶしかった。開成は上田がマネジャー。／中村先生の”ひらめき”に翻弄されたことも思い出される。上田は岩井海岸から秋田に合宿所の変更を指示されたが、岩井海岸の家主がごねると中村先生は急遽変更を取り止め。不貞腐れた上田は暫く練習に来なかった。私もそれまで一回も試合に出場機会がなかったのに突然コールされ、トレーナーを脱ぐのに手間取り結局交代できなかった（これは愚図な私が悪い）。／1年先輩は丁度6人。まとまりがあり思いやりがあって勉強もできた。試合にも強くて「団塊世代」と同じ都ベスト16。ちなみに我が学年（といってもレギュラーは主将の上野だけ）はベスト24。主将の市

村さんの熱血発言を、松下さんがまぜっかえし、安藤さんが無気力発言で駄目を押すのがいつものパターン。時々「ジイサン」と呼ばれた上野の脱力発言が続き、笑いが絶えなかった。女の子にもてた左の強打者杉山さんは残念なことにもうこの世に居ない。／一徹な上野は大学でも医者となってもバレーを続けた。私は会社に入ってから2年先輩の山崎さんや松原さんと何度か酒を飲む機会があった。「団塊世代」も良い人達だった。／バレーを卒部してから40年余り。3人合せて6人の子供ができ、私にはもう直ぐ孫ができそうだ。



昭和53年卒

バレー部思い出の断片

S 53年卒合作

1. 中学時代

中学というと、まず坊主頭を思い出す。その坊主頭での初めての公式戦が荒川区の新人戦。そこで目にしたのは荒川5中の選手だった。まだXXXも生えそろわない、少し前まで小学生だったわれわれの前で、荒川5中の選手たちの横には妖艶な（そのころのわれわれの目にはそう映った）女の子たちが寄り添い、はべっていた。

そんな状況で、われらがK君はまったく臆することなく、そのころ全盛だった「イナズマサーブ」を連発して大活躍してくれました。（勝敗はこの際問わない）

もう一つ記憶に残っているのは、われわれの1代前の先輩方の部活動費の折衝。老川さん、久保田さん、近江さんの3名の方々が参加され、老川さんが腕を組んで怖い顔をして中央に座り、その後ろに久保田さんと近江さんが、なんとバットをもって仁王立ち。折衝の席で話が滞ると、久保田さんと近江さんがバットを「バシッ」と床に打ちつけ、それで話がスムーズに進むようになった、と伺っています。（部費は当然満額回答）

いまではいろいろ考えられないことが普通に起きていた、楽しい日々でした。

2. 高校時代

2-1 夏合宿

何と言っても忘れられないのは千葉県岩井の前芝荘での夏合宿。サウナ風呂のような体育館で延々と繰り返されるワンマン・レシーブは、開成健児のど根性を養う一方、今で言えば‘非科学的’と非難されそうな夏の風物詩であった。ところがである。マネージャーであるO君が前芝荘の予約するのを失念し、2年生の夏合宿は開成の体育館を使っての通い合宿となってしまった。それが結果として吉だったか凶だったかは既に記憶の彼方に。

その他に夏合宿で思い出されるのは、OOOさんのインキンタムシが風呂で移ってその夏はたいへんだった事。最近インキンタムシなる言葉をついぞ聞かないが絶滅したのだろうか??それから砂浜を走るのはとてもつらかった、ちょうど疲れるころにOBのハチさん（本名山本さん）が立ってて休むことが出来なかった。

2-2 私学祭

2年生の時の私学祭は会場が日大豊山高校。会場に到着して体育館の外を通りかかると中で日大豊山の選手たちが逆立ち歩行をしているのではないか。我々をバレーボールの道に駆り立ててくれたテレビ番組「ミュンヘンへの道」で、松平監督他みんなが見守る中を大古選手がバレーコートの9メートルを逆立ちで歩き切って倒れる感動のシーンが思い出された。みんなで「凄いなあ〜」と嘆息したものの、誰ひとりとして「俺たちもやろうよ」と言い出さなかった。この姿勢が私学祭で優勝出来なかった一因かもしれない。

2-3 中村先生

我々の時代のバレー部顧問は言わずと知れた中村博次先生。高1の時にはバレー部創立30周年とともに先生の国際審判員ライセンス取得を記念するパーティーに参加。その後は国際試合で先生が笛を吹くのを何度も目にすることになる一方、我々の練習からは足が遠のいて行ったように思う。そんな偉大な先生であったが、誰が命名したのか諸先輩から継承したあだ名はご存じ「エロ次」、今でも老川先輩の声音まで頭にこびり付いている。

2-4 フライイング・レシーブ

よく練習を見に来てくれていた諸先輩の中でも村山先輩のフライイング・レシーブは凄かった。とても手が届きそうにないボールに瞬間的に反応し、驚くほどの跳躍力でレシーブする姿は‘フライイング’の表現がピッタリ。翻って我々はと言うと、手が届かない場合でも‘出来る限りの努力はした’というポーズにフライイングをする場合がま



まあったように思う。同期に汗かきのY君がいたが、彼がフライイングした跡は川のようになってしまう、それが試合中だとモップ部隊が不必要に大忙しとなってしまうのだった。



昭和54年卒

昭和54年卒の活動を日記から拾い出す

熊谷 達範

私は小学生から現在まで日記をつけているので、昭和54年卒の活動を中心に日記から拾い出しました。当然、私視点での記述多くなってしまいます。

私は、1973（昭和48）年開成中学入学後、小沼宏治先生が顧問のハンドボール部に入部しました。そのため、昭和54年卒の活動記録は、1974（昭和49）年11月6日、中2の西古靖君が私にバレー部のことを教えてくれて、翌日バレー部に入部したところからスタートになります。入部後同学年の方はとても親切で、11月12日には西古君は私がユニホームがないことを心配してくれました。

初心者であり運動神経のよくない私なので、1975（昭和50）年1月9日、珍しく中2全員出席の練習の時、関茂和君との対人パスではだいぶ迷惑をかけました。1月11日の練習では3kmマラソンをし、練習後、開成近くの「一天」で興村義孝君、関君、西古君とラーメンを食べています。1月14日野々村泰雄君、頼広圭祐君にキャプテンの関君が喝を入れています。（後日、関君本人もしっかり記憶していました）当時中学の練習は現中学校舎の下がアスファルトのコートで雨天時はできません。1月16日、雨の為、2年5組でミーティングになりましたが、中1の出席はゼロでした。1月23日、老川知永先輩（昭和49年卒）と小松雅人先輩（高1）が来られ、締まった練習となる。1月30日、練習後同学年の方と食堂（戦前旧高校校舎裏に体育館あり、食堂に転用されていた）でうどんを食べる。井手本康君と日暮里駅まで帰る。2月11日東京都体育館でヤシカ対日立武蔵戦などを観戦。美人の飯田さん活躍。2月15日高2のハンドボール部綿引純男先輩にバレー部頑張れと激励される。

2月16日開成体育館で5校リーグ開催。芝に負け、麻布に負け、学習院に負け、中村博次先生から「全敗したら、坊主」と言われ、暁星に勝ち4位。3月に那古船形の開成水泳学校宿舎で春合宿。総チーフ山本純一先輩（昭和38年卒）中学チーフ柏女浄照先輩（昭和49年卒）。

ミーティングで山本先輩が「ボールはまるい」という名言を残す。

中3になり、4月20日、高2修学旅行の為、高1の先輩が公式戦に出場。1回戦に勝つが

2回戦敗退。4月22日から4月30日にかけて朝7時から体育館で朝練習。

4月26日荒川区大会。南千住中、荒川9中に連勝してブロック大会出場となるが、着替えが遅く、山本純一先輩から怒られうさぎ跳びになる。翌27日荒川4中に勝つが荒川10中に負け

荒川区準優勝。松井聡君が試合中コートの手前でボールをとりにいく。井手本君と接触。

5月4日ブロック大会、足立4中に完敗。6月7日クラブ勧誘会の後、東京都体育館特別

席でブラジル対日立武蔵戦などを観戦。観戦後、背番号5の女子選手に握手してもらう。6月8日、中学の練習に中3が1人、中2が3人に対してOBが15人来られる。練習後、牛乳屋で老川功明先輩(高2)が中学生におごってくれる。横内哲也君がいた。6月9日、途中入部の熊谷がユニフォームがないため、わざわざ新ユニフォームを作成してもらう。

(紺黄)6月22日荒川区大会。1回戦シードで2回戦日暮里中に勝ち、ブロック大会出場となるが、3回戦荒川9中に負ける。6月28日、学年対抗中2に負ける。7月13日ブロック大会、足立4中に1-15、第2セット12-3までリードするが、その後12-15で負ける。西古君いない。7月26日、骨折していた興村君が久しぶりに練習にくる。8月11日から16日岩井前芝荘(井野善久)で夏合宿。各自缶詰3個持参。中学チーフ荻野文夫先輩(昭和49年卒)。練習日程は6時45分朝の体操。9時から11時まで海岸で基礎トレ。1時から6時まで体育館で練習。9月11日柏女霊峰先輩(昭和46年卒)がこられ、中村先生がまたジュースをおごってくれる。9月16日から朝練習。9月21日開成文化祭。麻布中に1-2で負ける。11月1日、キャプテン高浪孝勝君の中2荒川区新人戦を興村君と観戦。道灌山中に2-0で勝つ。11月4日高校の練習に参加。

1976(昭和51)年1月10日、東京都体育館で専売広島対日本鋼管戦を観戦。1月13日初練習。中3・高1全員参加。1月18日駒場東邦で講習会に野口恭司先輩(高2キャプテン)岡弘也先輩(高2マネジャー)野々村君と熊谷で参加。午後、東京教育大学附属駒場で東京都支部対抗戦があり、第3支部代表で久保田真一先輩(高2)が出場を応援。1月24日市村幹司郎先輩(昭和50年卒)老川先輩(高2)久保田先輩(高2)が練習にくる。1月27日風邪欠で高1が4人中3が5人の練習になり、練習後、一部アメフトもどきをする。2月14日荻野先輩(昭和49年卒)老川先輩(昭和49年卒)村山哲先輩(昭和49年卒)井上秀雄先輩(昭和49年卒)老川先輩(高3)が練習にくる。2月24日荻野先輩(昭和49年卒)村山先輩(昭和49年卒)井上先輩(昭和49年卒)久保田先輩(高2)が練習にくる。前芝荘で春合宿(日程不明・熊谷の音楽の本事件か)。

高1になり、すぐ4月11日「卒業生追出し会」。4月18日池袋商業で公式戦、高島高校に第1セット0-15、第2セット、途中で久保田先輩(高3)が出場するが、10-15で負ける。4月26日、熊谷はマネジャー補佐になる。4月30日、第3支部代表者会議に興村君、松井君と熊谷で参加。5月1日、麻布文化祭で高2は1-2で負ける。6月2日、明大中野へインターハイ予選代表者会議に興村君、松井君と熊谷で参加。6月20日、帝国ホテルでバレー部30周年、中村先生国際審判員取得お祝いをする。(OB会費は7000円)6月23日、明大中野へ練習試合申し込みに興村君、松井君と熊谷で行く。7月1日滝野川女子学園で公式戦代表者会議にマネジャー補佐松井君と熊谷で参加。8月11日から17日まで前芝荘で夏合宿。山本先輩(昭和38年卒)小山誠一郎先輩(昭和45年卒)矢澤俊彦先輩(昭和48年卒)小泉哲郎(昭和48年卒)が来られる。8月16日には学年対抗高1対中3は8-0で勝っていたが、最終的に8-15で負ける。8月18日麻布にて5校リーグ開催。高2は麻布に負け、小石川に勝つ。8月22日高2は池袋商業で国体予選3回戦修徳に負ける。8月24日高2は私学祭3回戦高輪に負ける。9月4日首藤紳夫君が練習に参加。9月5日熊谷、中学5校リーグを明大中野で観戦。9月19日開成文化祭で高2は高輪に勝つ。

9月25日高輪文化祭に高2招待され、負ける。10月2日郁文館と練習試合。10月30日上野高校と練習試合。11月21日高2新人戦。高1部長（なんとなく）関君に決まる。

1977（昭和52）年1月22日、東京都体育館で新日鉄対富士フィルム戦を観戦。1月22日開成体育館使えず、中学グラウンドで練習。帰国した桑田起義先輩（昭和45年卒）が練習にくる。この時、2人レシーブで熊谷が「新日鉄バカヤロー」事件）1月29日春高バレーの審判にいき、松井君と横内君がテレビに写る。3月2日西日暮里駅前スクランブル交差点で松井君と熊谷は警察官に見つかり、興村君スルー事件）3月25日から30日前芝荘で春合宿。高校チーフは海老沢純一先輩（昭和50年卒）足骨折の熊谷はマネジャーになる。首藤君と斉藤茂樹君（中3）がレギュラー入り。

高2になり、すぐ4月10日予算折衝で昨年並みの予算になる。また、「卒業生追い出し会」あり。4月17日池袋商業で春季大会は初戦豊島に0-2で負ける。5月1日池袋商業で関東大会予選は初戦成立に2-0で勝つが大泉に0-2で負ける。開成に戻り、ミーティングをした後、中学グラウンドで高2対高1で野球をする。5月7日松井君、興村君、横内君そして高1全員欠席で残りの部員で部室そうじ。5月10日クラブ勧誘会で新高1たくさん入部。5月29日開成体育館でOB練習会に首藤君と熊谷のみ参加。6月12日私立城北でインターハイ予選は初戦正則に負ける。6月14日高2は関君と熊谷のみが練習出席で老川先輩（昭和49年卒）の指導をうける。6月30日駿台高校と練習試合。7月26日高校チーフ安藤和誠先輩（昭和50年卒）の厳しい指導を受ける。7月29日から8月4日まで前芝荘で夏合宿。エピソードとして夜

鏑木孝昭先輩（高3）、井手本君、熊谷で海岸に散歩している。8月21日22日開成学園で私学祭。8月28日29日国体予選。詳細不明。9月15日私立城北高校で5校リーグ。2位。9月27日安藤先輩と松下和正先輩（昭和50年卒）が練習にくる。11月5日第3支部決勝戦を開成体育館で実施の為、中学校庭で練習。11月9日首藤君、足の回復よくない。11月13日新人戦1回戦負け。中村先生不在。11月14日には高1の斉藤茂樹君が新部長。11月19日町屋駅京成ガード下「浜作」で引退打ち上げ。11月26日引退試合も高2に2-3で惜敗。井手本君活躍。

興村君体調不良。

以上



昭和55年卒

開成学園バレーボール部 70年史に寄せて

昭和55年卒一同

■メンバー

私達の代は、中村博次先生が担任を持つ学年として、人数が多いという特徴があります。高校卒業の際の顔ぶれは、主将の佐藤をはじめ、井垣、檜尾、古口、斎藤茂樹、齊藤昭二郎、清水、高浪、馬場、花田、深津、柳田でした。

さらには中学において、岩沼、小宮山、坂本、露木、寺田、中沢、三輪など、また高校においては、黒崎、黒瀬、五来など、数多くの仲間がいました。高一の夏合宿では、合計20人を超えていたはずです。

■練習や合宿

前後の学年と共通ですが、中学では校庭のコンクリート舗装の上での練習で、サポーターをしていたとはいえ、よく大きな怪我がなかったと思います。高校では、現在も残る体育館で練習。高校入学の齊藤昭二郎が導入したウォーミングアップ方法に新鮮な思いをしたことを覚えています。

部室は、始めは高校の敷地にありましたが、中学敷地内に新設・移動されました。練習後は、学校の脇の牛乳屋さんで、コーラ（ホームサイズ500ml）を飲んでいました。プロテインでも飲んでいれば皆、体ができてもっと強くなったかもしれません。当時は、科学的トレーニングや栄養管理という発想はありませんでした。

合宿は中学3年時はいつもの五井、高校2年時の春は何かの都合で水泳学校に宿泊したように記憶しています。中学の監督は市村さん、高校は老川さんにお世話になりました。山本先輩（通称「はっつあん」）にミスをすると怒鳴られたのと（今ではパワハラ？）、体育館の角でやるマッハという激しい練習が懐かしい思い出です。

■ユニフォーム

中学では紺地白文字、紺地黄文字、高校では白のユニフォームを着用しました。運動会の頃、何人かが自分の組の色の鉢巻きをして試合に臨み、外された記憶があります。

■戦術

私達の代においては、中学高校を通して一貫し、守りを固めてエースのオープン攻撃につなぐ、シンプルな戦術をとって来ました。

樫尾の柔らかいトス回しに比べ、高浪のあげるトスは妙に高くあがるものでした。アタッカーは苦勞したと思いますが、昭二郎、馬場、茂樹、清水、佐藤、深津、みんなによく決めてもらえました。

さらに、樫尾、古口、柳田の堅守、花田のブロック、井垣の魔球サーブなど、多くの武器がありました。

■印象に残る試合

荒川区大会は9中がかなり強豪で2位、ブロック大会では2回くらい勝ちました。私学祭、5校リーグはともに明大中野に勝てず準優勝等、もう一步のところまで惜しくも敗退だったと思います。麻布、明大中野等はお馴染みの相手でした。特に明大中野のガマガエル（失礼）、何度も試合をした相手です。独特の風貌と動きをよく覚えています。また、駿台学園に行き練習試合をしたこともありましたが、残念ながら格の違いを感じたものです。早実ともいい試合をした記憶があります。

高輪高校戦、お互いの文化祭でホーム&アウェー(?)で試合をしました。ホームでは善戦するも、アウェーでは試験明けもありミスを連発し、連敗してしまいました。しかし、試合後は清水の周りに、女子高生がたくさん集まり、大変な人気でした。そこにはいつも井垣がいて、漁夫の利を得ようとしていたという説が。

大東文化第一戦 高2夏の新人戦、引退の大会で、勝てば都ベスト16入りの試合でした。格上相手に始めは歯が立たなかったものの、総力戦でフルセットに持ち込みました。馬場、斎藤両エースのがんばりでジュースにもつれ込み、マッチポイントも握りましたが、最後は力尽きました。一番の思い出の試合で、完全燃焼できたと思っています。老川功明監督、ありがとうございました。

■現在の状況

卒業後も主なメンバーで顔を合わせておりましたが、数年前に柳田が急逝して以来、追悼の意を込めて、1学年先輩の代と合同の会を毎年続けています。会場はいつも渋谷の焚火家という斎藤茂樹の店で、渋谷にあります。

昭和56年卒

コエロの学年

野澤 和久

「コエロの学年です」と言ったほうが私達の学年はイメージのつく方が多いと思います。中村先生の長男である通称コエロことキャプテン中村智博君を中心とした卒業時7名のデコボコチームでした。

中村君は都の選抜選手に選ばれるなど、その高い打点からストレートとクロスの絶妙に打ち分ける素晴らしいエースでした。

そのエースの力を引き出していたのがセッターの天明君。コート内外をとにかく走り回る小まめな奴で、先輩からも信頼されていました。ただ、後輩には厳しく、練習でのボールの投げ方から「餌撒き天明」と呼ばれていました。

そして髭が濃くてオヤジ顔の今中君。口が達者でムードメーカーでありました。

以上の三人が旧高。残りの四人は新高で、バレーは中学の授業以外でやったことのない奴ばかり。水泳が得意の筋肉マン鈴木君、ニューミュージックと麻雀が大好きな市山君、何に対しても感心する真に純粋な栗村君。そしてキャプテン中村君とよく喧嘩をしていた私野澤です。



この写真は都大会のものらしい。
裏書きがあるが、記憶なし^^
もしかすると馬向東あたりかも。

私達が高二のなったときには新高も含めた数名の高一が所属していたのですが、確か練習内容のことで高一の前で中村君と大喧嘩になり、それ以降高一のみんなが練習に出て来なくなってしまいました。OB名簿をご覧いただくと昭和57年卒の名前がありません。これは私達のせいなのです。誠に申し訳ありませんでした。

お世話になった中村先生、先輩方に何も御恩返しができないまま、卒業して35年が経ってしまいました。しかし、デコボコチームの面々はこのところほぼ毎年会って旧交を温めています。十数年前に急逝したキャプテン中村君と中村先生の墓参をしたあとに酌み交わすのです。この「コエロの学年」の同期の繋がりを、バレー部の発展、OB

会の興隆のために少しでも活かされれば幸いです。

バレー部 70 周年、誠におめでとうございます。これまでバレー部、OB 会を支えて下さった、先輩方、先生方、そして現役のみなさんとそのご家族に、心より感謝申し上げます。



白黒写真は S51 夏合宿のもの。
この時は那古舟形の水泳合宿の
宿舎前、中学校グラウンドでの練習。
どこどこに裏書きあり



昭和59年卒

全国覇者を追い詰めた我らの最終戦

清水 誠一

タイトルはいささか勇ましい。しかし、2割程度は当たっていると思う。開成を破った後、そのまま勝ち進み翌春（昭和58年<1983年>）の春高バレーで優勝した「ミラクル東亜」と称された東亜学園を、1セット奪取までもう少しのところまで追い詰めたのである。

昭和57年（1982年）11月の新人戦、翌年の春高バレーの予選であり、負ければ我々高校2年生が「現役引退」となる大会だった。開成は1回戦をシード、2回戦、3回戦ともフルセットで勝ち上がり、その日のコート決勝に臨んだ。相手は東亜学園。全国的にはまだそれほど名を馳せていなかったが、どの大会もコート決勝突破は当たり前前の強豪校だった。2、3回戦までと異なり、試合前の練習の時から格の違う強烈なスパイクを各選手が打ち込んでいた。

案の定、第1セットは0-15の完封負け（当時はサーブ権のあるチームが得点する15点制）。1周6ローテのところ、3ローテしか回らず（3回しかサーブ権を取れず）、あつという間に終わってしまった。完膚なきまでに叩きのめされた。このままなら、第2セットも何人サーブを打つことができるやら・・・。

第2セット、東亜は先発メンバーをほぼ全員変えてきた。要は2軍の登場である。開成はなめられた、いや、情けをかけてもらったのだ。ところが、2軍相手に結構いい勝負となった。いや、それどころか、対等に打ち合い、相手の強打もブロックで止め、11-10と終盤戦でリードを奪った。東亜はたまりかねて1軍先発メンバーに交代。開成サイドは敵の1軍を引き摺り下ろしたとばかり、大盛り上がりとなった。開成の勢いはなおも続き、スパイク、ブロックが（1軍相手に）決まるごとに、運動会の勝どきをあげるようであった。そして、14-13とセットポイントを先に奪った。あと1点。しかし、最後は地力で格段に開成を上回る東亜が点を重ね、逆転。開成は14-16でこのセットを落とし、敗退となった。

負けて「引退」が決まっても、気分は爽快だった。試合後、中村先生やコーチとして来てくれていた先輩方もみな満足気だった。それに対し、東亜の方は、円陣の中で監督の激しい檄がとんでいた。きっと、「開成なんぞに14点も取られ何をやっているんだ」と雷が落とされていたに違いなかった。

東亜相手のこの「善戦」は我々の学年だけの力ではない。事実、我々の代は、6つの先発ポジションのうち、両エースとセッターを含む4つが1年下の学年で占められていた。彼ら後輩たちの力がなければ、コート決勝にくることすらできなかったであろう。それでも、第2セットの途中からコートに出てきた我が同期の活躍も目に焼き付いている。相手の強打を見事に拾ったり、試合会場の天井の高さを活かした天井サーブで相手を翻弄した。

悔いのない「引退」であった。

冒頭に記したとおり、東亜はその後勝ち進み、翌春の春高バレーで、事前の呼び声が高くなかったにもかかわらず、全国制覇を果たした。「ミラクル東亜」の誕生であった。記憶が正しければ、東亜は全国優勝まで1セットも落としていなかったようだ。もしあの第2セット、開成があと1点先を取っていれば、全国覇者から1セットをもぎ取った唯一のチームになったかもしれない。そう思うと、悔しくもあり、嬉しくもあった。

若干時間が前後するが、東亜に絡んでもうひとつ思い出がある。開成が敗れた後の12月、東京都の決勝戦で、中村先生の計らいもあり、引退した我々同期メンバーが線審（ラインズマン）をすることとなった。場所は東京体育館、TV中継付き、そしてあの東亜と同じコート（の端）に再び立つことができ、誇らしげであった。しかし、そこで私は大失態を犯した。エンドラインの線審をしていた私は、私からみて遠い方にあるサイドライン際に落ちたスパイクの速い打球に、少し迷いながらもサイドラインを割ったとみて旗を振り上げ「アウト」のジャッジをした。ところが、主審は自信を持って「イン」の判定。私はミスジャッジをしてしまったのだ。会場はどよめき、応援席からは「線審がアウトってジャッジしているのになぜ！」との罵声も聞こえてきた。誇らしい舞台となるはずが、(TV中継もある中で)大恥をかくこととなった。

この試合後、会場に来ていた中村先生は、優しさからか私を名指ししなかったものの、「いいか、線審は自分の担当するラインについて判断すること。それが責任ラインの考え方だ」と我々を指導することを忘れなかった。

全国覇者となった東亜との試合、そして「責任ライン」。30年以上経った今もつい昨日のここのように思い出される。開成バレー部がいかに密度の濃い時間を与えてくれたかを物語っている。70周年を迎えた開成バレー部が今後も部員それぞれの心に刻まれる歴史を重ねていくことを願っている。



バレーボール部の思い出

昭和59年卒 石賀 和義

僕のバレーボール部の生活は、中学一年生の終わりに、同級生の松本君が誘ってくれたことから始まりました。ある部活のお試し期間に違和感を持ち入部せず、どの部活にも属していなかった時期だけに、バレーボール部はいい人が多くて、ここならずっと続けられるかなと思い、入部しました。部活の同期は卒業後も会うことが多く、いい仲間にあえてほんとはよかったですと思います。そんなバレー部で印象に残っている思い出を二つ紹介します。

一つ目は、「矢澤さん」です。高校生になると体育館で練習するようになりました。そして、OBの方が、時々、練習に来てくれました。その中でも、印象的なのが、「矢澤さん」でした。矢澤さんは丸刈り頭で、初めてお会いしたとき、「真面目な人だなあ。でも、何の仕事をしているのだろう」と勝手に想像を膨らませていました。後で、お坊さんと伺い、妙に納得しました。また、当時の現役生からは、少し太めに映りましたが、今の自分の体型をみると、それなりに引き締めていたのではないかと改めて思います。そんな、矢澤さんに最もびっくりしたのは、レシーブ練習でした。通常のレシーブ練習では、OBの方が球を打ち、現役生が球を受ける形でした。しかし、矢澤さんは、自ら、現役生と一緒に球を受ける側に参加してくれました。また、ダッシュや基礎トレなどの地味なトレーニングも一緒にやってくれました。会社に置き換えれば「上から目線ではなく、現場目線に立つ」とか「職員に対する伴走支援」といった位置づけになると思います。これからも矢澤さんのような謙虚さを常に忘れずに生きていきたいと思っています。

二つ目は、「マッハ」です。合宿では、普通では行わない練習を行います。マッハというのは、3メートルほど離れた2点を左右に移動しながら、レシーブを続ける練習です。初めての合宿で「すごい練習があるものだなあ」とびっくりしました。ところが、実際にやってみると、案外面白い練習でした。結局、身長が低い自分にとって、レシーブは差別化が図れる分野であることを直観していたのかもしれませんが。中学時代に、アタックの調子が悪くなり、レギュラーポジションから外れたことを苦にして、退部した人もいました。自分は、アタックが下手で、レギュラーには程遠く、その分、レシーブでがんばればいやと割り切りができていたので、部活を続けることができました。今思えば、「好きこそものの上手なれ」と「人間万事塞翁が馬」を地で行っていた感じです。卒業後、中村先生が「リベロ」という守備専門のポジション制度が新しく導入されたことを教えてくれました。自分の部活時代に導入されていたら面白かったらなあと思いました。

思い出は他にもいろいろありますが、バレーボール部での経験や先輩後輩の関係はいい財産だと実感しております。拙い文章ではありますが、本稿が、バレーボール部の七十年の歴史の一頁になれば幸いです。

昭和59年卒 増田修久

開成バレー部での経験は、自分の人生の礎です。様々な出来事を、50代になった今でも、鮮明に覚えています。

1978年春、中学入学時139cmしかなかった自分が、友達や先輩の影響で、なぜかバレー部に入部していました。＜スポーツ科学＞という言葉がない時代。うさぎ跳び、膝を伸ばしての腹筋など、のちに「やってはいけない」とされた基礎トレを、散々やりました。岩井合宿午前中の砂浜での基礎トレ。走るのが苦手だった自分は、いつもランニングから遅れ、途中で自分を待っている友達を羨ましく思いながら、休む間もなく走り続けました。雨の日は、「走らなくて済む」と喜んだのもつかの間。食堂の畳の上での基礎トレ、自分より重い友達を乗せての＜象さん＞、死にそうでした。バレーはそれほどうまく出来ませんでしたし、大腿筋の付き過ぎのためか脚の伸長も中2で止まってしまいましたが、根性だけは鍛えられました。

1980年冬、中学引退後、椎間板ヘルニアを患い3ヵ月離脱。復帰後、練習でスパイクを受け損ない親指骨折。精神的にまだ弱かった自分は、この2つの怪我で、怪我に対する勇気を奪われ、がむしゃらに頑張ることができなくなってしまいました。この苦い経験を踏まえ、大人になってからは、「怪我で怖いのは、勘が鈍ったり体力が落ちることではなく、勇気が失われること」と肝に銘じて、怪我に負けないプレーヤーになりました。

1981年秋、最高学年になった高1の11月、「バレーの基本はレシーブ。冬場はアタック練習をせずにレシーブを鍛える。」とのチーム方針のもと、練習に励みました。翌年、高2になる直前の春合宿。合宿チーフは、アタックが打てる者からレギュラーを決めて行きました。中学引退後1年半、全くアタック練習をしていなかったこともあり、レギュラーにはなれませんでした。

1984年春、高校引退後1年4ヵ月練習を休んで臨んだ大学入学直後の体力測定。現役時代60cm台だったサージャントジャンプが90cm台まで伸びていて驚きました。現役時代は、筋肉疲労で本来の力を出せていなかったのです。同様のジャンプ力の向上は、他の同期にも見られました。

身体能力の発揮を妨げる過度な基礎トレ。チームと合宿チーフの方針の違い。スポーツ科学を考えながら、年間を通じて現役を見続ける指導者が必要と考え、大学1年の夏からコーチを始め、週3回、開成に通い詰めました。根性練習をやめ、①成長期の中学時代に脚に筋肉をつけさせ過ぎないこと、②試合前日の練習は軽めにして疲労を取ること、③バレーボールに特化した筋肉づくり、④年間を通じ偏りのない基礎練習、⑤試合経験を積むため練習試合数を大幅に増やすこと、⑥試合の流れをつかむ声出し・駆け引きの指導などを行いました。

あくまで当時の現役の努力の結果であり、自分の指導との因果関係は不明ですが、開成バレー部は年を追うごとに強くなり、自分の現役時代とは見違えるような好成績を残せるようになりました。1988年夏、東京私立中学校バレー大会の優勝場面に、コーチとしてベンチにいられたのは、幸せでした。その後、後輩たちがコーチを引き継いでくれて、関東

大会を狙えるレベルにまでなったことは、大学生活を賭けた価値があったと、うれしい気持ちで一杯です。

しかし、後から振り返るに、自分が指導した後輩たちのバレー経験は、その後の社会生活にプラスになったのか、一抹の不安があります。自分は高校時代、試合に勝つ喜びは味わえませんでした。先輩方に叩き込んでいただいた根性のおかげで、社会人になってから、逆境の中で、むしろ燃えて、力を発揮することができる人になりました。高校生活のすべてを注ぎ込んだバレーで、ベンチを温めて、最も輝くべき時代を終えた屈辱のおかげで、50代になった今も、あの悔しさを取り戻すべく、バレーに闘志を燃やし、現役プレーヤーとして戦い続けることができます。開成バレー部で出会った同期、先輩、後輩、先生、ライバル、すべての人たちに感謝しています。

いずれにせよ、自分はバレーが大好きで、開成バレー部が大好きです。定年後に時間ができたら、また開成バレー部に顔を出して、恩返しをしたいと考えています。2001年の関東大会、自分は米国留学中で、見に行くことができませんでした。死ぬまでには一度、関東大会のコートに立つ開成バレー部の雄姿を見てみたいと、強く願っています。勉強もスポーツも、強い意志と、強い心と、たゆまぬ努力なしでは、高みに届きません。いつまでもその高みを目指し続ける開成バレー部であってほしいと思います。



昭和60年卒

開成バレー部と私

草野 昌行

私がバレー部を選んだのは小学校6年生時担任の先生から、中学校に進学したら運動部に入るのが良い、先生はバレーボールをやっていた、という話を聞いたことによる。(このときの小学校の先生は馬場俊一先生で、片野先輩と東京学芸大学で一緒に活躍されたことを後で知る。残念ながら昨年急逝されてしまった。開成バレー部とは直接関係ないが、私にとっては切り離せない話であり、この原稿は馬場先生にもささげたい。)

私たちの代は中学で7~9名、新入高校生に3名の入部があったが、最後まで残ったのは7名である。私以外は皆長身で、中学校の時から175cm程度、特に長身の高橋究君は現役引退時には190cmを超え、それだけに期待された学年でもあった。

中学2年生秋の新人戦から5校リーグまで、及び高校2年生の春の大会から新人戦まで、のそれぞれ最上級学年としての1年間ずつの間では、ブロック大会(中学)・コート決勝(高校)までの常連であり、私立学校主体のリーグ戦でも常に上位を占め、特に中学私学大会では優勝を収めることができ、一定の期待には応えたと思う。ただ、その一歩先の成績までは及ばなかった。中学新人戦のブロック大会での対戦相手である伊藤中学校はその年の全国大会優勝校だったこと、夏の大会は運動会当日にブロック大会があり、運動会を抜けて試合に臨んだことなど、今はよい思い出である。また、高校のコート決勝まで進むと、相手は東亜学園・明大中野・駿台学園のように、バレーボールの名門校、会場には相手チームの保護者もたくさん応援に来ていた。それでも1セット獲得と健闘することもあったが、最後はねじ伏せられてしまい、残念な思いをしたものである。

こんなチームの中での私の存在は、やはり小身ということもあり微妙だった。中学時代はツーセッターの1枚としていろいろな経験をさせてもらえたが、高校になりネットも高くなると、1セットに1回、サーバーから3ローテーションまでの参加にとどまった。さらに同じ能力ならば下級生を優先する中村先生の方針もあり、高2の最後はほとんど出番がなく、正直なところ、最後は精神的にきつかった。

一度、小学生大会の審判を経験する機会があり、そこで小学生にはバックセンター固定制という低身長選手でも活躍できる仕組みがあることを知った。現在のリベロの走りである。そのとき、これがあれば自分も活躍の場がと思いはしたが、それほどレシーブに長けていたわけではないことから、果たして活躍の機会があったかどうか。結局のところ努力不足だったのだと、今は振り返る。

むしろ楽しかったのは、現役を退いてからか。大学生のころはOB戦の主力世代として何度となく大会に参加した。相変わらず1大会で1回参加があるかないかだったが、現役時代のわだかまりはもうなかった。ほかに同級生と一緒にスキーに行ったり、飲みに行ったり、マージャンをしたり、などの機会をよく持った。最近はずいぶんスキーやマージャ

ンはしないが、それでも、幸い全員関東平野に住んでいるということで、家庭や職場で忙しい身の中、時間をやりくりして、一献を重ねる時は、気のおけない非常に楽しいひと時である。

現役のころ、春夏の合宿に50歳前後の超OBがたまにいらっしゃるのだが、あまりにも上の世代でどう接したものかよくわからなかった。が、今、私たちがその世代になってしまった。その会場の民宿前芝荘も、往復の急行内房どころか特急さざなみももうない。ともあれ、70年史に一筆を認めさせていただけるのは大変光栄であるとともに、100周年、できれば110周年や120周年も迎えてみたいなど、思うところもある。今後の開成バレー部の一層の発展を期してやまない。



昭和61年卒

津野 泰明

今更なので言えるが、私は元々バレー部に入る気はなかった。入学した頃はアルゼンチンのマラドーナが活躍していた時代でサッカー部に入ろうかと思っていたのだが、小学校時代の成長期に運動しすぎの為に、両足のくるぶしの下の骨がでっばってしまう症状になっており、運動部に入るなら安心の為に兄のいるバレー部でないとだめだという親の心配の下バレー部に入ることになった。

サーブの練習でボールが顔に当たってメガネを買い替える事態が多発し中一からコンタクトレンズにするなど良い面もあり、一応まじめにバレーに勤しんでいたが、本格的に面白くなってきたのはやはり試合に出られるようになった中三ごろからである。確か中三になる前の春合宿で久保田さん（S52年卒）が合宿にいらっしやり、アンダーパスもオーバーパスも球を殺すことが重要でありその為には球を緩やかに逆回転させられるように真剣にパス練習をすべきこと、セッターは球拾いをしなくて良いから一人でも直上トスをするなど練習中はとにかく常にトスの練習を続けろ、と教えて頂いた。そのおかげでパス対人練習への集中力が高まったし、トスの正確性・飛距離が格段に伸びた記憶がある。我々の学年は身長も小さめでメンバーの入れ替わりも多く、試合結果としてろくな結果は残せなかったが、個人的には中三は楽しい時期であった。

中学時代のエピソードをもうひとつ。たしか中三の夏合宿で故中村先輩（S56年卒・子エロ先輩）がチーフだった際に合宿恒例の岩井海岸浜マラソン練習があった。ほとんどのケースは浜往復何周とかの指示があるのだが、1日だけ指示がない日があった。炎天下2周しても3周しても子エロ先輩は腕をグルグル回すのみ＝まだ終わりではないという指示。もうやめてくれと何度も思ったが走り続けるしかなかった。何周走ったか記憶はないが、やっと終わった時にはもう練習はしたくないと思った覚えがある。今となっては良き思い出であり、おかげ様で人生の中で理不尽な事に耐える力をそこそこつけてもらったと思う。

中三のシーズンが終わると、誰もが同じだが当然また高校チームのボトムになり、大人げない私は部活が面白くなくなった。練習もちょいとさぼり気味になり、プラプラしたり悪い遊びを覚えたりして少しぐれかけていた。我々の一つ上の代は身長の高い先輩が揃っており我々の年代では強い学年であった。その中でも高橋究先輩（S60年卒）は最長身197cmの左腕でアタックとブロックはやはり凄かったのだが、レシーブに難点があった（究先輩、申し訳ございません）。チームとしてはレシーブ補強ということで究先輩が後衛に回った際には私を起用してくれるというラッキーな役割が回ってきた。おかげさまでレシーブを必死に練習しここではレシーブ力が伸びた。試合中交代の際には副審の脇で交代者同

士が手を上げて手の平を合わせるのが普通だろうが、身長差が大きすぎて当然手が合わない。ちびの私は恥ずかしかったが、究先輩は優しく気を使ってくれ手の平をご自身の顔の辺りまで下げてくれていたことをよく覚えている。

チームの最年長としての高二になってからも我々の学年は弱くろくな成績は残せなかったが、高二前の春合宿のチーフで他の諸先輩方の「こいつらの学年弱いな」という言葉に自分の事を言われたかのように憤慨しながら我々を指導してくれた藤森先輩（S58年卒）、夏合宿チーフで弱い我々の代を平日も練習に来て頂き指導して頂いた増田先輩（S59年卒）、には特に感謝している。

私は卒業後の大学では別のスポーツの体育会に入ったので開成バレー部に顔を出すことは全くなかったが、その間我々が同期の阿部君・石森君・小杉君が合宿のチーフを務め、平日練習にも行きしばらくの間後輩を指導していたと聞き、我々の学年もバレー部に貢献していた時期があったことは（なんもしていない自分はさておき）誇りに思う。

卒業後15年程経ってからだろうか、会社の同好会で少しバレーをやっていた事もあり久しぶりに麻布との対抗戦に顔を出させて頂いた。なんとなく気まずいな、と思っていたのだが、会社の先輩の市村さん（S50年卒）や故矢沢さん（S48年卒）や関さん（S54年卒）など皆さんが面倒見よく歓待頂き飲み連れて行ってもらったりしたことは大変嬉しかった。

にも拘らずその後もOB会に顔を出すことはなく失礼しているが、今後少しはバレー部に貢献できる日が来るであろうか。いつの日か開成バレー部全国大会出場の際には、少しの寄付をし盛大なる応援に行こうとは常に思っている。



昭和62年卒

松山 晃

弱かった。何しろ弱かった。中学時代の自分たちのチームの記憶は、それしかない。なぜか、いつも11点目以降が取れない。今と違って、サーブ権を持っているチームが決めた時にのみ点数が入る時代だった。11点目を取ると皆がまるで金縛りにあったかのように・・・サーブが入らない、サーブレシーブが乱れる、足が動かない・・・

3年生の荒川大会2日目もそうだった。どう見ても、南千住中が圧倒的に強かった。我々は、尾竹橋中、南千住中の順に当たる組み合わせだった。1試合目の尾竹橋中戦。1セット目は順調に11点まで取った。相手は4点。ベンチに座っていた故中村博次先生は早くもコートチェンジの準備を始めていた。そこからまた悪夢が始まった。12点目が取れない。取れる気が全くしない。あれよあれよという間に15対11で逆転されてセットを失った。第2セットも当然のように失い、ストレート負け。試合後、中村先生は、「お前らが尾竹橋中に勢いを与えた。尾竹橋中は次の南千住中に必ず勝つぞ」と予言。我々は、「そんなばかな。南千住中が負けるわけがない」と思ったが、尾竹橋中は次の試合を先生の予言通りに見事勝利し、1位で荒川予選を通過してしまった。この時、「勢い」とはこんなに大事なものなのか、と思った。

我々の代は結局、1度も荒川区すら勝ち抜くことができずに中学3年間を終えた。

高校進学とともに何名かが辞め、また何名かが新しく入部してきた。高1の秋、新人戦が終わり、我々が最高学年になった。中学までと大きく変わったのは、エースの奈村とセッターの山崎の身長がすくすく伸びたこと。特に山崎は、一番背が低いという理由でセッターだったのに、アタッカーだった私もいつの間にか抜かれてしまった。3学年上の増田先輩が指導に毎回来て下さるようになり、今までの基礎体力作り中心の練習から、実戦を意識した練習に大きく変わった。練習試合が増え、生きたボールに触る機会が増えた。サーブを打つ時に、緊張で手が震えることも無くなった。そんな中、奈村が第3支部の選抜メンバーに選ばれた。選抜チームから戻ってくると、格段に上手くなっていた。雰囲気も違っていった。自信に満ちていた。

我々と強豪校とはいったい何が違うのか、実際に強豪校の連中と一緒に練習してきた奈村に皆が聞いた。体格が違う、技術が違う、練習量が違う。でも一番違うのは、自信に満ちあふれ、相手を圧倒する雰囲気を持っていること、であることに気が付いた。

それから我々は、声の出し方を変えた。強豪校の真似をした。「自分たちは強いんだ」と自らに言い聞かせるように。それは中学時代には考えも及ばなかったことだった。そして、相手を探してひたすら練習試合を組み、経験値を上げた。「エースの奈村につなげれば絶対に決めてくれる、それ以外はひたすら耐える」という、我々のチームの勝ちパターンができた。試合をそつなく進められるようになり、いつしか中学時代のひ弱さは消え、同レベ

ル程度の学校が相手ならば、絶対に負けないという自信がついた。

結局、高校の最高成績はコート決勝までだったが、シード校と対戦できるところまで勝ち進むのが当たり前、と思えるようになった。弱かった中学時代からは考えられないことだった。精神的に強くなり、自信をもって試合に臨めるようになったことが全てだったと思う。そしてそれは、増田先輩が毎回指導に来てくださったからである。この高校時代の経験のおかげで今の社会人生活があるのだと、私自身大変ありがたく思っている。

昭和63年卒

横井 宏治

中村先生と一緒に持ち上がった学年で、引退時にいたメンバーは内田、川口、高草、田中、増田、松本、山内、横井、横江、和知の計10人。

メンバーを分類すると、

ワル and/or 遊び人系：田中、増田、横江

まじめちゃん系：内田、川口、山内、横井（、和知！？）

文化祭大好き系：高草、田中、和知

わが道を行く系（ギター教室のために練習ブッチ系とも言う）：松本

といった感じでしたか。

我々が高1くらいのときから、増田修久先輩に常任コーチとして、きめ細かくご指導いただくようになり、そのご指導の賜物で、都でベスト32くらいの、まずまずの強さまでは行けたかなと思います。

中学へ入学し運動会の洗礼を受けた後、父が昔バレーをやっていたこと、自分の背が当時高かったことから、自然にバレーボール部に入りました。練習は火木土、他の運動部と比べてそれほど厳しくはなかったと思いますが、それでもOBの先輩、高校生の先輩が怖くて、怖いのためにまじめに練習していたようなものでした。

印象に残っているのは何と言っても岩井の合宿です。OBの先輩方のしごき（マッハ、台上レシーブ、海岸のランニング...）、エアーサロンパスの匂い、練習の合間にひたすら体を休めた布団、朝食のアジのヒラキ、エ〇本その他の買い出し！？。行きの電車の中では生きた心地がしなかったものです。こういった苦行は、別にしなければしないで済むわけですが、自分でやると決めたこと、覚悟を決めて切り抜けた...、というわけではなく、辞めたりして、先生や先輩に怒られる方がいやだったから続けていました。

中学時代は、中3までは背が伸び続けたので、プレーもまずまずでした。かつクソまじめにバレー部の活動に取り組んでいたこともありキャプテンを仰せつかり、練習をさぼる同期をパトロールして引っ張り出したり、ケンカしたりと、今思えば何と迷惑な奴だと、赤面せずにはいられません。

学校生活でもバレー部での振る舞いのせいで、中3のときには「エ〇ジの子分」とうわさされ、ちょっといじめられそうになったりもしました。

中学のときの戦績は正直ほとんど記憶にありませんが、これは、実は受け身だった自分の姿勢が原因かと。

高校に入ると、新高の3人も加わり、まじめちゃん軍団の層が厚くなりました。また、増田先輩のご指導により、バレーボールそのものに対し、より高いレベルで向上したという

意欲も出てきました。

合宿は相変わらず恐怖でしたが、自らやると決めたこととして、覚悟を決めて切り抜けるようになりました。合宿に限りませんが、このバレー部での経験が、自分がやりたいことであれば、厳しい試練を伴ったとしても逃げずに克服する、という自分の生き方のベースになっていると思います(ただ、「やりたいこと」の選択が、妻の意向と大きく異なるため、家では肩身の狭い思いをしております)。

高校時代はチームのメンバーの自我が確立してきて、上記カテゴリーのように分化していきました。自分は、バレーで強くなりたい、という目的が鮮明になったがために、相変わらずチームメンバーにうるさく言うておりましたが、みんな、広い心でよく辛抱していただきました。この場を借りてお礼とお詫びを申し上げます。

高2時代に印象的なことと言えば、

- 大泉学園や堀越といった、当時セレクションをやっている学校に、練習試合で結構セットを取れるようになってうれしかったこと
- いろいろ真剣にケンカしたこと(原因は、部の運営方針もあれば、ちょっとした物の言い方が気にいらなくて半年間口をきかない等さまざま)
- 最終試合、大泉学園戦の2セット目、もう少しで勝てる所を自分がフカして、いつものように中村先生にボロカスにご指導いただいたあげく、見事に3セット目に逆転負けしたこと(和知キャプテンが感極まって試合中に涙し、中村先生に一発くらったことも込み)

でしょうか。

引退後はOBとして貢献しようとは思っておりましたが、大学でも血迷って体育会に入っ
てしまい、ほとんどお役に立つことがありませんでした。申し訳ありませんでした。

実は同期会を2016年になって初めてやりました。それまでも個々には会っていたのですが、ほぼ全員で20数年ぶりに会うみんなは、何と昔とそれほど変わりなく、まさにタイムスリップして、語りあうことができました。そこででてきたコメントは「横井～、お前はよく俺らのケツを叩いてくれたよな、実はちょっとはありがたかったよ。でも、お前が離れたトスを強引に決めにいてミスりまくっていたのは許せない。」「そうそう！俺もそう思ってた！」。え～、そうだったかなあ～。

平成元年卒

小木曾 和宏

「ガリ勉に負けんじゃねーぞ」対戦相手の監督が選手達に檄を飛ばしてるのを聞いた時、何か頭の中で弾ける音がしました。セッターの私はネット越しに相手に小さな声で相手にささやきます「ガリ勉なめんじゃねーぞ。坊主頭にしたらって上手くなんねーぞ」負けん気だけでプレーしていたあの頃を思い出します。恥ずかしながら自分たちの戦績をよく覚えていないのにプレー中の相手の顔、チームメートの仕草は今でも鮮明に覚えています。南千住中のエースの貫禄のある顔、道灌山中のセッターの小さいのにギラついた目、その一方で我がチーム篠田・市原・小木曾のわがまま連中に合わせてくれてた斎藤・末吉。いつも1人足りない我が学年、下級生の和里田君や松川君もよく付き合ってくれていたと思います。

中学時代は練習時間のうち体育館でできるのは半分くらいであとは屋外練習。中学校舎の前にあったテニスコートにネットを張って。風でサーブはあおられるわハードコートじゃ飛び込めないわでボールを使った練習より基礎トレばかり。上級生も先生もいない中坊だけの練習ではそんなに真面目にやるわけもなく締まりのない練習で試合前になって慌ててフォーメーション練習。試合も荒川区内でベスト8だったかベスト4だったか大して勝ち進んではいなかったように記憶しています。

それ以上にバレー部の思い出としては記憶に残っているのは何ととっても合宿でしょう。中学1年の初めての合宿のときは東京駅の動輪広場にたどり着くのが一苦勞。1週間分の荷物を詰めた巨大なバックを抱えて満員電車でもみくちゃにされながら東京駅に着いた頃にはもうへトへト。どうなることか不安でいっぱいに出発したのを思い出します。

中学3年の夏合宿は特に思い出深いものとなりました。3年にもなると春夏の合宿にも慣れ、関先輩や天明先輩が何日目に来るのかを気にする余裕もありました。キャプテンとなって中学最後の大会も控えているのもあって初日から中心になって練習も張り切っていました。その張り切り方が仇となったのでしょうか、3日目の練習でブロックの着地でバランスを崩し、右足首を捻挫してしまったのです。足首はみるみる腫れ、夜には内出血で赤黒い模様まで浮き出る始末。人生初めての捻挫、中学最後の大会目前、キャプテンとしての意識、いろいろなものが混ざって初めてチームメートの前で涙を見せてしまったのをよく覚えています。篠田君や斎藤君に慰められ励まされ、せめて声だけでもとそのあとの練習に参加しました。そして何より記憶に強く刻まれる事件がその夜起こりました。1985年8月12日、520名の方が亡くなられた日航機B747ジャンボ機墜落事故です。中学生ながらことの重大さを感じたことを強烈に覚えています。様々な出来事が重なったこともあ

り、高校時代まで9回の合宿の中で中学3年の夏合宿が強く思い出に残っています。

高校になると市原君と斎藤君が退部、末吉君が籍だけ残して参加しなくなり、同級生は私と篠田君の二人だけ、新高の入部が頼みの綱という事態になってしまいました。しかし幸いなことに向後君・山辺君・今井君と3人の入部があり下級生を入れれば何とか試合には出られる数がそろいました。しかしながら3名とも未経験者、上級生が引退する秋までの約半年の練習で試合に出なきゃいけないと今思えば無謀な話ではありました。アタッカーだった私は不在になったセッターに、新しく入部してくれた向後君と山辺君はセンターに、今井君はライトにとりあえず配置し、経験のあるアタッカーは篠田君と下級生の和里田君のみと、2人のレフト頼みのチームとして出発しました。

高校2年秋の新人大会で引退するまでの1年半はとにかく練習練習で、毎回ヘトヘトになるまでボールを追って這うように家路につくといった毎日でした。しかしそれが辛かったかいうとその逆で、とにかく練習に行くのが楽しみでしかたなかったのです。5時限目の授業中から膝にはサポーター、指にはテーピング、運動会の練習があってもすぐ着替えられるよう道着の下に短パン履いて走りながら脱いで体育館に向かったほどです。

高校2年になるとクラス替えもあって新高3人とも一体感が生まれ、向後君と山辺君の身長が185cmを超えてセンターとしても頼りになる存在になり、あとはセッター小木曾の技術向上次第といった状態で夏合宿を終え、兄のような阿部先輩と最後の大会秋の新人大会を迎えました。それまでの大会では1回戦2回戦負けばかりでも、今度は同じ2年生同士の大会、しかもこちらはチーム組んで1年経って試合経験は他より上なはず、と気合いが入っていました。初戦の3チームのリーグ戦を勝ち抜いてトーナメント進出、そしてトーナメントも勝ち上がって初めてのコート決勝へ。これに勝つと次の週に行われる2次トーナメントに行ける、そこまで勝ち上がったのは初めてだったので緊張したのを覚えています。試合は負けてしまいましたが、残念という思いより中学卒業で同級生部員二人になってしまったところから、ここまで勝ち進めたのが嬉しいという気持ちの方が強く、入部してくれた向後君・山辺君・今井君とコーチの阿部先輩と増田先輩、下級生への感謝の気持ちが大きかったのをよく覚えています。

卒業して大学に進学したあとも後輩の練習にコーチとして参加させてもらってましたが、後輩たちの活躍も自分にとってはとても励みになっています。数年前には関東大会に進出したという話も聞いて活躍している様子を知ると大変嬉しくなります。

「ガリ勉に負けんじゃねーぞ！」と今でも相手チームに言われてるのかな？などと自分の頃と重ねて後輩たちの頑張っている姿を想像しています。

平成2年卒

和里田 聡

高校2年生の冬に引退してから30年近く過ぎているので、どの学校と試合して勝ったか負けたか、どんな試合内容だったかなどは、最後の新人戦以外はほとんど覚えていない。思い出すのは、日々の練習、合宿などにおけるバレー部の方々についてである。そんな方々との思い出について記してみたい。

まずは、顧問の中村先生についてである。5年間ご一緒したけれども、酷く怒られたわけでもなく、厳しく指導されたわけでもなかった。お会いするのは、ふらっと練習にいらした時だけで、レシーブ練習で長嶋茂雄のように体を使い擬音語、擬態語を駆使した指導を受けた。夏合宿などでは、まるで寮母さんのような面倒見のいい先生でもあった。膝のサポーターが破れた際に、ツギハギをして頂いたのだが、ツギハギ部分に「Y」という英文字が記されていた。何故、「Y」なのかと思っていたら、「和里田のYだ!」とおっしゃっていた。同期の皆も「Wだよな〜」と思ったものの、誰も何も言わなかった。そんな程度の関わりでしかなかったが、試合となると、個々の選手の性格、能力、特徴をきっちり把握されていたようなので、それについてはとても不思議に思った。高校生には理解できるような方ではなかったのだと思う。

次に印象深いのはコーチをして頂いた阿部先輩(昭和61年卒)である。私の一つ上の学年が高2の時からコーチをされていたので、2年近いお付き合いとなった。私自身、生意気な生徒だったし、わがままでもあったので、めちゃくちゃご迷惑をおかけしたと思う。ご自身の大学生活がお忙しいにも拘わらず、日々の練習、週末の練習試合のほぼ全てに顔を出され指導をして頂いた。自分では真似のできないことで頭の下がる思いだ。忘れられないエピソードは、高校2年生の春先の公式試合のことである。チームもバラバラで、予選の早い段階で負けてしまったのだが、メンバーの多くがサバサバしていたように見えたのか、阿部先輩は試合後に緊急ミーティングを開き、「お前ら悔しくないのか!」、「悔しいです!」というドラマのスクールウォーズみたいな感じになり、気合いをいれるために阿部先輩に引叩かれたように記憶している。その時は「俺達、青春しているよな」と気分が高揚し、これを切っ掛けにチームは引き締まったように思う。阿部先輩のおかげである。現役最後の試合(新人戦)では、翌年の春の高校バレーで優勝した東亜学園に負けて終わった(都ベスト32)。圧倒的な力の差を見せつけられた試合(2-15、3-15)だったので、「レベルが違い過ぎる」という納得感もあったし、そんな中でも数本のアタックとブロックを決めることができたため、個人的には案外さっぱりした気分だった。そんな中で阿部先輩は自分のことのように悔しがってくれた。あの時には、照れくさくて、きっちりと感謝の気持ちを示すことができなかったのは、今でも心残りである。

また、自分をバレー部に勧誘してくださった高橋先輩（昭和60年卒）に感謝したい。運動会の青組中一係サブチーフをされていた繋がりから、熱心な勧誘を受けた。高橋先輩の勧誘で入部した青組の中1は私を含めて6名近くもいた。高校時代から人を惹きつける方だったと思う。高橋先輩との出会いがなければ、バレー部に見向きもしなかつたろうし、それを考えるととても運命的なものを感じる。先輩が卒業されてからも、合宿などでは我々の代に対して何かと目をかけて頂いた。

最後に、同級生についてふれて終わりにしようと思う。中学時代は8名近く在籍していたものの、高校に進学した際には、松川、藤沼、私の3名となってしまった。高校からは8名（筒井、岩男、片田、上田、山口、小林、三原、宮部）が新たに入部してくれたので、同級生でチームを組むことができた。そんなに強い代ではなかったが、最後の新人戦ではチームとしてもまとまりが出てきて、予選では強いチームのような圧倒的な勝ち方もできたし、いい試合ができたと記憶している。今から思えば、自分の幼さから、チームのまとまりに悪影響を与えるような言動をしていたので恥ずかしい思いもあるが、30年も経過すると良い思い出しかない。中高6年間の中で、個人的には一番思い入れも強かつたし、時間をかけたのもバレーであった。現在の体重は、当時から20kgほど増えてしまったので、俊敏に動くことも、飛ぶこともできないが、バレー部時代の思い出を大事にしていきたい。ここで採り上げられなかった先輩、後輩はたくさんいらっしゃるが、自分に影響を与えてくれた方々だ。改めて感謝申し上げたい。



平成4年卒

「昭和63年私学祭中学の部優勝の周辺」

北村賢哲

平成4年卒の我々は、中学3年（昭和63年）の夏、私学祭の中学の部で優勝した。

もっとも、これが正確にいつのことなのか私には記憶がない。同期のだれかが、翌日の新聞に載ったと言っていた。そこで、70年史への寄稿にあたり国会図書館に行ったが、新聞記事を見つけることはできなかった。

ただ、この私学祭優勝にちなんで、様々なエピソードがある。そのうち二つを紹介して、まったくのほら話ではないことを示す。

第1に、決勝戦を観戦した私の父は、その日の晩、開成中学バレー部の中1から中3までの部員全員に、ステーキをふるまって優勝を祝った。同期は、今でもそのことを話題にするが、そのたびに当時のいたたまれなさを思い出す。その詳細はこの文章の最後で触れる。

第2に、優勝チームにはベンチ入りした選手の名を記した芳名録が作成される荣誉が与えられた。が、その中に架空人物「遠藤胡一」がいる。中2で早々に退部した遠藤智徳の名を変形し、えんどコイチなるギャグ漫画家の名前を擬したのである。芳名録の原名簿作成を我々中学生に委ねた故中村博次先生の鷹揚さが偲ばれる。

以上、平成4年卒なら全員知っている語り草を記した。最後に、私にとって後ろ暗い話を付け加えて、この優勝を私が一番ありがたく思っていることを示す。

中3の4月に部活の練習中のけがで、私は半月入院し、さらに半月自宅療養を強いられた。特段だれが悪かったということはなかった。けれども、私の両親がこの事故の責任を顧問なり学校なりに追求するという余地はあった。賢明にも私の両親はそれをせず、結果、私は学校でひそかに優遇された。当時の担任の中澤直三郎先生は、美術の担任だったが、1学期、一つも美術の課題をこなさなかったのに10段階中の6の評価をつけた。美術だけではない。1学期の中間試験を一切受けなかったにもかかわらず、1学期の成績はおおむね6か7がついた。期末試験だけの点数で評価したとのことだったが、その採点にも少くない「配慮」があったのだろう。

私がバレーの練習に復帰したのは、期末試験を終えた後からだった。直後には千葉の岩井海岸で合宿である。3か月近く運動してない私はついていけず、練習中に何度も休憩した。もちろん練習中に勝手に休んでいるなど論外であったはずだが、私には休みたいときに休む特権が与えられていた。ケガ明けという事情に最大限の「配慮」が示されたのである。

そんな、練習すらまともにこなせない私が、翌8月の私学祭でスタメン出場を果たす。ここに「配慮」を疑う余地はいくらでもあった。じっさい、セッターの土岐大介君が上げ

るレフトオープンをどうにか相手コートに返す以外、ボールに触った覚えがない。観戦した父も「力がうまく抜けて、相手を惑わせるスパイクだった。」と微妙な言い回しで褒めた。きちんとしたスパイクは打ててなかったのだ。後衛に退く際には、レシーバーの後藤正と交代した。体育館は暑くて苦しくて、冷たいポカリをむさぼってベンチで休むこと以外、何も考えられなかった。体力の余裕はまるでなく、コートの中で機能したはずもない。

それでも優勝した。おかげで、お前のせいで負けたといわれることはなくなった。

父のステーキの大盤振る舞いは、息子をコートに長く居させてくれたことへの謝礼だ。意図があからさまであることに面食らったが、同期への負い目は間違いなくあり、ありがたくもあった。

優勝してなければ、バレーを続けていなかったかもしれず、そうなれば、私の人生は全く違っただろう。妻を得たきっかけすらバレーだ。お荷物を抱えながらのお快挙を成し遂げた同期の皆には、心の底から感謝である。

平成5年卒

「不撓不屈」の精神

今西 圭

「不撓不屈」・・・困難にあってもひるまず、くじけないこと（広辞苑）

開成高校を卒業以来、自己紹介文などで好きな言葉や座右の銘を問われると、私は迷うことなくこの言葉を選びます。

同年代のOBの皆様には、この4つの文字にピンと来るものがあるのではないのでしょうか？

「不撓不屈」この四文字熟語は、私が現役時代にバレーボール部で制作いただいた応援幕に書かれていた言葉です。

どなたが選ばれた言葉かは記憶に定かではありませんが、初めてこの応援幕を目にした時、この言葉の持つ精神と、本校らしい質実剛健な響きに感銘を受けた記憶が今でも鮮明に蘇ります。

試合会場に赴くと、体育館の応援席には各校色とりどりの応援幕が掲げられていましたが、「頑張れ！〇〇中学」「翔べ！〇〇高校」などのありふれた応援幕が多い中、本校の応援幕はなんとも独特で、その背後で声援を送ってくれる仲間たちの雄々しい声と相まって醸し出される硬派な雰囲気は、いつも誇らしく、気持ちを奮い立たせてくれるものでした。

私たちの学年は、残念ながら決して強いチームではありませんでしたが、私自身、練習に対しては、あまり休むことなく黙々と励んだ記憶があります。チーム状況は山あり谷あり、そんな中でも自分なりに練習に打ち込めたのは「不撓不屈」の精神が背中を押していた気がします。

短期的な結果や状況に一喜一憂せず、努力を継続することの大切さや尊さを知ったことはバレーボール部で過ごした時間が私に与えたくれた大きな財産であり、その後の大学受験・社会人生活においても私の最大の行動原理になっている気がします。

今では専らの趣味であるゴルフに「不撓不屈」の精神が最も生かされているかもしれません。（笑）私の歩んでいるゴルフの道は困難や挫折ばかりなので・・・。

入部した中学1年生から約30年が経ちました。始めたばかりの頃の腕のあざ、膝や腰が擦り切れたジャージ、中村先生と食べたラーメンの味、千葉の合宿所の潮の香り、ブロックが決まった時に手に残る快感、最終戦で敗れた時の涙、五感で味わった記憶の欠片はいまでも色鮮やかに自分の胸の中に残ります。

もちろんチームメイトのみんなの記憶も。いつも強気で、その明るさと前向きさでチームを鼓舞してくれたキャプテンの古野君、圧倒的なポテンシャルでいつも何かやってくれるんじゃないかと期待をさせてくれたエースの中野君、私の対角でいつもクールな態度ながらも心には熱いものをもっていたレフティーの小野君、運動神経抜群でいざという時に本

当に頼りになる勝負師の保坂君、時折見せる厳しさと練習に緊張感を与えてくれた池田君、温和で優しく、いつもチームの和を保ってくれていた金野君、頭脳明晰で小柄な体系を生かした好レシーバーの長谷川君、ひょうきんでいつもチームのムードメーカーだった木本君、ピンチサーバーやセンタープレーヤーとして要所を締めてくれた山口君。こう思い返していると、あの輪にいた自分に瞬間的に戻ります。

開成での学生生活では、ボートレースに始まり、運動会、文化祭、さまざまな思い出がありますが、やはりバレーボール部で過ごした6年間は私の開成生活そのものであり、人間形成や組織内でのポジショニングなど、現在に至るまで自分のキャラクターに大きく影響を与えてくれた存在であったと感じます。

「不撓不屈」という素晴らしい言葉と精神が、私たちの子供たちやバレーボール部の後輩たちに受け継がれていきますように。

開成バレー部 70 周年、おめでとうございます。

後列左より : 保坂君、中野君、池田君、山口君、金野君
中列左より : 木本君、今西、小野君
前列左より : 長谷川君、栗原先生、中村先生、古野君



平成6年卒

開成バレー部70周年に寄せて

今井 耕介

開成高校を卒業してから、早いものでもう23年が経ちました。僕たちの代は中学時代からのメンバーが多く抜け、内田君、今西君、鈴木君、田端君、と僕の5人だけになってしまいましたが、幸い高校から入って来た多くのメンバーに支えられて、チームが成り立ちました。中でも、大熊君、大田君、徳永君は身長も高く、チームの中心メンバーでした。他にも、伊藤君、岩崎君、澤田君、松浦君、南方君といった仲間たちに恵まれて、楽しいバレー生活だったのを覚えています。僕たちはあまり強くはありませんでしたが、一生懸命練習をして試合に備えたことを今でも昨日のここのように思い出します。

高校3年生になり、自分たちの関東大会予選が終わった後も、鈴木君と僕は受験間近まで練習に出て後輩の指導をしました。卒業直後は2年間コーチをやらせていただきましたが、当時は、昭和38年卒の山本先輩が練習や試合に駆けつけてくださり、誰にも真似できないようなほどの、気合いとお金をバレー部につき込んでいただきました。お陰で、バレー部の黄金時代を築くことができただけでなく、先輩、後輩達とのたくさんの楽しい思い出ができました。

僕は2000年ごろから、ずっとアメリカ在住ですが、卒業から20年以上経った今でも、チームの何人かとは連絡を取っていて、帰国の際などは食事を一緒にすることもあります。お互い、家庭に仕事に忙しい時ですが、時々集まれるのは素晴らしいことだと思います。僕たちの代は、いい後輩と先輩にも恵まれました。特に、2年上の土岐先輩や後藤先輩達の代、そして3つ下の今顧問をしている宮君達の代、また僕たちが高校3年生の時の中学一年生である石岡君、山口君達の代とは、頻繁ではありませんが、たまに集まることもあります。今後もこのような同期、先輩後輩のつながりを大切にしていきたいと思います。

平成7年卒

記憶の断片

依田 秀則

卒業して20年超が経過し、開成バレー部での記憶は大分薄れてしまいました。その中で、断片的な記憶を寄せ集め、当時バレー部に所属された方々に共通しているであろう経験を以下に列挙させていただきます。(どういうわけか、合宿に関する記憶ばかりで・・・)

○声出し

当時の合宿は、夏も春も千葉県・岩井にある前芝荘に宿泊していました。合宿中、練習後の夕方に海に行き、中学1年生が、沖に向かって自己紹介をするというイベントがありました。遠くに並んでいる先輩方(主に中2)に向かって叫び、声の大きさが十分であればOK、小さければもう一回となります。運動会やボートレースで鍛えられた後の合宿ですので、特に違和感はありませんでしたが、不思議な行事でした。

○カルピス

同じく、合宿中、ネットポール横の卓球台の上には、金色のやかんに入ったOB用のカルピスが準備されていました。準備するのは1年生。現役時代は早くOBになって飲みたいと思っていました。合宿場所が変わり、カルピスの文化も無くなってしまったと記憶しています。スポーツドリンクではなくカルピスだったのは何故でしょう。

○真夏の砂浜での基礎トレ

またまた合宿の話題で恐縮ですが、中学生は練習の合間に、ダッシュ、腕立て、腹筋などの基礎トレを、真夏の砂浜で行っていました。熱中症対策が不可欠となっている昨今では考えられないことですが、当時はそれ以上に、家族連れで賑わう浜辺に、ダッシュのスペースを無理矢理確保し、周囲の視線を気にせずに、ひたすら走り続けることが、辛いというよりも、恥ずかしかったです。

○百亀楼

開成の前の通りを西日暮里と反対に進んでいった突き当たりの交差点の角にラーメン屋・百亀楼がありました。試合などのイベント後、また、たまに通常の練習後に、当時顧問をされていた中村先生から、「百亀でラーメン食べて帰りなさい。」とおっしゃって頂き、みんなで食べにいきました。つい先日、百亀楼のあった場所を通り過ぎたのですが、別の店に変わってしまったようで、残念でした。

以上、つたない記憶で恐縮です。次の機会(80周年?)に向け、同期会で記憶の糸を繕りあつめたいと思います。

平成8年卒

鈴木 周

平成8年卒という私の学年は人数も少なく、上下の先輩後輩方やOBの皆さんに多くを支えられた学年です。

私がバレー部に入部したのは中学2年生になった時でした。中学1年の時、急激に身長が伸びて成長痛で走るのもやっとだった私に故中村先生が声をかけてくれたのが始まりです。ある日の体育授業の後、教員室に呼ばれてその辺に落ちていたボロ雑巾で何度も汗を拭かれながら勧誘されたのをよく覚えています（笑）。

しかし、入部してみると同期のメンバーがいないという状況にビックリしました。正確には、運動神経があるのに練習に来ない谷口氏、自称バレーセンスは抜群という富樫氏などをはじめとして何人か所属していました。でもほとんど練習に来なかったなあ。合宿などには来ていたので覚えていらっしゃる方々もおられるかと思います…。そのため、練習でも人が足りず、試合でも人が足りず、1つ下の平成9年卒のメンバーには本当に迷惑をかけてしまいましたね。しかし、勝手な意見ですが、私自身は年代関係なく練習や試合をできたのはすごく楽しかったですし、卒業後もOBとして開成バレー部に深く関わることができたのは、同期が少数だったが故に縦のつながりを強くできたからだろうと思っています。

高校卒業後も開成バレー部が大好きでOBとして練習に参加させてもらっていましたが、これまたOB氷河期で大変でした。今でこそ練習にOBの方がいらっしゃるの普通になっているかと思いますが、この頃はOBがいない方が当たり前でした。大学に入ると高校時代の部活への思い入れが遠のくのは当然の摂理ですが、縦のつながりが心地よかった私にとっては開成バレー部の縦のつながりへの思いを後輩に引き継いでいくことに使命感を抱いていたような気がします。もちろん1人でできることではなく、当時の佐藤会長や山本大先輩、関先輩、今井先輩、平成9年卒の宮君（宮先生といった方が良いのかな）など、同様の思いを抱いていらっしゃる方々がいらっしゃったからこそOBとして長いこと開成バレー部に参加できたのだと思います。今は情けないことにほぼ参加できていませんが、今もその文化が続いていることを切に願いますし、今後もOBと現役の絆を保てるよう協力させていただきます。

今年、我々平成8年卒の世代も40歳を迎えています。40年でも長く感じますが、70年って本当にすごい年月ですね。1年1年の様々なメンバー、様々な歴史を残すこの70年史の作成にご尽力いただいている方々には本当に感謝いたします。また、お世話になった故中村先生、顧問の先生方、山本先輩や佐藤先輩などの超先輩方をはじめとしたOBの皆様、チームとして現役時代から迷惑をかけた平成9年卒の面々、そして高校からメンバーに加わって苦楽を共にした同期の川治氏、伊藤隆司氏、伊藤俊平氏、矢代氏には、この場を借りて心より感謝いたします。

平成9年卒

「迷9会」と宮の歩み

市原 将樹

平成9年卒は市原、宮、金田、飯田、牧野、田沢、石川、岡田、中川、クリス、日吉、遠藤、中道、藤（背番号順）の総勢14人。中村・栗原両先生を受け継ぐ顧問の宮を輩出したことで知られるが、それだけでは個性と才能にあふれる我が代の姿はとて伝えきれない。プロ野球の名球会ならぬ「迷9会」と称する平成9年卒の歩みを、同期だからこそ知る宮の一面もあわせ、披露したい。

中1で30人が入部。当初から役者揃いで、合宿で皆が疲れて寝静まった頃を活躍の場とする男I（翌日、顔の油性ペンは何度洗っても取れなかった）、部活帰りに変装してビデオ屋に出没する大人びた輩E。宮も徐々に彼らに染まりけがれていくわけだが、当時は群馬から出てきたばかり、坊主頭が似合う純朴な好青年だった。肝心のバレーの方も、人数が多かっただけに戦力も揃い、学年が進むにつれ都大会で勝利するなど結果が出てくる。宮は身長180センチを超え、中2でライト、中3ではセンターでレギュラーに定着していた。中学のハイライトは中3私学大会。記念大会だったのか、決勝の会場は、東京五輪の開催地、あの東京体育館だった。準決勝で安田学園を撃破。全国に名を轟かす高校男女が横で熱戦を繰り広げるなか、注目を浴びて決勝を戦うのは、少し恥ずかしいような、それでいて誇らしい気持ちだった。（明大中野に惨敗し準優勝に終わったが・・・）

高校進学時に残念ながら辞める仲間も出たが、さらに個性的な新高が加わり、14人が揃う。3つ上の先輩の指導のもと、よく練習した。不思議がられるが、中村先生とも良好な関係だった。（劣勢のタイムアウト時に激昂する先生に「怒っても雰囲気悪くするだけだ！」と果敢に反論する者も約1名いたが）。先生も期待してくれ、息を飲むほどの華麗なトスさばきの現役日体大生を臨時コーチに招いてくれたこともあった。そうしたお陰もあってか、堀越を破っての第3支部ベスト4、私学関東大会での善戦など、ちょっとした開成旋風を巻き起こす。宮は190センチに迫り、チームの大黒柱に成長。東亜学園を相手に、真後ろから上がってきた2段トスをレシーバーをふっ飛ばして次々に決める姿は近くで見ていると恐ろしいほどだった。そして当時、高2での引退が通例だったなか、先生や先輩から久々に関東大会を狙ってみようと助言を受ける。すでに酒に酔って他人に絡むのが得意だった宮は、500円玉を手「お前も残れよ～」と皆に呼び掛けた。必死の買収工作は実らず高2で多くは引退したが、4人が残った。そして臨んだ高3関東予選。後に都8強に進む東京実業とのベスト16をかけた試合はまさに死闘となった。1セットずつ取り第3セット13-14。宮が放ったスパイクはブロックに阻まれ、ボールはカバーに入ったメンバーの間にぼとりと落ち、挑戦の幕は閉じた。

振り返れば、当時は、練習試合など滅多になく、練習は自己流。経験や戦略が明らかに足りなかった。ただ高校でぐっと頭角を現しチームの中心に躍り出るメンバーがいたり、他

方、応援にとことんこだわったり、後輩の指導に愛を注いだりと、それぞれが真剣だった。2人のセッターの起用を巡って夜まで議論し、投票で決めるなんていう青春漫画のような1シーンもいい思い出だ。引退後に仲間が「部活を辞めたいと思ったことは一度もない」とか「バレー部で過ごした時間は輝いていた」と語ったのは、紆余曲折あれど、それなりにまとまりのあるチームだったことの証だろうし、その後も関東大会への挑戦が続いているのを見ると、技術はともかく心意気くらいは後輩に引き継ぐことができたのではないかと思う。

あれから20年。弁護士や銀行員、医者と王道を歩む者。端正な顔立ちと巧みな話術で女性向け保険事業に精を出すNや海外で研究に励むも不法滞在で強制送還されたK。皆、変わらず存在感を発揮し続けている。極めつけが宮で、今なおバレーに青春を注ぎ、決められなかったあの1点、届かなかったあと一步を、現役とともに追いつけているのは羨ましく、その情熱には頭が下がる。

最後になるが、我々の代は、引退後、運動会で各組が作るようなパンフレットをバレー部でも作ってしまった。貫録たっぷりの審判姿の中村先生の写真を表紙に、メンバーのエピソード満載の60ページの大作である。中村先生からもメッセージを頂き、掲載させてもらった。そこには「中学高校時代を純粋な気持ちで過ごした仲間は一生かけがえのない友であり、よき相談相手であって、この絆をいつまでも大切にしてほしい」という一節がある。我々が授かった遺言のようにも思える先生のこの教えを、この機会に先輩や後輩、現役の方々に是非知ってもらえればと思い紹介させていただいた。もちろん、平成9年卒「迷9会」は、この教えをこれからも大事に守っていくつもりである。



平成9年卒作成のオリジナルパンフレット。中村先生からのメッセージが掲載されている。

“ご苦労様諸君へ”

入学して以来、中学三年間、高校三年間長くて短くも思える年月があつと云う間に過ぎてしまいました。

中学、高校と学園生活で体験し、学習した成果を基に優れた潜在能力を十分に発揮して大学の生活を充実したものにしてほしい。これからもどんな苦しさにもひるまず、逞しく個性豊かな明るく強く、優しい人間に育って行って欲しいです。中学、高校時代純粋な気持ちで過ごした仲間（親友）は、一生かけがいのない友であり、良き相談相手であつて、この絆をいつまでも大切に保って欲しいものです。諸君の今までの勉強はその基礎であつて単なる受験対策でなかった筈である。バレーボールを通じて、楽しかったこと、辛かったこと、また続けてきて良かったこと。中学の基本が実り中2の新人戦、中3での連続優勝、都大会への出場、私学大会準優勝、高校での数多くの勝利、東京代表関東大会出場善戦、高3での春合宿、関東大会出場ベスト16、本当にご苦労様。後輩への世話、今までの経験と実戦を背負って、しっかりと自分の目的、目標に向かって、一生懸命頑張つて欲しい。結びに将来の後輩の大先輩として、その指導に少しでも手助けをしてくれたら幸いです。いつまでも元気で、卒業してもOB会へは必ず全員そろっていつも顔を見せてくれることを楽しみにしています。

顧問 中村 博次

※以上は、平成9年卒メンバーの高校卒業時に中村先生からいただいたお言葉です。実際の戦績よりも大げさに書かれているところも含めて中村先生らしく、愛に溢れた文章です。私たちはご寄稿をお願いしたのでこのようなお言葉をいただきましたが、あらゆる学年に対して同様のお気持ちだったのではないのでしょうか。

平成10年卒

バレーボールの醍醐味

川原 希彦

開成バレー部70年史を作成する、という連絡を受け、自分達の代が中学・高校でバレーボールに夢中になっていた時のことを振り返ってみた。

僕達の代は平成4年に中学に入学した。この年は、大雪で交通機関が大幅に乱れたため、2月1日の中学入試は中止、2月2日の早朝に震度5強の地震が発生する中で試験・面接を一気に行うという異例づくめでスタートした。こういった入学当初の経緯もあってか、同じ代のチームメートの顔ぶれを見ても、個性的なメンバーが揃ったのではないかと思う。中学1年生の仮入部から高校2年生での現役引退まで色々な出来事があったが、中学・高校生活全体の思い出と比べても、部活の思い出が占める割合はかなり大きい。

中学生の時に道灌山中学に中々勝つことが出来ずに悔しい思いをしたことや、高校生の時に支部予選を勝ち抜きたくて練習に励んだこと。故中村先生に怒られた思い出や、体育館の温度・匂い。千葉の合宿所の大部屋で練習後皆で語り合ったことや、砂浜でのダッシュ・マラソン、文字通り練習で汗を絞り出した後で飲んだポカリスエットの味。例を挙げればきりが無い。

当時はもちろん苦しい思いをしたことも多かったが、20年以上経った今では、時間というフィルターを通したことで何もかもが「いい思い出」へと昇華され、セピア色の写真となって記憶のアルバムに収められている。

高校卒業と共に別のスポーツを選択したメンバー、大学でもバレーボールを続けたメンバー、そして大学卒業後もバレーボールを続けたメンバーと、その後のバレーボールとの関わり方は様々だが、10代の多感な時期を「バレーボール」という共通のスポーツを通じて共有した当時のチームメートとは、今までもそしてこれからもずっと同じ「何か」を共有していけるのではないかと思う。

かく言う僕は、大学でもそして社会人になってからも何だかんだ言いながらバレーボールを追う生活を続けている。最近では2016年3月に会社の転勤でロンドンに引っ越してきたのだが、たまたま同じオフィスにいた方が所属していたチームで5年ぶりにバレーボールをプレーすることになり、そこから週に1回程度のペースでプレーしている。過去に駐在していたロスアンゼルス・ニューヨークでも、気が付くと地元のチームに所属し、プレーを楽しんでいた。

当たり前だが海外でもバレーボールのルールは変わらず、そしてバレーボールの後に飲むビールの美味しさも変わらない。もちろん現役当時から比べると動きも遅くなったしジャンプも低くなっているし周囲のレベルもまちまちだが、それでもプレー自体に加えて練習や試合の後に年齢や国籍を超えてそれぞれのプレーを論じ合う部分も含めて、歳を重ねる度に「バレーボールの醍醐味」をより感じられるようになってきているような気がしてい

る。

今後どれだけの間真剣にバレーボールを続けていけるかは分からないが、今でも人生の一角を占めているバレーボールというものに出会い、そして楽しさを分からせてもらった開成バレー部には感謝してもしきれない。

平成11年卒

開成高校バレーボール部 創部70年に寄せて

楓 淳一郎



初夏の運動会が終わり、当時高3だった今井耕介先輩や鈴木大輔先輩らが「でかい奴」「運動神経がいい(はずの)奴」を根こそぎ体育館に連れて来て生まれたのが、我々平成11年卒である。平成5年(1993年)に入学した我々は、中1の夏合宿では大部屋で夜通し枕投げ、さらにお菓子の買い出しがばれて逃走するなど、新入生とは思えぬ生意気さでデビューを果たした。卓球台の辺り(ピロティ?)でひたすらパスしたこと、今井さんに「跳べないブタはただのブタだ」としごかれたことが記憶に残っている(当時、ジブリ映画『紅の豚』が上映中だった)。また、同級の大多賀が中1にして大病を患い長期離脱せねばならなくなったこと、先輩の発案でビデオレターを贈ったことは、子どもながらにバレーボールができる有り難さを痛感し、代の結束を高める大きな出来事であっただろう。

我々の代は誰彼かまわず「あだ名」を付けるのが得意で(はなはだ失礼な話ではあるが)、男子中学生が喜びそうな卑猥な単語を暗に散りばめ、様々な融合を繰り返して進化させていった。幾多の変遷を経て、同級の藤野が「のサブ」、木村が「きょイン」と呼ばれるに至

ったことなどがその典型であろう（お世話になった先輩方にもしかるべき立派なあだ名があったが、今は忘却の彼方ということにして先輩方の名誉を保つこととする）。中2くらいまでは、おおむねこのように過ぎていったように思う。

しかし先生や先輩方のご指導にも恵まれ、中3になる頃には荒川区で優勝、都大会でも二つ勝ってベスト16に入るほど力を付けることができた。特にエースの山口は、東亜学園から高校進学誘いがかかったほどの逸材であるし、部長の石岡とともに高校時代は支部選抜選手にも選ばれ、他校からも注目を集める中心選手であったろう。この頃には奥山先生を新たに迎え、中村先生、栗原先生とともに3人体制になっていたと記憶している。

我々が高1に進級する直前の春合宿（だったと思うが）、千葉県鋸南町の宿舎に衝撃が走った。我々は洗濯物を干すために宿舎の屋上に登っていたが、玄関前に停まった車から、ハマコー（もとい、山本純一先輩）が降り立ったのを発見したからだ。糖尿病の治療として適度な運動が必要だから、というのが合宿への電撃参加の理由だったが、我々をはじめ当時の現役部員が戦慄（観念？）したことは言うまでもない。山本さんは合宿以降も開成での練習にお越しになり、3レシの球出しや練習風景の写真撮影など、積極的に関わって下さった。特に「ネット越しに相手を威嚇すること」の大切さを迫力満点のお手本つきで教えて頂いたことや、人生の楽しみ方[㊦]を身をもって教えて下さったことは貴重な体験で、人生の師と呼ぶに過言はなかろうと思う。

中学時代にはちびっ子で、まだあどけなさの残っていたライト飯塚やセッター河津などは、高校生ともなると身長も伸びて希代の美男子に成長し、バレーもメキメキと上達していった。バレー部仲間で立ち上げた「劇団月あかり」の文化祭公演では、なくてはならぬ名俳優（女優？）としても名を馳せた。この頃はセンター石岡の対角を誰にするか、というのも議論的だったが、急に背が伸びて練習も急に頑張り始めた若林、見事に大病を克服して復帰した大多賀、新規加入のナルシスト鶴澤など、様々な可能性を模索していた時期だったようにも思う。公式戦では、木村のピンチサーバーからの好レシーブ、藤野のいやらしくも粘っこいレシーブにもとても助けられた。高2秋の支部大会では駿台学園をフルセットで破ってベスト4、その後の新人戦でも都ベスト16に入るなど実力もつき、高3春の関東大会出場が現実味を帯びてきている感覚があった。中学時代はろくでもないことばかりやっていた我々も、ようやくバレーボーラーらしくなってきたのはこの頃だったろう。

高3の最後の運動会準備のまっただ中だった5月3日、安田学園会場にて関東予選2日目が行われた。我々の代は3人が引退時期を延ばして、190cmの高1丸崎らと新たなチームを組んで臨んでいた。都立山崎の3枚ブロックに苦戦しつつもフルセットの10対2でリード、後は押し切るだけと勝利を確信しつつあったその時、ブロックに跳んだセンター石岡が突然うずくまった。こむら返り……疲労によってふくらはぎが痙攣を起こしたのである。流れは一気に相手へ傾き、大量リードを守りきれず11対15で敗戦。終わった瞬間は泣き崩れた記憶しかなく、それ以降はあまり覚えていない。負け審が終わった後、エース山口は座り込んで無言、応援に来ていた他のメンバーも話しかける術を持たなかったと言う。敗戦の瞬間をベンチから見守っていた石岡は、責任を感じたのか、会場から姿を

消した。不審に思った筆者（楓）が外へ探しに出てみると、学校前にあったお寺のベンチに仰向けで横たわっている石岡の姿を見つけたが、かける言葉は一向に見つからず、隣のベンチに小一時間、一緒に横になっていたのだと思う。嫌味なくらいカラッとよく晴れた初夏の陽気だった、その日差しの強さだけは脳裏に強く焼き付いている。社会人になってから気付いたことだが、安田学園前の公園はお寺の境内だったと思い込んでいたが、実際には「東京都慰霊堂」の敷地だったようだ。皮肉にも、当時純粋な高校バレーボーラーだった僕たちの魂は、天に召されたということだろうか。

開成高校バレーボール部の創部70周年にあたり自分の中高時代を思い出すにつけ、何と多くのことを開成から、そしてバレーボール部から学んだことかと思ひ知らされる。今は皆それぞれの世界で活躍しているが、その血となり肉となったもの、人間としての原体験はまさに開成時代に、バレーボールというスポーツを通じて培ったものだと言えるだろう。故中村博次先生は1964年東京オリンピックでのラインズマンを務めたという思い出話を（耳にタコができるほど）我々に伝えてくれた。現在、私は高校教員としてバレーボール部顧問を務めるかたわら高体連の審判員として活動しているが、しばしば「開成出身？あの中村先生の…？」と話に花が咲く。中村先生がいかに審判界に大きな功績を残したか、そして国際審判員の資格取得までがいかに大変な道のりなのかが、奇しくも同じ業界に入ってしまった今の私にはよく分かる。今の私は一介のB級審判員に過ぎないが、春高バレーやオリンピック最終予選などでラインズマンを務める時に大きなやりがいを感じるのも、審判活動が中村先生への一つのご供養の形だと考えているからだ。時代は巡り、2020年に再び東京でのオリンピックを控える今、開成高校バレーボール部が70周年を迎えること、そして私たちがその卒業生であることを心から誇りに思い、筆を置くこととする。



平成12年卒

開成バレー部と中村先生の思い出

松尾 佑樹

このたび、開成バレー部が70周年を迎えるということで、現役当時部長を務めていたこともあってか、原稿の執筆依頼をいただきました。当時のことをいろいろと振り返りましたが、中学時代は荒川七中になかなか勝つことができずに区大会で万年2位、高校時代は都大会でベスト32がやっと、ということで、プレー面ではなかなか結果を残すことができなかった現役時代でした。ただ、神がかり的なフェイントの上手さを誇るキャプテン川原君、筋肉は技術を凌駕するとばかりに筋トレとプロテイン命の澤村君、驚異的な手足の長さでネット際では強さを見せる篠田君といったレギュラー陣をはじめ、非常に個性的なメンバーに恵まれ、プレーをしている当人たちは非常に楽しく過ごしたバレー部時代だったと思います。

さて、バレー部時代を振り返る上で忘れてならないのは、「エロジ」こと中村博次先生でしょう。先日も、勤め先の開成OBで集まる会がありましたが、一回りほど上の先輩と中高時代に所属していた部活動の話題となった際、バレー部と伝えるや否や「エロジか？」との反応があり、ここまで部活と顧問の先生が繋がる部もなかなかないのでは、と思いました。「ポカリス飲んでいけ」（ポカリスエットをそこで区切る人もなかなかいないな…）、書置きには「ピロテーィに集合」（何と読むんだ？）、体育の前の休み時間には校内放送で「バレー部の松尾君、至急グラウンドまで来なさい」（準備のお手伝いしますので、校内放送はやめてください…）等々、真っ先に思い出すのは個性的な言動の数々ですが、生徒の自主性を尊重してくださったり、生徒が困難に直面した際には身を張って助けてくださったりするなど、非常に生徒思いの先生だったなとしみじみと思い出しました。バレー部の顧問だけではなく、我々の代は高1の時に中村先生に体育を教わる機会がありましたが、残念ながらご病気のため年度の途中で他の先生に交替してしまいました。その後復帰されたものの、我々の卒業から1年ほど経過した2001年5月にお亡くなりになりました。卒業後、お亡くなりになる前に、開成学園の正門の向かいにあった養老乃瀧で一緒にすることができ、生ビールに氷を入れる姿を見ながら不思議に思ったのは、今でも良い思い出です（当時の年齢は…時効ですね）。

今回原稿執筆に際して、現役時代の写真をいろいろと漁ってみました。バレーをしている姿よりも、山本先輩に食事に連れて行っていただいた写真ばかり残っていたのも、我々の学年らしいなと思いました。比較的多くのメンバーが写っていた写真ということで、2枚掲載したいと思います。

とりとめもない文章となってしまいましたが、開成で過ごした6年間の経験、その中でもバレー部での経験はその後の人生にも非常に大きな影響があったと思います。開成バレー部が今後も益々発展し、100年・200年と続くことを祈念して、文章を締めたいと思い

ます。



平成13年卒

星野 真平

開成バレー部の歴史に関わられたすべての皆様 70周年おめでとうございます。

今回、高校時代の戦績を思い出すにあたり、同期の中川学君（実は偶然同じマンションに住んでおり、子供2人がともに同級生という奇縁です）に相談を持ちかけたところ、「お前の卒業文集に全部書いてあるぞ」と言われました。十数年ぶりに文集を開くと、確かに自分たちの代になってからの公式戦全試合の内容がびっしり書かれています。やはり高校時代、自分が何よりも情熱を傾けたのはバレーだったのだ、と図らずも再確認する機会となりました。持つべきものは正しい記録、そして仲間です。

私たちの代は高3の5月まで4人が現役を続け、下の代との混成チームで臨んだ関東大会予選では最後の最後、得失点差で敗退し、悲願達成を目の前にしながら涙の引退となりました。そして、その時は考えもしなかったことですが、結果的には中村博次先生に全員の引退を見届けていただいた最後の代にもなってしまうました。

中村先生は当時、すでに教諭を定年退職され講師になられていたと記憶していますが、部長だった私はしばしば校内放送で体育教員室に呼び出されました。「ピンポンパンポンピン」と呼び出し音が2回鳴った時は、間違いなく中村先生でした。要件は事務的な確認もあれば、「最近どうだ？」と様子を訊かれることもあれば、単なる世間話で終わることもありました。肋骨を骨折していた時には、「これでカルシウムを摂れ！」と煮干の大袋をいただいたこともありました。呼び出されて行ってみたら、なぜかすでに帰られた後で呆然としたこともありました。15年以上たった今でも不思議なほど思い出せます。

昔はそうではなかったと聞きますが、私が現役の頃は、試合に向けた日々の練習——つまり技術、戦術、戦略はOBの先輩方が指導してくださり、中村先生はあまり顔を見せませんでした。現役選手の名前を間違えることもしばしばでした。しかし、それでもなお、開成バレー部は歴代のメンバーの皆様が継承してきたものであると同時に、中村先生が亡くなるまで確かに「中村先生のバレー部」だったのだと思います。（ご本人の前以外では）誰もがあのニックネームで呼び、姿を現せば場の雰囲気が変わる。卒業後も集まれば必ず先生の話が出る。そんな存在だったのではないのでしょうか。

私にとって目標だった関東大会予選突破が叶わなかったことは残念でしたが、うれしいことに一緒に戦ったひとつ下の代が翌年、その悲願を達成してくれました。中村先生は関東大会本戦の直前に急逝され、遺影として参加されたのですが、無念の思いと同時に「連れて行ってくれた」という思いもきっと持っていただけではないかと信じています。

そして現在の開成バレー部は、私たちの代も現役・コーチ時代を存じ上げている宮利政先生の下、精力的に活動されているとうかがっております。過去に積み上げてきたものはもちろん大事ですが、今のバレー部にしかないカラー、魅力というものもきっとあると思います。宮先生と選手たちがまた新たな歴史と記憶を積み重ねていかれますことを、心より楽しみにしております。

平成14年卒

関東大会出場を振り返って

平成14年卒 一同
(執筆者：大内隆成)

我々平成14年卒は開成バレーボール部としては久しぶりに関東大会に出場した学年です。出場が決まった瞬間の熱い想いは今でも良い思い出ですが、当時を振り返って一番に頭に浮かぶのは、予選などの思い出ではなく、そこに導いてくれた「人」であり「繋がり」でした。我々は、開成バレー部の「繋がり」の恩恵を存分に受けた学年であったと思います。

この「繋がり」という言葉を教えてくださったのは山本純一先輩でした。その山本先輩が繋げてくださり、我々は中学時代は主に宮先輩（先生）、高校では田沢先輩からご指導を受けました。お二人は我々にとっては中一のときの高三にあたり、入部の契機もお二人でした。今井先輩、依田先輩、鈴木先輩からは中学時代合宿などで厳しくご指導いただきました。これらの先輩方の繋がり、楓先輩、石岡先輩、山口先輩、大多賀先輩、松尾先輩にも大変お世話になりました。練習相手がいつも開成バレー部選抜メンバーであったことが大いに助けになりました。下村先輩が我々の学年を精神的に支えてくださったことも印象深いです。本当に沢山の先輩方が指導して下さりお名前をすべて挙げるのは不可能です。後輩にも助けられました。石毛、吉田、丹野、野口、梁、川原、山本、野間さらに森がいなければ練習が成立しませんでした。

関東大会本選には、東京からはベスト8のチームと、ベスト16の8チーム中上位4チームが参加できました。つまりまずベスト16以上に残る必要がありました。そして実はこのベスト16というのは一つ上の学年から繋がる戦いでした。新人戦のシード権は前年の夏の大会の結果を反映しますし、他校は夏の大会が高3の集大成となるので、経験の無い高2だけの開成高校は夏の大会で惨敗するというのが常でした。一度ベスト16以下になると、半分の確率でいわゆる強豪校のベスト8校と対戦することになり、なかなかベスト16に返り咲くことができません。一つ上の学年の丸崎先輩、星野先輩が夏の大会まで試合に参加して下さり、我々はベスト16のシードを確保したまま新人戦に臨むことができました。そして、その後我々はベスト8校には惜敗・惨敗をしたものの関東大会予選までベスト16を守り抜くことができました。

高3のちょうど5月の初旬に関東大会予選と運動会が重なり、バレー部にとっては毎年直面する大きな課題でした。我々もその課題に直面して浮ついていました。関東大会予選直前の春合宿で、山本先輩が「男には人生で一番二番を付けられないことが十も二十も同時にやってくるのが沢山ある。運動会と関東大会の二つ程度どうにかできなくてどうする。」と激励して下さったことが非常に印象的です。この言葉には仕事で忙しいとき今もお世話になっています。関東大会予選は当時の開成バレー部にとっては5年間の練習の集

大成の大会、負ければそこで引退というプレッシャーの中、ミスを連発しこのまま終わってしまうのではないかと焦りました。このとき、田沢先輩に「丁寧に一つずつ」と言われ、暗闇のなかでそのたった一つの細い糸を手繰りながら歩くような感覚でプレーしたのを覚えています。仕事の大切な場面で緊張すると、いつもこの関東大会予選の第一戦を思い出してしまいます。その後は落ち着きを取り戻して勝ち上がりましたが、ベスト8で敗れ、ベスト16の上位4位を決めるリーグ戦に参加しました。

このリーグ戦は8チームを4チームごとに別けて2つのリーグ戦を組み、それぞれのリーグの上位2校が関東大会に出場できるというものでした。開成、武蔵、羽村、関東第一の4チームのリーグでした。普通は2勝以上すれば出場が決まります。関東第一は言わずと知れた強豪ですから、我々は羽村と武蔵に勝って関東大会出場を決めようと思っていました。しかし、初戦で羽村高校にあっさりと負けてしまい絶望に打ちひしがれました。そのとき、先輩方の経験で得失点差に光明を見出してくださり息を吹き返しました。羽村は我々が関東第一に勝つことは想定していなかったと思いますし、地力では武蔵に勝てると踏んで、強豪の関東第一にはあっさりと負けていたように記憶しています。一方光明を見出した我々は、関東第一との一戦に全てをかけて勝利。そして最終の武蔵戦、羽村に負けた武蔵に対しては、勝つことは最低条件で、最小失点になるように試合をした結果、数点の得失点差で関東大会出場を決めました。勝負事は本当に最後の瞬間まで諦めてはならないことをここでもまた先輩方に教えていただいた気がします。

我々が関東大会出場を決めて、その報告をした直後に中村博次先生がお亡くなりになりました。中村先生の思い出は諸先輩方にお任せいたしますが、中村先生には休み時間によく体育科教員室に呼び出され、ありがたい言葉と、理不尽な言葉と、脈絡の無い言葉の三つを同時によく頂きました。例えば、「今日できることは今日すべてやる。明日は無いかもしれないんだから。そういう心がけが、ギリギリの勝敗をわける。おい、もう授業だぞ、何でお前こんなところにいるんだ。おい待て、オロナミン飲むか？」高2の5月に関東大会の予選で敗れた日の中村先生の早実での後ろ姿は今でも忘れられません。その後姿に、キャプテンの井口が次年の関東大会出場を誓いましたが、その直後に中村先生は体調を崩されました。

中村先生の体調が悪いこともあり、我々は栗原弘先生に本格的にご指導頂いた最初の学年となりました。実は我々は中学一年生から栗原学年（栗原先生が学年主任で六年間受け持っていた）でした。栗原先生には一つの事を追求することの大切さと偉大さを教えていただきました。その影響で私個人は現在研究者の道を歩んでいます。高3まで7人が部活動を続けたことが関東大会出場の一因であったと思いますが、これは中村先生への誓いが半分、そして栗原先生にやりぬく大切さを教えていただいたことがもう半分であったと思います。われわれが関東大会であっさりと負けた際に栗原先生が坊主頭になられて、長年ささやかれていた「カツラ疑惑」を払拭されたことも印象深い思い出です。我々は直前の運動会ですでに坊主になっていて、区切りをつける手段もなかったなか、栗原先生が代りに区切りをつけてくださったのだと思います。さまざまな意味で我々は栗原学年であったのだと思います。

飛びぬけたプレーヤーは一人もいなく、キャプテンの井口と部長の勝井以外は、中学時代ベンチに入ることすらできなかったメンバーが最終的に関東大会出場に至ったのは、これらの「人」と「繋がり」のお陰でした。次に繋げる責任を感じ、人見と私は大学進学後も後輩の指導にあたりました。同学年の井口、勝井、植田、六角、そしてごくたまにゴップルの助けを借りて指導にあたりました。指導した後輩達（浅川、荒田、岡本、梶原、小林、末續、米内）とは、上記関東大会予選のベスト16のトーナメントまで勝ちあがりました。残念ながら関東大会に導くことはできませんでしたが、そこに至るまでに胸の熱くなる沢山の逆転劇を繰り広げてくれました。彼らが大学に進学してからも深い人間関係を築くことができました。その彼らがまたその後輩を教える立場になって次に繋げてくれたことも感慨深いです。また、指導している間には関先輩や佐藤先輩にいくつかお言葉を頂いたのですが、それらに関しての詳しい話は80年史あたりでご紹介できたらと思います。

執筆にあたりゆっくりと記憶を辿ってみて驚いたことは、開成バレー部での経験（在学中そして卒業後）が今の自身のあり方にいかに大きな影響を与えているかということでした。おそらく原稿を執筆された多くのOBの方々が似たような感覚に襲われたのではないかと思います。私にとっては特に「人」であり「繋がり」でありました。練習はきつく、言い合いも沢山しました。私個人としては万年補欠で中高通じて最後の一年以外は試合に出ることができず悔しい思いもしました。楽しいことよりも苦しいことの方が多かったと思います。指導しているときもそうでした。それでも想いを共有した日々は特別で、苦しいときふと振り返ると心の中に同期や先輩方や後輩達がいることを感じます。部活を続けることが大切とよく言いますが、このように人生の根幹を成し得るとは当時は思いもよりませんでした。

末筆になりますが、今もOB会がこうして続いているのは、先輩方のご尽力はもちろんのこと、いまの現役の後輩がいるからだとは私は考えております。この場を借りて心よりお礼を述べさせていただきます。これからも我々平成14年卒は勝井を筆頭に、開成バレー部の「繋がり」に貢献させていただきます。



写真(左)関東大会予選, (右)本戦敗退後の会場外にて (左上から人見、六角、勝井、大内、左下ゴップル、井口、植田)。写真がなく残念ですが、高二まで一緒に汗を流した大西、保谷も大切な仲間です。

平成15年卒

『我が心の師』中村 博次 先生 ～開成バレー部70年史に寄せて～

吉田 和成

開成バレー部70年史出版にあたり、執筆依頼をいただき、真っ先に私の心に浮かんだのが中村博次先生であった。先生について記すことで、皆さまが開成バレー部の歴史について振り返る一助となれば幸いである。

私は、中学1年の途中で開成バレー部に入部したが、そのとき中村先生の姿は練習場にはなかった。先生は心臓の病で懸命に闘病されていたのだった。九死に一生を得てバレー部指導に復帰された中村先生に、私は中学高校で部長を務めていたこともあり、ひとかたならぬご指導をいただいた。

少しその様子を思い出してみよう。

練習では、中村先生は基本的に優しく見守る姿勢だったが、球際・ネット際へのこだわりは特別強く、闘志を欠いたプレーへの指導は厳しいものであった。それは、東京オリンピックの審判から長くバレーボール界に尽力された中村先生の人生哲学から来るものだったのかもしれない。ときに、先生はネットの下の紐を外して自ら持たれて、ネットに当たって跳ね返るボールの処理を指導くださった。それは、ネット際や球際は流れが変わる重要な局面であり、そうした局面を制することで試合に勝ち、さらにはチームが強くなることを先生が確信されていたからだと思われる。

さらに試合で思い出されるのは、タイムアウト時である。先生は一人一人の顔をタオルで拭いてくださりながら個々に声をかけられた。当時は少し気持ちが悪かったのだが、いま思うとそれはスキンシップと汗を拭くことを兼ねた一石二鳥の指導であった。そしてタイムアウトが終わると、「チョッ！」という言語化の難しい掛け声をかけて選手をコートに送り出された。その指導と采配は勝負師としてのこだわりを溢れたものであった。

コートでは厳しい一面を見せることのあった先生であったが、お人柄は寛大で温和、バレー部員はもちろん、部員以外の開成関係者の誰からも愛される存在であった。誰がいつつけたのか、「エロジ」というあだ名で呼ばれていたが、ご本人はさして咎めることもなく、笑顔で生徒指導にあたられていた。

ときたま飛び出すエロジ発言も私たちを大いに和ませた。練習にペットボトルを持参するように指示される際に、「テトラポットを持ってくるように」とおっしゃったことなど、今でも微笑ましい。

そんな中村博次先生であったが、2001年5月25日に、惜しまれながら帰らぬ人となられた。享年66歳であった。私は当時高校の部長をしていたため、たびたび先生が再度入院されていた国際医療センターにうかがった。先生は病床にあっても部員のことを思い、合宿や試合の手配などに腐心されていた。その公平無私で、周囲のために懸命に働かれる姿には本当に頭が下がる思いであった。バレーボールからはじまり、礼儀や基本動作

に至るまで、先生からいただいた指導は、開成バレー部の基軸となり、私たち指導いただいた部員各人の心に生き続けている。まさに、私たちの『心の師』である。

～エロジ、FOREVER!～

平成16年卒

森 禎三郎

この度は、開成学園バレーボール部70周年、また、記念誌の発行、誠におめでとうございます。

70年続く伝統あるバレーボール部の一員として、我々もその歴史の一部になっていることをとても誇らしく、そして、ありがたく感じております。私達、平成16年卒を代表して森が執筆を務めさせていただきます。

私達、平成16年卒は、中学1年時の高校3年生であった平成11年卒の楓淳一郎先輩方に主に指導頂き、バレーボールという競技をはじめました。

1年生の時には通常の練習時間にはほとんどボールを用いた練習が出来ません。そんな中、楓コーチの熱意と御厚意により、17時の通常練習が終わった後でコートに残って楓コーチと自分たちの学年だけで居残り練習を行い、また朝練や昼練を開始して、バレーボール技術の向上と大会での勝利へ向けた日々を過ごしました。

居残り練習が見つかり、故・中村先生に楓先輩が叱られていたのもまだ記憶に新しいところです。顧問の先生に叱られながらも、ここまでの熱意をもって私達をご指導くださった楓先輩には本当に心より感謝し、尊敬の念を今でも衰えることなく感じております。

そんな恵まれた状況で始まった私達の代も、なかなか思うような戦績は残すことができませんでした。

中学生では新人戦で都大会出場を果たしたものの初戦で敗退、東京都中学私学大会でベスト4まで残り3位入賞したこと以外には目立った成績は残すことが出来ませんでした。

中学を卒業して高校となる際に数名のメンバーが部を離れ、私達が最高学年となった年には下の学年とあわせて7名で高校の部活を開始しております。そのときも私達が最高学年となったタイミングで楓先輩が高校コーチとして復帰され、再び私達のご指導をして下さいました。

高校ではシード校と善戦はすれども勝利までは一步及ばず、ベスト32の壁を越えることができませんでした。高校3年の関東大会予選2日目、東亜学園戦での敗退をもって私達の高校バレーボール生活も引退となりました。

私達の代は、高校1年生時に主力部員が諸事情により学校を離れ、それをきっかけに他の部員も退部を選択するなど、なかなかメンバーには恵まれない年だったと思います。

それでも、そんな私達を温かく見守りご支援ご指導くださった顧問の栗原先生・奥山先生、そしてコーチを務めて下さった楓先輩をはじめとする諸先輩方、さらには、こんな私達に協力して付いてきてくれた後輩達のお陰で私たちは開成学園バレーボール部の歴史とバトンを途切れさせることなく下へと伝えていくことが出来ました。

私達に関わって下さった全ての皆様にこの場をお借りして御礼申し上げます。

開成学園バレーボール部で経験したことは今も私達の根底に生きています。

皆多忙なこともありOB会などへは顔を出すことが出来ておりませんが、今後とも開成学園バレーボール部の一員として繋がりを持っていられたらと考えております。今後ともよろしく願い申し上げます。

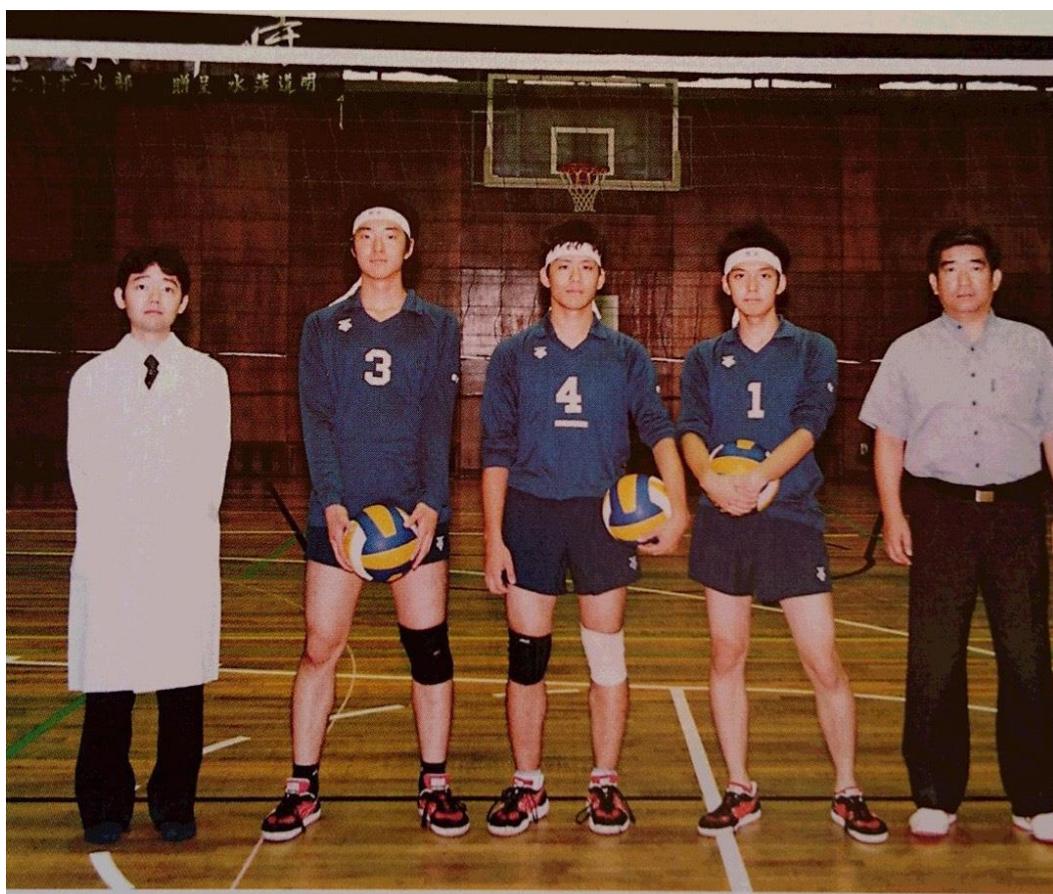
平成17年卒

荒田 雄人

平成17年卒の荒田と申します。私の同期は私を含め3人だけなのですが、すでに全員が結婚しており、最近は改めて卒業してからの年月を感じています。高校時代、ひたすらバレーに打ち込み、勉強もほどほどに休日は他校へ練習試合に出かけ、体育館が使えない日は一般開放の体育館に集まり練習をしていた、あの熱い日々を思い返すと今でも胸が熱くなってきました。

バレーボールには縁を繋ぐ不思議な力があると感じておりまして、実は私の結婚もバレーボールが繋いでくれたものでした。大学でもバレーボールをサークル活動で続けていた私は、同じサークルに後輩として入ってきた現在の妻と出会い、バレーボールを通して仲良くなり、結婚へと至りました。逆に言えば、バレーボールをしていなければ現在の妻とは出会っていないわけで、とても不思議な縁に恵まれて現在の生活に至っているのだと感じます。今そうして思い返してみると、しみじみとバレーボールに感謝するという感情が生まれてきて、ひいてはバレーボールの原点である開成バレー部、指導して下さった顧問の先生や諸先輩方への感謝を忘れてはならないと改めて感じています。

私は恥ずかしながら現在もチームを組み、区の大会に出場するなど細々とバレーボールを続けているのですが、開成の体育館からは足が遠のいて久しくなっていました。どのような形で今までの恩が返せるかは分かりませんが、創部70周年を迎えた開成バレー部の更なる発展に、微力ながらお力添えが出来ればと思います。



平成18年卒



小泉 達彦

私達（平成18年卒）が高校を卒業してから、昨年でちょうど10年が経ちました。今では、同期7名、各組織における若手の原動力として日本・世界各地を飛び回り、忙しくも非常に充実した日々を送っております。そんな忙しい最中であっても、折に触れては集まりの場を設けており、近況報告も早々に、ビールジョッキを片手に、バレーボールに彩られた青春時代の思い出話に花を咲かせています。

卒業して10年が経過し、30代に手をかけようとしている今、特に思い出されるのは、厳しくもためになった練習の数々です。フットワーク、1マンレシーブ、高校ダッシュ。。。これらのメニューは、当時のコーチの方々に、関東大会出場を目指して考案していただいたものです。こうした厳しい練習も、それを乗り越え試合で結果を出した際の達成感も、今では、社会に出て日々奮闘する私達の血となり肉となっています。

最近では、同期一同、体育館への足が遠のいてしまっていることが悩みの種ではあるのですが、今回めでたく創部70周年を迎えた母校バレー部の更なる発展に、今後とも微力ながら寄与してまいりたいと思っています。

大橋 尚史

私の開成バレー部での印象深い思い出の一つは、大学時代に同期の米内、小泉とともに高校コーチをしたことです。

私達の代も目指していた関東大会出場を目標に練習に取り組む現役に対し、時に厳しく、時に更に厳しく、指導を行ったのは自分達の叶えられなかった夢を追う姿を応援したかったからだと思います。ワンマン10分は現役もとても辛かったと思いますが、コーチも身を削りながら頑張っていました。

同じ目標を持った同期、先輩、後輩とともにバレーに打ち込んだ日々は、人生の大きな糧となったと思います。バレー部で得た仲間は一生の宝です。

現役の皆さんがそのような経験をして、これからの人生を豊かにするとともに、その経験を後輩に伝えていってもらえればと思います。OBとして開成バレー部の今後の益々の発展を心から祈っております。

平成19年卒

金田 涼佑

今年の3月で我々の学年が卒業して丁度10年となります。開成バレー部ではきつい練習の思い出もさることながら、連綿と受け継がれている「先輩に教えてもらい、後輩に伝えていく」という伝統の素晴らしさを思い返します。だからこそ、卒業から10年を経た今でも同期はもちろん先輩・後輩と再会し過去の思い出話や近況報告で盛り上がる事が出来るのだと感じております。

様々な学びをくれた開成バレー部が、今後創部80周年、更には創部100周年に向け発展していく過程において、同期一同微力ながら恩返しをして参りたいと思っております。



平成20年卒

高橋 光

先日、仕事で関係するアフガニスタンの研修員に誘われ、久々にバレーボールをする機会がありました。高校卒業（平成20年卒）後は他のスポーツに勤しんでいたこともあり実に8年ぶり。バレーシューズが床にすれるキュッという音、スパイクやレシーブのバンッという音を聞き、現役時代の記憶がふと蘇りました。

室内競技独特の館内に響き渡る応援。確か「いっけーいけいけいけいけ開成、おっせーおせおせおせおせ開成」や、ナイスプレーをした選手を鼓舞する「いいぞーいいぞー〇〇」などと応援していたと記憶しています。

残念ながら現役時代、大した戦績を残すことはできませんでしたが、目標達成のため仲間と切磋琢磨した経験は、現在に活着ていると思います。

同期は、各界で活躍しているようですが、卒業後は中々集まられていません。大切にすべき仲間だと思いますので、まずは節目の年ということで集まり、開成バレー部の更なる発展に微力ながら貢献できればと思います。



平成21年卒

松山 拓朗

私たち平成21年卒は人数が4名(旧高1名、新高3名)と同期の数が少ないながらも、先輩・後輩と協力して部活動に励んでおりました。少数精鋭と言いたいところですが、残念ながら我々が高校在学時代はいずれの大会も大会初日で敗退しており、戦績は芳しいものではなく、まさに谷間の世代と呼ばれる世代であったと思います。

然しながら、我々の頃には夢のまた夢であった関東大会出場を狙えるような部活にまた戻ったと聞き、大変嬉しく感じております。

大学進学・社会進出後は各々新しい団体・ステージで活動していたこともあり、同期で集まることも少なくなり少しばかり疎遠になっておりました。最近、同期4人のうち2人が結婚したこともあり、久々に同期4人で顔を合わせることもありましたが、開成バレー部での苦しくも楽しかった日々がついこの間のことのように思い出し、笑い合いました。

高校卒業後は同期4人で開成バレー部の集まりに顔を出したことは手で数えられる程度しかありませんので、創部70周年を契機に今後は開成バレー部の集まり、そして体育館にも顔を出し、今後の開成バレー部の今後更なる発展に微力ながら力添え出来ればと思います。



平成22年卒

藤井 遼介

早卒業してから6年以上が経ち、私たちが高三としてバレー部に勧誘した当時の中学一年生も今では立派にOBとしてバレー部を支えてくれるようになりました。彼等とOB会の集まりで一緒になる度に、改めてバレー部の縦の繋がりや強さを頼もしく思います。

私は卒業してからもコーチおよびOB会幹事長としてバレー部に関わらせていただきましたが、およそ5年間の現役生活の思い出に劣らぬほど、OBとしてのバレー部生活も思い出深く感じています。現役時代組んだことの無かった先輩方・後輩とチームを組んでの試合、試合後の居酒屋での語り合い等、現役時代には考えられなかった形で先輩・後輩のコミュニケーションが取れるのは、さまざまな開成の部活動の中でも、バレーボール部特有の魅力であると感じております。こここのところ体育館に足を運ぶ機会がめっきり減っておりますが、引き続き平成22年卒一丸となって現役とOB会の一助となれますよう尽力して参ります。



平成23年卒

23年卒一同

卒業してから早6年が経ちました。私たちが勧誘した中学1年生がOBとしてコーチングに当たってくれていると思えば、長い時間が経ったものだと深い感慨を覚えます。反面、70周年を迎える開成バレー部の諸先輩方からすれば、まだまだ若造には違いないと恐縮する限りです。

私たちの代には、当初20名の部員がおりました。大きいのから小さいの、細いのから太いのまで個性豊かな部員が揃っており、中には中学1年生にして身長が170台後半もある者もおりました。恵まれた体格や活気に、輝かしいバレー人生を思っただけで期待に胸を膨らませていたのですが、その道程は順調なものではありませんでした。厳しい練習やレギュラー争いから、20名いた部員も徐々に減少し、地区大会では諏訪台中学校相手に大敗（1セットで1点しか取れませんでした）を喫する等、その戦績は惨憺たるものでした。

劇的にチームを変えるような特効薬があった訳ではないのですが、私たちの代を語る上で不可欠なのは、超大型新人である林の加入です。林はバレー未経験者でしたが、新高として不慣れな環境で、又試合会場によっては始発でもコート取りに間に合わない程の交通の不便にもかかわらず、懸命に練習に励む姿に代一同が奮起させられました。

高校に上がる時には、開成の一大行事である運動会との両立をめぐって代が二分し、掲げた目標に向かって努力すること自体の難しさに直面させられました。然し様々なトレーニングメニュー、例えば幼稚園コースを走り続ける朝練、マイケル=ジョーダンも行ったというジャンプアップトレーニング、合宿の恒例メニューである12321、1マン等（ボールを使うものがなかなか出てこないのがボールにキズですが）、文字通り地道な練習で足元を固めて、一体感を醸成していく大切さを学びました（厳しい過去を美化して語るのにはOBの特権でしょうか？）。

前後の代と比較しても私たちの代は攻撃力に欠ける学年でした。特に私たちの代のエースは、最後の春合宿で足首を剥離骨折し、そのリハビリの隙に校内模試で100傑に入る（剥離100傑と言います）というとんでもない奴でした。彼のことは閑話ですが、何れにせよ私たちの代でも前後の代に劣らぬ成績を残せたのは、長い時間をかけて培った一体感故だと思います。引退した後もバレー部を文字ってカレー部を結成し、毎週カレーを食いに行くメンバーもおりました。又卒業しても3ヶ月に1回程度は飲み会を継続しております。

私たちの代は今年で24になりました。単純計算で、中学からの仲間は人生の半分を共に

したことになります。中学1年の時に高校3年の先輩から「辛くても続けなさい」と言われたその意味を再び噛み締める現在です。もし今ここでの言葉が今の中学1年生、高校1年生に届くのならば、僕も同じ言葉を送るだろうと思います。彼らがその意味を理解するには短くて6年間かかるかもしれませんが。

最後に、開成バレー部の益々の発展を祈念しつつ、現役時代にご迷惑をおかけした、先輩、後輩の皆様にそっと謝罪を申し上げ（変なユニフォームの着用を強要して本当にごめんなさい!）、70周年記念OB誌寄稿のご挨拶とさせていただきます。



平成24年卒

岡田健吾

中学1年生の新人戦、私たちの代は0-25という目も当てられない点差で諏訪台中学に大敗を喫しました。そこで自分たちの弱さに気づき、先輩たちの豪快かつ巧みなプレーに憧れて練習を重ね、メンバーが減ったり増えたりしながら、最終的には関東予選でベスト24に入る事ができました。大学に入り、バレー仲間の話を聞くと開成の練習量の少なさに驚くことが多々あります。今でも週3日の練習でよくここまで、強豪とは言えずとも中堅校として戦えるようになったのかは不思議に思います。当時は目の前のことにながむしゃらだったような思い出しかありませんが、引退してから考えると他校に比べて練習メニューも新しいものを取り入れ、十分タフな練習をさせられていたんだと感じます。私事ですが最近、麻布バレー部OBの藤田先輩からチームを作ろうという話があり、東大や早慶のOBなどでバレーをすることになりました。こうしてバレーボールを通じて多くの人と関わられるのも現役時代の先輩・先生方のご指導のおかげです。青春真ただ中の高校生のクリスマスに学校合宿に捧げ、男子校生活で犠牲にしたものも多い我々ですが、中高でバレーを頑張った経験からはとても大きな恩恵を受けております。

同期は社会人になった者もいれば医師や弁護士を目指している者もあり、それぞれの道を進む仲間との交流は懐かしさと新鮮さが常にあります。同期一同、これからも開成バレー部の集まりになるべく出席し、バレー部全体をつなぐOB会の活動にお力添えできればと思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



平成25年卒

山岸 誠治

私の代は元々他の代に比べて人数が少なく6人しか一番上になった時、残っておりませんでした。しかも高さもなかったのでキャプテンの柳町を中心に、どうにかして高いチームに勝とうとして工夫していたのも良い思い出です。レフトの中村を中心とした移動攻撃やセンターのクイックを多用して戦っていました。先ほども言いましたが人数が少ない代だったので下の代には試合においてとかその他部活としての運営をいろいろと助けてもらったという印象もとても強いです。僕たちが1年生の時に宮先生が顧問としていらっしやてから合宿の部屋割りも学年ごとではなくごちゃ混ぜになったりして下の学年の子たちと交流することも多く、下の代とも仲良くなれたのは良かったなあと感じております。

試合の思い出などについて書かせてもらいますと、印象的であったのは引退試合です。関東予選の1日目です。1日目のリーグ戦で僕らは1試合目を大差で勝ったのですが2試合目の錦城高校に1-2で敗れてしまいました。この試合でレフトの中村が泣きながらスパイクを打っていたのが印象的でした。ちなみにですが中村が泣くほどの激戦に負けましたものの得失点差でコートの2位に滑り込むことが出来たため、コート決勝に進出することが出来、二日目に進出したために笑い話でなんとか済みました。

次に練習について書かせてもらいます。うちの代の練習で楽しかったというイメージがあるのは大会前にやるAチームがBチーム相手にやる切り返しの練習です。僕らが一番上の学年だったときは練習に参加している人数も多かったのですが、BチームがAチーム相手には簡単には決めさせないぞという感じで粘りのバレーをしていてとても盛り上がっていたのが印象的でした。

合宿の印象とかですが、印象的なのは僕らが一番上では無かったのですが、高2の春合宿が東日本大震災で中止になってしまったのは残念でした。僕らの在籍中は毎回夏は山中湖の井戸前、春はベルデ軽井沢で行われていました。現役の時練習がきつくとてもつらかったので合宿は毎回いやだなあと感じていたのですが、先輩方や後輩、同期と練習や食事などの生活を共にしたのはとてもいい思い出です。あと僕らの在籍中には全学年を数班に分けて行われる打ち上げダッシュが行われていて、とても嫌であり、つらい思い出しかありませんがなつかしきがあります。

最後になりますが、先日私の代の中村凌大が2016年11月28日に急逝しました、これをお知らせるとともにご冥福をお祈りします。

平成26年卒

米内 征也

私達平成26年卒は近年の開成バレー部における環境の節目の代にあっていた。それまで開成バレー部での練習体制は中学、高校ともにOBの方々が指導を行い、そこで学んだことをさらに下の代へと引き継いでいくというものであった。しかし、私達が中学3年に進級したとき、宮先生が開成バレー部顧問に就任なさり、指導体制に大きな変化が生まれた。以前のように教えられた基礎的な動作の反復練習を続けるだけでなく、より実践的な、試合の中で活かす動きを練習で取り組むことが出来るようになった。練習の方法もさることながら、私たちが最も大きな変化を感じたのは開成バレー部での先輩と後輩のあり方である。それまでのバレー部では、あくまで上級生が強者であり、バレーボールをするためのコート整備、そして練習が終わった際の片付けを行うのはもちろん下級生にのみの仕事であり、その間、上級生は練習に励むというのが当たり前の光景であった。その認識に一石を投じたのが宮先生であり、バレーボールに取り組む者は少なくともコート内では対等であるため、準備、片付けを練習に関わる者全員が行うのは当然であると宮先生はおっしゃった。中学3年生の私たちは上級生であったため、反発する気持ちもあったが、高校生になってからは皆で準備し、皆で片付けるようになっていた。このような先輩後輩のあり方は私達の代前後で大きく変わったと思う。

私達の学年はセッターが途中で退部してしまったため、チームを組む際は下級生にセッターを担当させていた。しかし、そのような状況でも後輩が先輩に遠慮することなく、チームとして強くなるための意見交換が頻繁に交わされ、チームの戦略については時に口論になるほど、部員全員が開成バレーボール部に熱くなっていた。これも環境の変化によるものが大きく、部員が対等になれる部活になったからこそ実現出来たことであり、宮先生には部員皆とても感謝している。引退試合ではベスト16をかけて東海大菅生と戦い、惜しくも敗れてしまった。しかし、勝ちがすぐそこまで見える試合展開だったため、本当に悔しかった。

私たちの代だけではなく、どの代も最後は悔しさに涙を流したことだと思う。しかし、そうした経験をどの代も重ねて来たことで70年続く開成バレーボール部がどのような道を歩み、私達はその歴史にどのような1ページを刻むことができたのか、多くの方々と共有することができた。今後も平成26年卒一同開成バレーボール部に6年間在籍し続けたことで享受出来たものを先輩方と語り、後輩達に伝えていきたいと思う。

平成27年卒

豊原 雅人

私の学年は少人数ながら強く団結していた学年だと思います。私が入学した頃のバレー部には毎年バレー部に多くの新入部員が入っていたのですが、私の学年の時は入部期間からとても人数が少なかったです。高2の途中で1人辞めてしまいましたが、私たちは5年間ずっと5人で頑張ってきました。ここで、その5人を紹介します。

キャプテンは福田です。個性の強いこの学年をまとめあげる見事なリーダーシップを持っています。どのポジションでも質の高いプレーをする選手です。コート内のプレーにとどまらず、筋トレによる体作りやビデオによる研究も疎かにしません。レフトは上原です。高い打点とガタイの良さを生かし、次々と得点をとるアタッカーです。チームのムードメーカーであり、困った時に頼りになるエースです。センターは酒井です。高い身長を活かしたブロックとクイックが得意です。いろいろなプレーに挑戦する姿勢は誰よりもあります。5年間で最も成長した選手です。リベロは出口です。先輩や後輩に毎回明るく接し、バレー部を明るくします。いろいろありましたが、最後まで一緒に部活を頑張りました。セッターは豊原です。自分のことなので書くのが難しいですが、周りの凄い選手達の足を引っ張りながらも5年間頑張りました。自分はバレーのノウハウを全く知らなかったのですが、教えてくださった先生や仲間には感謝しています。

私の学年の部員を紹介して話がそれてしまいましたが、この学年は強く団結していたということは重ねて言いたいです。毎回部活が終わったら一緒に帰ってコンビニに寄ったり、ご飯を食べたりしました。毎回一緒にとというのは、人数が少ないからこそのことだと思います。バレー部での5年間のこの学年で頑張れたことを嬉しく思います。ありがとうございました。

平成27年卒 酒井 元輝

部員紹介は豊原君がしてくれたので、自分はこの学年の思い出を書いてみたいと思います。最初は10人いました。最初から少ない学年でしたが中学2年生になる頃には6人になっていた気がします。一つ一つ思い出を書いて行きます。

中学1年生最初の夏合宿、とにかく辛かったです。食事の準備、ネットはり、今ではみんな協力しているのかもしれませんが自分達の代までは全て一年生の仕事でした。この辛さがあつたからこそなのか少ない人数で団結していた気がします。この時期から上原、福田は才能を表しはじめ憧れていました。朝練や何回も繰り返しやらされたダッシュ、理不尽なワンマン、これらもとても辛かったです。なんといっても最悪だったのは最終日1

日前の打ち上げダッシュでした。富士山に因んでとかいうよくわからない理由で、夏合宿のコート全面の長い辺を1.2.3.4.4.3.2.1往復しました。ビリには罰でワンマンです。体力が絶望的になかった自分のいたチームは案の定最下位でした。福田も一緒だったかな？笑今ではいい思い出です。中学の大会、引退試合含めてほとんど覚えていません。この頃はとりあえずバレーよりゲームとかしてふざけてた気がします。自分と出口がふざけすぎて福田には迷惑かけました笑

中学での引退試合を終え高校の練習に合流した僕らはレベルの違いに戸惑いました。その頃からやっとバレーを頑張りはじめた気がします笑

高校では合宿で自分達の代が揃ったのは最後の一回くらいだった気がします。色々な不幸が重なりみんなで合宿はなかなか迎えることが出来ませんでした。

僕らの学年は仲良かったとは思いますが全員で遠くに遊びに行く機会はなかなかありませんでした。なので、高校2年生の夏休み豊島園に行ったのはとてもいい思い出です。今でも写真が残っています(どこかに、、、笑)

やはりなんといっても思い出として、欠かせないのは引退試合です。悔しい。今まで勝ち越せていた相手に負け、午前OBさんがまだ揃っていない頃に敗退しました。みんな泣くことすらできなかったです。宮先生もかける言葉がなかったみたいです。結構強かった学年であったと思っていた分やりきれなかったです。

ですが、なんだかんだ言って今ではそれも含めていい思い出です。中学高校という大切な時期にバレーボールに打ち込めて良かった！そういう風にみんな思ってくれているのかな？わからないですが自分は中学1年生部活選びをした自分を褒めてあげたいくらいバレーボール部に入って良かったです。なんかまとまりないですがここら辺で終わりたいと思います。

最後になりましたが今まで支えてくださった先生、OBさん、先輩後輩、そして同期にこの場を借りてお礼を言わせていただきたいと思います。

ありがとうございました！！

平成28年卒

平成28年卒開成バレー部の思い出

野村 果央

中学一年、この代は入部当初15人ほどでした。そのほとんどは運動会で指導して下さった先輩方から勧誘を受けた人たちでした。初めて練習を見学した時の、先輩方のプレーに感激したことは今でも覚えています。中一の頃の部活はとても楽しかったと思います。中二の先輩は練習中でも接する機会が多く、僕たちに優しく、時に厳しくバレーボールを教えてくださいました。中三の先輩方も二つ下の僕たちに気さくに話しかけてくれたことが印象に残っています。中二になると僕たちにも後輩ができました。どのように後輩を指導していくのか、そして先輩として、いかに中学チームを引っ張っていくのかに苦労した年でした。学年内でも退部などごたつきもあり、部活に対する態度を考えさせられることも多かったです。また、この年から須藤先生が中学の練習を見てくださるようになり、基礎的な技術を丁寧に教えて頂きました。さらに、須藤先生にはバレーの技術以外にも礼儀作法など人として大切なことを教わりました。中学の試合では、後輩の助けもあってブロック大会で勝ち進むことができたのは良い思い出です。中三になり、夏からは高校の練習に参加することになりました。先輩方のサポートが中心になりましたが、練習中に対面に入れてもらったり、先輩方が僕たちの指導をして下さったりと、日々の練習がとても充実していました。高一にあがると、ついに高校のチームの一員としての練習になりました。技術や体力においても中学とはレベルが異なり大変でしたが、やりがいもありました。またこの時期に新たに入部してくれた風間、藤井、山口は積極的に練習に参加してくれて、バレーの技術においても精神面においても僕たちの代に欠かせない部員になりました。引退のかかった先輩方とともにプレーをし、サポートをすることは思っていた以上に責任のある大変なことでした。先輩方にもっとなにかできたのではないかと、とも思います。そして高二になり、自分たちの執行代になりました。バレー部全体をまとめる役割を背負いつつ、運動会との兼ね合いも考えなければならないこの時期は、この代の皆、色々と悩み苦しむことが多かったと思います。チームとして勝つためにつらい決断をしなければならぬことも多々ありました。それでも宮先生が支えて下さったおかげで関東決定戦まで出場することができました。関東に行くことは叶いませんでしたが、それでも中高の間続けてきた価値のある日々であったとおもいます。

開成学園バレーボール部 70年の主な歩み

昭和 22 岩谷昭史 創部

23

24 伊藤清一

25 関東大会(於:横浜)出場 合宿始まる(於土浦)

26

27 上迫忠夫

28 三崎合宿

29

30

31 追浜合宿

32

33 この頃文化祭にて3校(開成、麻布、駒場東邦)リーグ始まる

34 中村博次 山中湖合宿

35 高校・5校(開成、麻布、小石川、上野、日比谷)リーグ始まる

36

この頃高校6人制導入 9人制と併用

37

38

39 関東大会出場(於:横浜 9人制)

40 国体予選で都ベスト8、準々決勝で敗れた日大鶴ヶ丘に後のミュンヘン五輪金メダリストの森田淳吾がいた

41

42 前芝荘(岩井)に体育館ができる 合宿は夏春とも前芝荘に定着する

43 関東大会出場(於:甲府) 新人大会都ベスト4

44 関東大会2年連続出場(於:水戸)

45 中学私学大会優勝

46 体育館完成

47

48 関東大会出場(於:熊谷)

49 中学・私学大会優勝

50 夏合宿は開成体育館

51 30周年記念兼中村先生国際審判員資格取得祝賀会

52

53

54 新人大会からネットの高さが240cmとなった

55

56



時計台の前のコートでスパイク練習 (昭和29年頃)



麻布文化祭での3校リーグ この頃試合前後の挨拶はネットを挟んで行った。

(昭和36年5月6日)



関東大会出場記念バッジ



関東大会会場にて



保護者の方も一緒にお祝いました

57 新人大大会4回戦で戦った東亜はこの後勝ち進み春高バレー全国優勝(ミラクル東亜)

58

59

60

61

62 40周年記念祝賀会 記念文集発行

63 中学・私学大会優勝

平成 元 この頃「不撓不屈」の応援幕

2

3

4

5

6 前芝荘がこれで最後(中村先生が前芝荘とケンカしたため)

7 夏合宿(岩井・紀伊国屋)チーフ:今井さん

8 春合宿(軽井沢・ヴェルデ軽井沢)チーフ:北村さん

9 50周年記念祝賀会

10 春高予選で対戦した錦城高校に197cm山村宏太(後の全日本)がいた

11 このころ、ネットインサーブあり、リベロ導入、15点制から25点ラリーポイントマッチ制へ、とルールがめまぐるしく変わった

12 中村博次 栗原 弘 関東大会出場を決める順位決定リーグに進む、勝率、セット率では並んだが得点率で惜しくも3位、出場権を逃す

13 栗原 弘 関東大会出場(於:日立)

14

15 恒例の春夏合宿に加えて、年末に高校泊まり込み合宿を実施。

16 関東大会出場を決める順位決定リーグに進むも2連敗し出場権を逃す

17

18

19 60周年記念祝賀会を麻布バレーボール部と合同で行う

20

21

22 宮 利政

23

24

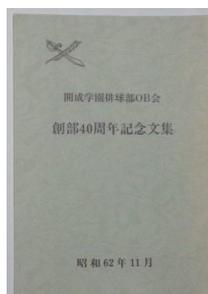
25

26 OB会でサーブマシンを購入

27 関東大会出場を決める順位決定リーグに進むも2連敗し出場権を逃す

28

29 創部70周年記念祝賀会



開成高校バレーボール部年次戦績一覧

昭和

年	監督	大会	勝敗	対戦校
25		憲法大会	一日目 ○	都立城南
			準決(?) ●	
		春関東大会	一日目 ○	都立千歳
			二日目 ●	武南(神奈川)
		秋関東大会	一回戦 ○	不明
	二回戦 ●	翠穂(神奈川)		

26年～35年は不明

年	監督	大会	勝敗	対戦校
36	中村博次	都大会予選	○2-0	豊昭
			●0-2	都立新宿
		3校リーグ(春)	○2-0	東邦
			○2-0	麻布
		関東予選 支部予選	○2-0	成城
			○2-0	都立志村
			○2-1	海城
		本大会	●0-2	都立化工
			○2-1	都立竹早
		全日本予選	○2-0	都立江北
			○2-1	都立雪谷
		5校リーグ	●0-2	聖橋
			○2-1	都立日比谷
			●0-2	都立小石川
			○2-0	都立上野
		国体予選	●1-2	麻布
			○2-0	駒込
			○2-1	都立北野
			○2-0	海城
		3校リーグ(秋)	●1-2	明大中野
			●1-2	東邦
			○2-0	麻布
		6人制予選	○2-1	都立武蔵丘
私学祭 予選	●0-2	都立目黒		
	○2-0	岩倉		
本大会	●1-2	日大鶴ヶ丘		
	○2-0	日大豊山		
新人大会 予選	○2-0	都立小石川		
	●0-2	聖橋		
	○2-0	城北		
復活戦 本大会	●0-2	明治		

年	監督	大会	勝敗	対戦校
37	中村博次		不明	

年	監督	大会	勝敗	対戦校
38	中村博次		不明	

年	監督	大会	勝敗	対戦校
39	中村博次	関東予選 (9人制)	一回戦 ○	不明
			二回戦 ○	不明
		決勝 ●0-2	駒大高	
関東大会	一回戦 ●0-2	水戸工業		

年	監督	大会	勝敗	対戦校
40	中村博次	春季大会		
		関東予選		
		総体予選		
		国体予選	○	東洋
		(都ベスト8) 準々決勝	●0-2	日大鶴ヶ丘

年	監督	大会	勝敗	対戦校
41	中村博次		不明	

年	監督	大会	勝敗	対戦校
42	中村博次	春季大会 支部予選	二回戦 ○2-1	不明
			三回戦 ○2-1	教育大附属
			コート決 ●1-2	学習院
		関東予選 支部予選	二回戦 ○2-0	北豊島工
			三回戦 ○2-0	豊島実業
			コート決 ○2-0	文京
		本大会	一回戦 ●0-2	西
			一回戦 ●	不明
		全日本予選	一回戦 ●	不明
		国体予選	二回戦 ○2-0	堀越
			三回戦 ●1-2	上野
		5校リーグ 支部優勝大会	1勝3敗	
			二回戦 ○2-0	小石川工
			三回戦 ○2-0	板橋
			四回戦 ○2-0	開成B
新人大会 支部予選	準決勝 ●0-2	昭和第一		
	一回戦 ○2-1	北		
	二回戦 ●0-2	新宿		

年	監督	大会	勝敗	対戦校
43	中村博次	春季大会 支部予選	一回戦 ●0-2	電機大付属
			二回戦 ○2-0	竹台
			三回戦 ○2-0	日大豊山
		本大会	コート決 ○2-0	城西
			一回戦 ○2-0	明治学院
			二回戦 ●1-2	安田
		関東大会	一回戦 ●0-2	(神奈川)
		全日本予選	二回戦 ○2-0	大森工
		国体予選 支部優勝大会	以下不明	
			二回戦 ●1-2	志村
			一回戦 ○2-1	戸山
			三回戦 ○2-1	小石川
			四回戦 ○2-0	北野
			準決勝 ●1-2	昭和第一
			二回戦 ○2-0	四商
一回戦 ○2-0	王子工			
コート決 ○2-0	聖橋			
本部大会	一回戦 ○2-0		墨田川	
二回戦 ○2-0	駿台			
都ベスト4	準決勝 ●1-2	駒大高		

年	監督	大会	勝敗	対戦校
44	中村博次	春季大会 支部予選	二回戦	〇2-0 本郷
		春季大会 本部大会	一回戦	〇2-1 南
			二回戦	●1-2 (私)城北
		関東予選 支部予選	二回戦	〇2-0 日大三
		関東予選 本部大会	一回戦	●0-2 駒大高
			二回戦	●0-2 勝田工業
			一回戦	●1-2 栃木商業
		全日本予選	一回戦	〇2-0 大東文化
			二回戦	〇2-0 江戸川
			コート決	●0-2 向丘
		国体予選	一回戦	〇0-2 都武蔵
		支部優勝大会 (開成A)	一回戦	〇2-0 竹早
			二回戦	〇2-1 北
			三回戦	● 昭和第一
			準決勝	●0-2 小石川
		新人大会 支部予選	一回戦	〇2-0 赤城台
			二回戦	〇2-0 豊島実
			コート決	〇2-0 竹早
		本部大会	一回戦	〇2-0 都駒場
			二回戦	●1-2 明大中野

年	監督	大会	勝敗	対戦校
45	中村博次	春季大会 支部予選	一回戦	〇2-0 本郷
			二回戦	〇2-0 都文館
			コート決	〇2-0 練馬
		本部大会	一回戦	●0-2 羽田工
		関東予選 支部予選	二回戦	〇2-0 大東文化
			三回戦	〇2-1 大山
			コート決	●1-2 大泉
		全日本予選	一回戦	●1-2 成城学園
		国体予選	二回戦	●1-2 八潮
		支部優勝大会 (開成A)	一回戦	●0-2 市ヶ谷商
		(開成B)	二回戦	〇2-1 戸山
			三回戦	●0-2 学習院
		新人大会	一回戦	〇2-0 大東文化
			二回戦	●0-2 北

年	監督	大会	勝敗	対戦校
46	中村博次	春季大会 支部予選	二回戦	〇2-0 都文館
			三回戦	●0-2 戸山
		関東予選 支部予選	二回戦	〇2-0 巣鴨
			三回戦	●1-2 教育大附
		総体予選	一回戦	●0-2 田園調布
		国体予選	二回戦	〇2-0 世田谷工
			三回戦	●1-2 北野
		支部優勝大会	二回戦	〇2-0 王子工
				以下不明
		新人大会 支部予選	一回戦	〇2-1 駒込
			二回戦	〇2-1 芝浦工大
			コート決勝	●0-2 駿台

年	監督	大会	勝敗	対戦校
47	中村博次	春季大会 支部予選	二回戦	〇2-0 獨協
			三回戦	●0-2 石神井
		関東予選 支部予選	二回戦	〇2-0 市ヶ谷
			三回戦	〇2-1 荒川工
			コート決勝	〇2-0 竹台
		本部大会	一回戦	〇2-0 日体荏原
			二回戦	●0-2 明大中野
		総体予選	二回戦	〇2-0 豊南
			三回戦	〇2-1 (不明)
			コート決勝	〇2-0 池袋商業
				以下不明
		国体予選	二回戦	〇2-0 豊南
			三回戦	〇2-0 玉川
			コート決勝	〇2-1 雪谷
		以下不明		
支部優勝大会		不明		
新人大会	一日目	〇		
	二日目	〇		
	8決め	●0-2 中大附属		

年	監督	大会	勝敗	対戦校
48	中村博次	春季大会 支部予選	二回戦	〇2-0 北
			三回戦	〇2-0 四商
			コート決	●1-2 (都)城北
		関東予選 支部予選	二回戦	〇2-0 牛込商
			三回戦	〇2-0 成立
			コート決	〇2-0 北野
		本部大会	一回戦	〇2-0 本所
			二回戦	●0-2 駒大高
		関東大会	一回戦	●0-2 國學院栃木
		総体予選	二回戦	〇2-0 秋川
			三回戦	〇2-0 三田
			コート決	●0-2 北園
		国体予選 支部予選		不明
		本部大会	一回戦	●0-2 駒大高
		支部優勝大会	一回戦	〇2-0 大東文化
			二回戦	〇2-0 北園
			コート決	●1-2 駿台
			四回戦	●1-2 駿台
		新人大会 支部予選		不明
		本部大会	一回戦	〇2-0 雪ヶ谷
	二回戦	●0-2 (私)城北		

年	監督	大会	勝敗	対戦校
49	中村博次	春季大会 支部予選	一回戦	〇2-0 中野工
			二回戦	〇2-0 東亜商業
			コート決勝	〇2-0 志村
		本部大会	一回戦	〇2-1 駒場学園
			二回戦	●0-2 明大中野
		関東予選 支部予選	二回戦	〇2-0 北
			三回戦	〇2-1 豊島実業
			コート決勝	〇2-0 大東文化
		本部大会	一回戦	●0-2 小山台
			二回戦	●0-2 桐朋
		総体予選	二回戦	●1-2 東大和
		国体予選	二回戦	〇2-0 小石川工
		支部優勝大会	三回戦	●1-2 文京
		新人大会 支部予選		不明
本部大会	一回戦	●0-2 九段		

年	監督	大会	勝敗	対戦校
50	中村博次	春季大会 支部予選	二回戦	〇2-0 練馬
			三回戦	●0-2 北
		関東予選 支部予選	二回戦	〇2-0 四商
			三回戦	〇2-1 石神井
			コート決	〇1-2 (都)城北
		総体予選	二回戦	〇2-0 農芸
			三回戦	〇2-1 深沢
			コート決	●0-2 日大豊山
		国体予選	一回戦	●1-2 東京工業
		支部優勝大会	一回戦	〇2-0 武蔵
			二回戦	〇2-0 北
			三回戦	●0-2 早大学院
		新人大会 支部予選	二回戦	〇2-0 竹台
			三回戦	〇2-0 豊南
			コート決	〇2-0 北野
		本部大会	一回戦	●0-2 修徳

年	監督	大会	勝敗	対戦校
51	中村博次	春季大会 支部予選	二回戦	●0-2 高島
		関東予選 支部予選	一回戦	〇2-1 本郷
			二回戦	〇2-0 池袋商
			三回戦	●1-2 戸山
		総体予選	一回戦	〇2-0 武工大付
			二回戦	〇2-0 白鷲
			三回戦	●1-2 秋川
		国体予選	一回戦	〇2-0 武工大付
			二回戦	〇2-1 蔵前工業
			三回戦	●1-2 修徳
		支部優勝大会	一回戦	〇2-0 富士B
			二回戦	〇2-1 北園
			三回戦	●0-2 富士A
		新人大会 支部予選	一回戦	〇2-0 本郷
			二回戦	〇2-0 堀越
			コート決	〇2-1 荒川工
本部大会	一回戦	●0-2 芝		

年	監督	大会	勝敗	対戦校
52	中村博次	春季大会	一回戦 ●0-2	豊島
		関東予選	一回戦 ○2-0	成立
		支部予選	二回戦 ●0-2	大泉
		総体予選	二回戦 ●0-2	正則
		国体予選	二回戦 ●1-2	葛西南
		支部優勝大会	一回戦 ○2-1	武蔵
		新人大会	二回戦 ●1-2	本郷
		支部予選	一回戦 ●0-2	竹台

年	監督	大会	勝敗	対戦校
53	中村博次	春季大会	一回戦 ○2-0	聖学院
		支部予選	二回戦 ○2-0	海城
		総体予選	三回戦 ●0-2	竹台
		関東予選	一回戦 ●0-2	豊南
		支部予選	二回戦 ○2-1	立川
		総体予選	三回戦 ●0-2	多摩
		国体予選	二回戦 ○2-0	世田谷工
		支部予選	三回戦 ○2-0	杉並
		コート決	●1-2	大東文化
		支部優勝大会	一、二回戦 不明	
		新人大会	三回戦 ●0-2	北園
		支部予選	二回戦 ○2-1	巣鴨
		新人大会	三回戦 ○2-0	成立
		本大会	コート決 ○2-1	本郷
新人大会	一回戦 ●0-2	高輪		

※54年以降春季大会の結果が不明となっている。大会が開催されていなかった可能性がある。

年	監督	大会	勝敗	対戦校
54	中村博次	春季大会	不明	
		関東予選	一回戦 ○2-0	中野工
		支部予選	二回戦 ○2-0	実践商
		総体予選	三回戦 ●0-2	石神井
		国体予選	一回戦 ○2-0	都立
		支部予選	二回戦 ●0-2	武蔵村山
		新人大会	一回戦 ○2-0	大森
		支部優勝大会	二回戦 ○2-0	早稲田
		新人大会	三回戦 ●1-2	多摩
		支部予選	二回戦 ○2-0	荻窪
		新人大会	三回戦 ○2-0	牛込商
		支部予選	四回戦 ●0-2	豊南
		新人大会	二回戦 ○2-0	都城北
		支部予選	三回戦 ●1-2	清瀬

年	監督	大会	勝敗	対戦校
55	中村博次	春季大会	不明	
		関東予選	不明	
		総体予選	一回戦 ●0-2	西
		国体予選	不明	
		支部優勝大会	二回戦 ○2-1	佼成
		新人大会	三回戦 ○2-1	池袋商
		新人大会	四回戦 ●0-2	北園

年	監督	大会	勝敗	対戦校
56	中村博次	春季大会	不明	
		関東予選	一回戦 ○2-0	帝京
		支部予選	三回戦 ●0-2	大山
		総体予選	一回戦 ○2-1	南多摩
		国体予選	二回戦 ○2-1	錦城学園
		支部予選	三回戦 ●0-2	武蔵村山
		新人大会	二回戦 ○2-0	成立
		支部優勝大会	三回戦 ●0-2	砂川
		新人大会	一回戦 ○2-0	小石川工
		支部予選	二回戦 ○2-0	本郷
		新人大会	三回戦 ●0-2	豊島実
		支部予選	二回戦 ●0-2	大泉

年	監督	大会	勝敗	対戦校
57	中村博次	春季大会	不明	
		関東予選	不明	
		総体予選	不明	
		国体予選	不明	
		支部優勝大会	二回戦 ●0-2	早稲田
		新人大会	二回戦 ○2-1	不明
		新人大会	三回戦 ○2-1	清瀬東
新人大会	四回戦 ●0-2	東亜		

年	監督	大会	勝敗	対戦校
58	中村博次	春季大会	一回戦 ○2-1	武蔵
		関東予選	以下不明	
		支部予選	二回戦 ○2-0	芝浦工大
		総体予選	三回戦 ●1-2	城北
		国体予選	一回戦 不明	
		支部予選	二回戦 ○2-0	目黒
		新人大会	二回戦 ○2-0	小金井北
		支部優勝大会	三回戦 ○2-0	八潮
		新人大会	コート決 ●1-2	駿台
		5校リーグ	2位	
		支部優勝大会	不明	
		新人大会	二回戦 ○2-0	早大学院
		新人大会	三回戦 ○2-1	本郷
		新人大会	コート決 ●1-2	駿台

年	監督	大会	勝敗	対戦校
59	中村博次	春季大会	不明	
		関東予選	一回戦 ○2-0	武蔵
		支部予選	三回戦 ●0-2	帝京
		総体予選	一回戦 ●1-2	稲城
		国体予選	一回戦 ○2-0	玉川学園
		支部予選	二回戦 ○2-0	砂川
		支部優勝大会	一回戦 ●0-2	成城
		新人大会	一回戦 ○2-0	竹台
		新人大会	二回戦 ●1-2	戸山
		新人大会	二回戦 ○2-1	光ヶ丘
		新人大会	三回戦 ●0-2	北園

年	監督	大会	勝敗	対戦校
60	中村博次	春季大会	不明	
		関東予選	一回戦 ○2-0	鷺宮
		支部予選	二回戦 ●0-2	豊島
		総体予選	二回戦 ●0-2	実践商
		国体予選	不明	
		支部優勝大会	一回戦 ○2-0	帝京
		新人大会	二回戦 ○2-1	豊南
		新人大会	三回戦 ●0-2	駿台
		新人大会	一回戦 ○2-0	佼成
		新人大会	以下不明	
		新人大会	二回戦 ○2-0	豊南
新人大会	三回戦 ●0-2	堀越		

年	監督	大会	勝敗	対戦校
61	中村博次	春季大会	不明	
		関東予選	一回戦 ○2-0	海城
		支部予選	二回戦 ●0-2	豊南
		総体予選	一回戦 ○2-0	目黒
		国体予選	二回戦 ○2-0	南葛飾
		支部予選	三回戦 ●0-2	駿台
		新人大会	一回戦 ○2-0	深沢
		新人大会	二回戦 ○2-0	岩倉
		新人大会	三回戦 ●0-2	早実
		私学大会	一回戦 ○2-0	学習院
		支部優勝大会	二回戦 ●0-2	中大杉並
		新人大会	二回戦 ○2-0	牛込商
		新人大会	三回戦 ●0-2	東亜
		新人大会	一回戦 ○2-0	光ヶ丘
新人大会	二回戦 ○2-0	早稲田		
新人大会	三回戦 ●1-2	大泉学園		

年	監督	大会	勝敗	対戦校	
62	中村博次	関東予選	一回戦 ●1-2	本郷	
		支部予選	一回戦 ●0-2	世田谷学園	
		総体予選	一回戦 ●0-2	附中東	
		国体予選	一回戦 ○2-0	池袋商	
		支部優勝大会	二回戦 ●1-2	井草	
		新人大会	支部予選	一回戦 ○2-1	練馬
			二回戦	○2-0	清瀬
			三回戦	●0-2	駿台

年	監督	大会	勝敗	対戦校	
63	中村博次	関東予選	一回戦 ○2-1	海城	
		支部予選	二回戦 ○2-1	板橋	
			三回戦 ●0-2	清瀬東	
		総体予選	一回戦 ●1-2	三田	
		支部優勝大会	二回戦 ○2-1	北園	
		新人大会	支部予選	一回戦 ●1-2	私城北
			二回戦	○2-0	帝京
			三回戦	○2-0	武蔵
			三回戦	○2-0	久留米西
		本大会		不明	

平成

年	監督	大会	勝敗	対戦校	
元	中村博次	関東予選	二回戦 ●0-2	成城	
		支部予選	一回戦 ○2-0	竹早	
		総体予選	二回戦 ○2-0	田園調布	
			三回戦 ●1-2	(私)城北	
		支部優勝大会	二回戦 ○2-0	石神井	
		新人大会	三回戦	●1-2	城北
					不明

年	監督	大会	勝敗	対戦校	
2	中村博次	関東予選	一回戦 ○2-0	芝浦工大付	
		支部予選	二回戦 ●0-2	日大鶴ヶ丘	
		総体予選	一回戦 ○2-0	足立工	
			二回戦 ○2-0	桜町	
			三回戦 ○2-0	秋川	
			コート決	●0-2	東亜
		支部優勝大会	一回戦 ○2-0	志村	
			二回戦 ○2-1	武蔵丘	
			三回戦 ○2-0	成城	
			四回戦 ○2-0	石神井	
			準決勝	●0-2	東亜
		新人大会	支部予選	一回戦 ○2-0	奥多摩
			二回戦	○2-0	芝浦工大
			三回戦	○2-0	小石川工
		本大会	一回戦	●0-2	駿台

年	監督	大会	勝敗	対戦校		
3	中村博次	関東予選	一回戦 ●0-2	文京		
		支部予選	一回戦 ○2-0	ICU		
		総体予選	二回戦 ○2-0	野津田		
			三回戦 ●0-2	(私)城北		
		中実専日杯	一回戦 ○2-0	日大鶴ヶ丘		
			準決勝	○2-0	実践学園	
			決勝	○2-0	中大杉並	
		私学大会	一回戦 ●0-2	日本学園		
		5校リーグ	○2-0	小石川		
			○2-0	上野		
			●0-2	開成		
			○2-0	日比谷		
		支部優勝大会	一回戦 ○2-0	清瀬		
			二回戦 ○2-1	海城		
			三回戦 ●1-2	北野		
		新人大会	支部予選	リーグ	●1-2	海城
				○2-0	杉並工	
				●1-2	戸山	
				○2-0	実践	

年	監督	大会	勝敗	対戦校		
4	中村博次	関東予選	二回戦 ○2-0	永福		
		支部予選	三回戦 ○2-1	巢鴨		
			四回戦 ●0-2	堀越		
		総体予選	一回戦 ○2-1	昭和一		
			二回戦 ●0-2	日大桜丘		
		8校杯		4位		
		5校リーグ		○2-1	小石川	
				○2-0	上野	
				●0-2	麻布	
				○2-0	日比谷	
		私学大会	一回戦 ○2-0	京北		
			二回戦 ○2-0	順天		
			三回戦 ●0-2	東海大菅生		
		支部優勝大会	一回戦 ○2-0	中大杉並		
			二回戦 ○2-0	高島		
			三回戦 ●1-2	早実		
		新人大会	支部予選	リーグ	○2-0	学習院
				○2-0	成立	
				○2-0	日大二	
				○2-0	光丘	
		●0-2	大東文化一			

年	監督	大会	勝敗	対戦校		
5	中村博次	関東予選	一回戦 ●0-2	高島		
		支部予選		不明		
		総体予選	予選リーグ	●0-2	中大附属	
		8校リーグ		○2-0	実践	
			3位決定戦	○2-1	中大杉並	
		私学大会	一回戦 ○2-0	駒場東邦		
			二回戦 ○2-0	立正		
			三回戦 ●0-2	駒大高		
		5校リーグ		●0-2	麻布	
				●0-2	日比谷	
				●0-2	小石川	
				○2-0	上野	
		支部優勝大会	一回戦 ○2-0	西		
			二回戦 ○2-0	聖学院		
			三回戦 ●0-2	東亜		
		新人大会	支部予選	リーグ	○2-0	豊島
				○2-0	聖学院	
				○2-0	板橋	
			トーナメント	●0-2	明大中野	

年	監督	大会	勝敗	対戦校	
6	中村博次	関東予選	二回戦 ○2-1	大山	
		支部予選	三回戦 ○2-0	久留米	
			コート決	●1-2	豊島学院
		総体予選	一回戦 ●0-2	日比谷	
		8校杯	一回戦 ○2-1	早大学院	
			二回戦 ○2-0	中大杉並	
			準決勝	○2-1	中大附属
			決勝	●0-2	日大鶴ヶ丘
		5校リーグ		○2-0	日比谷
				○2-0	上野
				○2-0	麻布
				○2-0	小石川
		私学大会	一回戦 ○2-1	桐朋	
			二回戦 ○2-0	日大豊山	
			三回戦 ●0-2	豊島学院	
		支部優勝大会	リーグ	●0-2	保善
				○2-0	第四商業
		新人大会	支部予選	一回戦 ○2-0	本郷
			二回戦	●0-2	保谷
		冬私学大会	一回戦 ○2-0	明治学院	
	二回戦	●0-2	堀越		

年次戦績

年	監督	大会	勝敗	対戦校	
7	中村博次	関東予選 支部予選	一回戦 ○2-0	巢鴨	
			二回戦 ○2-0	光丘	
			三回戦 ●0-2	文京	
		総体予選	一回戦 ○2-0	和光	
			二回戦 ○2-0	正則学園	
			三回戦 ●0-2	暁星	
		5校リーグ		優勝	
		私学大会	二回戦 ●	東海大菅生	
		支部優勝大会 一日目	リーグ ○2-0	北園	
			○2-0	実践学園	
			二日目 一回戦 ○2-0	豊南	
			二回戦 ○2-1	堀越	
			準決勝 ●0-2	東亜	
		新人大会 支部予選	二回戦 ○2-0	石神井	
			三回戦 ○2-0	戸山	
			四回戦 ●0-2	堀越	
		都大会	リーグ ●0-2	安田	
			●1-2	東京実業	
			○2-0	東京電機大	
		地区選抜大会 都大会	一回戦 ●0-2	駿台学園	

年	監督	大会	勝敗	対戦校
8	中村博次	関東予選 支部予選	二回戦 ○2-0	保谷
			コート決 ○2-0	清瀬
			一回戦 ○2-1	東海大高輪台
		都大会	二回戦 ●1-2	東京実業
		総体予選	一日目敗退	詳細不明
		支部優勝大会 一日目	リーグ ○2-0	海城
			○2-0	保善
			○2-0	実践
			二日目 一回戦 ●1-2	学習院
		新人大会 支部予選	二回戦 ○2-0	久留米
			三回戦 ○2-0	久我山
			コート決 ○2-0	大東文化一
			二日目 一回戦 ●0-2	東亜学園
		都大会	リーグ ●0-2	高輪
			○2-0	桜美林
			○2-0	中大附属
地区選抜大会 都大会	一回戦 ●0-2	東京農大一		

年	監督	大会	勝敗	対戦校	
9	中村博次	関東予選 支部予選	二回戦 ○2-0	四谷商業	
			三回戦 ○2-0	学習院	
			一回戦 ●0-2	関東一	
		総体予選 一日目	一回戦 ○2-0	練馬	
			二回戦 ○2-1	東海大高輪台	
			一回戦 ●0-2	安田	
		5校リーグ		2位(3勝1敗)	
		夏私学大会	二回戦 ●	駿台学園	
		支部優勝大会 一日目	リーグ ○2-0	学習院	
			○2-0	保善	
			○2-0	北園	
			二日目 一回戦 ○2-0	清瀬	
			二回戦 ○2-1	駿台	
			準決勝 ●0-2	東亜	
			3位決 ●1-2	早実	
		新人大会 支部予選	二回戦 ○2-0	豊島	
			三回戦 ○2-0	早稲田	
			一回戦 ●0-2	駿台	
		都大会	リーグ ●0-2	駒大高	
			○2-0	国分寺	
	○2-0	都立			
地区選抜大会 都大会	一回戦 ○2-1	日大鶴ヶ丘			
	二回戦 ●0-2	錦城			
冬私学大会	一回戦 ○2-0	早稲田			
	二回戦 ○2-0	中大杉並			
	三回戦 ●0-2	東亜学園			

年	監督	大会	勝敗	対戦校	
10	中村博次	関東予選 支部予選	二回戦 ○2-0	明大中野	
			三回戦 ○2-0	早稲田	
			一回戦 ●1-2	山崎	
		総体予選	二回戦 ●0-2	科技多摩	
		5校リーグ		○2-0	日比谷
			●0-2	小石川	
			●0-2	上野	
			●0-2	麻布	
		私学大会	一回戦 ○2-0	昭和一	
			二回戦 ○2-0	大東文化一	
			三回戦 ●0-2	東海大菅生	
		支部優勝大会	二回戦 ○2-0	豊多摩	
			三回戦 ●1-2	大東文化一	
		新人大会 支部予選	リーグ ○2-0	大泉	
			○2-0	竹台	
			○2-0	豊島	
			二日目 一回戦 ○2-0	清瀬	
			二回戦 ●0-2	東亜学園	
		都大会	リーグ ●0-2	東洋	
			●1-2	砂川	
	○2-0	日本学園			
地区選抜大会 都大会	一回戦 ○2-1	明大中野			
	二回戦 ●0-2	高輪			
冬私学大会	一回戦 ○2-0	大盛工業			
	二回戦 ○2-0	目黒			
	三回戦 ●0-2	関東一			

年	監督	大会	勝敗	対戦校
11	中村博次	関東予選 支部予選	一回戦 ●0-2	早大学院
		総体予選	一次リーグ ○2-0	小平
			○2-0	目黒学院
			○2-1	小山台
			二次リーグ ●0-2	高輪
			●1-2	明大中野
		支部優勝大会 二日目	○2-0	早大学院
			●0-2	東亜学園
		新人大会	一日目 ○2-0	千歳
			○2-0	麻布
			○2-0	富士
			二日目 ●0-2	安田
		地区選抜大会	一回戦 ○2-0	小石川
			二回戦 ●0-2	駒大高
私学大会	一回戦 ○2-0	学習院		
	二回戦 ●0-2	安田		

年	監督	大会	勝敗	対戦校	
12	中村博次・栗原弘	関東予選	一次リーグ ○2-0	東京工業	
			○2-0	二松学舎	
			○2-0	早稲田	
			二日目 ○2-0	日野台	
			○2-0	東大和南	
			●0-2	駒大高	
			○2-0	中大附属	
			○2-0	町田	
			○2-0	帝京八王子	
		総体予選	二次リーグ ○2-0	京華	
			○2-0	大東文化一	
		支部優勝大会	トーナメント リーグ ○	●0-2	関東一
			○	豊多摩	
			○	杉並	
			○	豊島	
			トーナメント 準々決勝 ●1-2	早稲田実業	
		新人大会	一次リーグ ○	駒場学園	
			○	本所	
			○	付中	
			二次リーグ ○2-0	國學院久我山	
	○2-1	北園			
	●0-2	小山台			
地区選抜大会 都大会	一回戦 ○2-0	町田			
	○2-1	帝京八王子			
	●0-2	高輪			

年次戦績

年	監督	大会	勝敗	対戦校	
13	栗原弘	関東予選	一日目	○2-0 立川	
			○2-0 駒場		
			○2-0 井草		
			二日目	○2-0 小松川	
			○2-0 大東文化一		
			●0-2 桜美林		
			順位決定リーグ	三日目	●0-2 羽村
			○2-0 関東一		
			○2-0 (私)武蔵		
			●1-2 日立一高		
		関東大会	一回戦	●1-2 日立一高	
		総体予選	二次リーグ	○2-0 明治学院	
		●0-2 駒大高			
		私学大会	一回戦	○2-0 正則学園	
		二回戦	●0-2 明大明治		
		支部優勝大会	リーグ	○2-0 第四商業	
		○2-0 光が丘			
		二日目	●0-2 (私)武蔵		
		一次リーグ	○2-0 武蔵村山東		
		○2-0 附中東			
		○2-0 晴海総合			
		二次リーグ	●0-2 関東一		
		●0-2 駒大高			
○2-0 三鷹					
地区選抜大会 都大会	一回戦	●1-2 深川			
私学大会	一回戦	○2-0 中央学院中央			
二回戦	○2-0 工学院高				
三回戦	●0-2 東亜学園				

年	監督	大会	勝敗	対戦校	
14	栗原弘	関東予選	一日目	○2-0 攻玉社	
			●0-2 東大和南		
		総体予選	一日目	○2-0 小平南	
			○2-0 足立西		
			○2-0 國學院		
			○2-0 大崎		
			二次リーグ	●0-2 目黒学院	
			●0-2 駒大高		
			2勝2敗	3位	
			5校リーグ	一回戦	○2-0 麻布
			私学大会	二回戦	●0-2 堀越
			支部優勝大会	リーグ	○ 早稲田
		○ 富士			
		○ 大東文化一			
		新人大会	二日目	●1-2 石神井	
			一次リーグ	○ 日比谷	
			○ 桜町		
			○ 大成		
			○ 筑波大駒場		
			● 立川		
			● 日大一		

年	監督	大会	勝敗	対戦校	
15	栗原弘	関東予選	一日目	○2-1 青山	
			○2-0 小松川		
			○2-1 東海大高輪台		
			二日目	●0-2 東亜学園	
			総体予選	一日目	○2-0 小金井
			○2-0 田園調布		
			●0-2 筑波大付属		
			支部優勝大会	○2-0 芝工大付属	
			○2-0 日大鶴ヶ丘		
			○2-0 荻窪		
		○2-0 城北			
		一次リーグ	●0-2 東亜学園		
		○2-0 國學院			
		○2-0 獨協			
		○2-0 南多摩			
		二次リーグ	○2-0 城東		
		●0-2 目黒学院			
		○2-1 東海大菅生			
		地区選抜大会 都大会	一回戦	○2-0 大森工業	
		●0-2 駿台			

年	監督	大会	勝敗	対戦校	
16	栗原弘	関東予選	一日目	○2-0 日体荏原	
			○2-0 小平南		
			○2-0 大崎		
			二日目	○2-0 羽村	
			○2-1 農大一高		
			●0-2 安田		
			順位決定リーグ	●0-2 桜美林	
			●0-2 小山台		
			●0-2 明大明治		
			○2-0 矢板中央		
		総体予選	○2-0 本庄東		
			●0-2 向の上		
			○0-2 獨協		
			○2-1 早稲田		
			●0-2 関東一		
			支部優勝大会	準々決勝	●0-2 大東文化一
			○2-0 日大二		
			新人大会	(ベスト32)	●0-2 安田
			○2-0 上野		
			○2-0 日比谷		
		5校リーグ	優勝	○2-0 麻布	
			○2-0 小石川		
			○2-0 高輪		
私学大会	○2-0 國學院				

年	監督	大会	勝敗	対戦校
17	栗原弘	関東予選	一日目	○2-0 都立武蔵
			○2-0 山崎	
			○2-0 明治学院	
		二日目	●0-2 小山台	
		総体予選	不明	
		私学大会	不明	
		支部優勝大会	不明	
新人大会	不明			

年	監督	大会	勝敗	対戦校
18	栗原弘	関東予選	不明	
			●0-2 拓大一	
		総体予選	一日目	○2-0 葛飾野
			●0-2 東農大一	
		私学大会	○2-1 海城	
			●0-2 中大杉並	
		支部優勝大会	一日目	○2-0 安田
			○2-0 日体荏原	
		新人大会	○2-0 上野	
			●1-2 日比谷	
			○2-0 小石川	
			●0-2 麻布	
			●0-2 豊島学院	
私学大会	○2-0 攻玉社			

年次戦績

年	監督	大会	勝敗	対戦校
19	栗原弘	関東予選	○2-0	東工大科技
			●0-2	小山台
		総体予選	一日目 ●0-2	竹早
			○2-0	創価
		秋季大会	リーグ戦 ●0-2	小平南
			○2-0	明治学院
			●0-2	江北
		新人大会	一次リーグ ○2-0	足立新田
			●0-2	狛江
		私学大会	一回戦 ○2-0	駒込学園
	○2-0	日大三高		
	●0-2	東洋		

年	監督	大会	勝敗	対戦校
20	栗原弘	関東予選	一日目 ○2-0	都立武蔵
			●0-2	日本学園
		総体予選	一日目 ○2-0	大成
			○2-0	駒込
		私学大会	一回戦 ●1-2	青山学院
			○2-0	東京学園
			●1-2	安田
			○2-0	日大桜ヶ丘
			○2-0	足立西
		新人大会	コート決勝 ●0-2	東海大菅生
			一日目 ○2-0	麻布
			○2-0	足立西
			○2-0	日体荏原
		地区選抜大会	二日目 ●0-2	明星
			一回戦 ○2-0	桜美林
	●0-2	東洋		

年	監督	大会	勝敗	対戦校
21	栗原弘	関東予選	一日目 ○2-0	城東
			○2-0	両国
			○2-0	千歳丘
			二日目 ○2-1	東海大高輪台
			●0-2	上野
		総体予選		不明
		私学大会		○2-0 自由が丘学園
			●0-2	東海大菅生
		秋季大会	一日目 ○2-1	狛江
			○2-0	江北
		新人大会	二日目 ●0-2	東亜学園
			一日目 ○2-0	日大桜ヶ丘
			○2-0	成蹊
			二日目 ○2-1	桜美林
		地区選抜大会	一回戦 ●0-2	西
	○2-1	拓大一		
	●0-2	多摩大目黒		

年	監督	大会	勝敗	対戦校
22	宮利政	関東予選	一日目 ○2-0	総合工科
			○2-0	武蔵野北
			○2-0	多摩科学技術
			二日目 ○2-0	筑波大附属
			●0-2	聖徳
		総体予選		不明
		秋季大会		○2-0 岩倉
			●0-2	青山
		私学大会		○2-0 獨協
			○2-0	大東文化一
			○2-0	日体荏原
		新人大会		●0-2 駿台
			○2-0	国分寺
			○2-1	東海大高輪台
			●0-2	錦城

年	監督	大会	勝敗	対戦校
23	宮利政	関東予選	一日目 ○	
			○	
			コート決勝 ○2-1	城東
			二日目 ○2-0	成城
		総体予選	一日目 ●0-2	明大明治
			●0-2	昭と第一
			○2-0	日野台
		全日本予選	一日目 ○2-0	錦城
			○2-0	晴海総合
			○2-0	国分寺
			○2-1	城東
		関東私学	二日目 ●0-2	城北
			○2-1	東京農大二
			●0-2	慶応義塾
			●0-2	常総
		新人大会	一日目 ○2-0	成瀬
			○2-0	付中
			○2-0	創価
		私学大会	二日目 ●0-2	早大学院
			○2-0	昭と第一
	○2-0	東京学園		
	●0-2	高輪		
冬季大会	●1-2	調布北		

年	監督	大会	勝敗	対戦校
24	宮利政	関東予選	一日目 ○2-0	白鷗
			●1-2	錦城
			○2-1	多摩大目黒
		総体予選	二日目 ●0-2	上野
			一日目 ○2-0	都立武蔵
			●0-2	城東
		全日本予選	コート決勝 ●1-2	城東
			一日目 ○2-1	日野台
			○2-0	富士
			○2-1	城北
		関東私学大会	二日目 ●2-0	東海大菅生
			●0-2	八日市場
			●0-2	法政高校
		新人大会		○2-0 桐光
			一日目 ○2-0	岩倉
			○2-0	日野台
			コート決勝 ○2-0	日野台
			二日目 ○2-1	国分寺
			●0-2	高輪
		決勝大会	一回戦 ○2-0	秋留台・拝島
	二回戦 ●0-2	足立新田		
	16決め ●1-2	東京成徳大		
私学関東大会		●0-2 昌平		
	●0-2	東海大相模		

年	監督	大会	勝敗	対戦校
25	宮 利政	関東予選	一日目	
			二日目	○2-0 関東国際 ○2-0 専大附属 ●0-2 東海大菅生
			二日目	○2-0 成瀬 ○2-0 日大二 ●0-2 高輪
		総体予選	一日目	○2-0 國學院 ○2-0 日大一 ○2-0 芝
			二日目	●0-2 早稲田実 ○ 日比谷
			二日目	○ 東海大高輪台 ○ 國學院
		全日本予選	一日目	○2-0 國學院 ○2-0 日大一 ○2-0 芝
			二日目	●0-2 早稲田実 ○ 日比谷
			二日目	○ 東海大高輪台 ○ 國學院
		新人大会	一日目	○ 東海大高輪台 ○ 國學院
			二日目	●1-2 小平南
			一回戦	●0-2 東海大菅生
決勝大会				

年	監督	大会	勝敗	対戦校		
26	宮 利政	関東予選	一日目			
			二日目	○ 世田谷学園 ●0-2 暁星		
			二日目	○2-0 八王子東 ○2-0 神代 ●0-2 早稲田実		
		全日本予選	一日目	○ 小川 ○ 三田 ○ 城東		
			二日目	○2-0 錦城 ●0-2 関東一 ○2-0 城北		
			二日目	○2-0 日本学園 ○2-0 明大明治		
		新人大会	一回戦	○2-0 日本学園		
			二回戦	●0-2 日本学園		
			16決め	○2-0 明大明治		
		決勝大会				

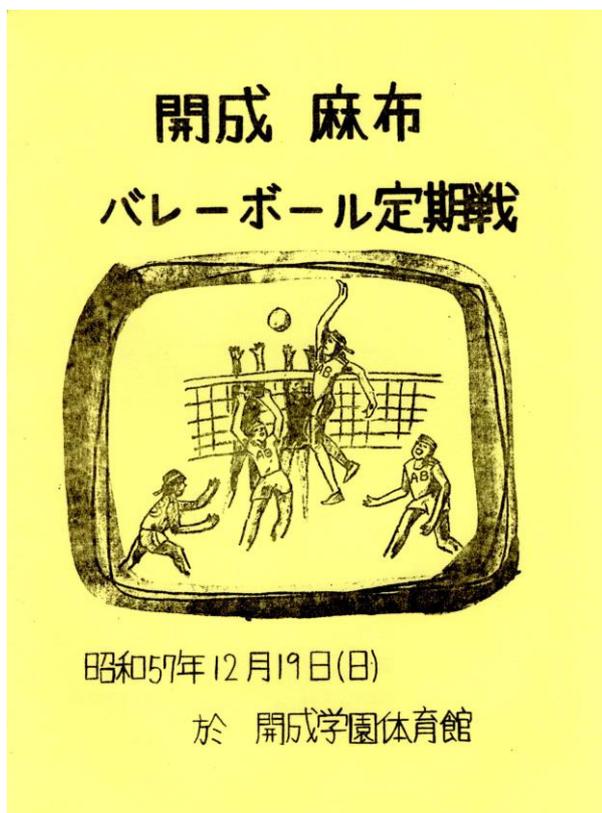
年	監督	大会	勝敗	対戦校		
27	宮 利政	関東予選	一日目	○2-0 成城学園 ○2-0 獨協 ○2-0 足立学園		
			二日目	○2-0 文京 ○2-0 小松川 ●0-2 東亜学園		
			順位決定	●0-2 大森学園 ●0-2 日本学園		
		全日本予選	一日目	○2-0 秋留台 ○2-0 南平 ●0-2 多摩大目黒		
			一日目	○2-0 学芸大附属 ○2-0 武蔵野北 ○2-0 昭和第一学園		
			二日目	●0-2 日大三		
		新人大会	一日目	○2-0 学芸大附属 ○2-0 武蔵野北 ○2-0 昭和第一学園		
			二日目	●0-2 日大三		
			一回戦	●1-2 多摩大目黒		
		決勝大会				

年	監督	大会	勝敗	対戦校
28	宮 利政	関東予選	一日目	○2-0 麻布 ○2-0 駒場東邦 ○2-0 芝
			二日目	●0-2 日大豊山
			一日目	○2-0 千歳丘 ○2-0 府中東 ●0-2 調布北
		総体予選	一回戦	●0-2 八王子
			二日目	○2-0 田園調布 ○2-0 創価 ●0-2 東海大菅生
			二日目	○2-0 昭和 ○2-0 大森 ○2-0 東村山西 ●0-2 東海大菅生
		夏私学大会	一回戦	○2-0 田園調布 ○2-0 創価 ●0-2 東海大菅生
			二日目	○2-0 昭和 ○2-0 大森 ○2-0 東村山西 ●0-2 東海大菅生
			二日目	○2-0 大東文化第一 ○2-0 東海大高輪台 ●0-2 東亜 ○2-1 大森学園 ●0-2 聖徳学園 ●0-2 成蹊
		春高予選	一回戦	○2-0 田園調布 ○2-0 創価 ●0-2 東海大菅生
			二日目	○2-0 昭和 ○2-0 大森 ○2-0 東村山西 ●0-2 東海大菅生
			二日目	○2-0 大東文化第一 ○2-0 東海大高輪台 ●0-2 東亜 ○2-1 大森学園 ●0-2 聖徳学園 ●0-2 成蹊
新人大会	一次	○2-0 昭和 ○2-0 大森 ○2-0 東村山西 ●0-2 東海大菅生		
	二日目	○2-0 昭和 ○2-0 大森 ○2-0 東村山西 ●0-2 東海大菅生		
	決勝大会	○2-0 大東文化第一 ○2-0 東海大高輪台 ●0-2 東亜 ○2-1 大森学園 ●0-2 聖徳学園 ●0-2 成蹊		

年	監督	大会	勝敗	対戦校		
29	宮 利政	関東予選	一日目	○2-0 立川国際中等教育 ○2-0 正則学園 ○2-0 江北		
			二日目	●0-2 大森学園		
			二日目	○2-0 大森学園		
		総体予選	一日目	○2-0 朋優学院 ○2-0 足立西 ○2-1 神代		
			二日目	●1-2 青山		
			二日目	●1-2 青山		
		編集時 この大会まで				



昭和38年頃のバレー部バッジ 校帽の横につけていた

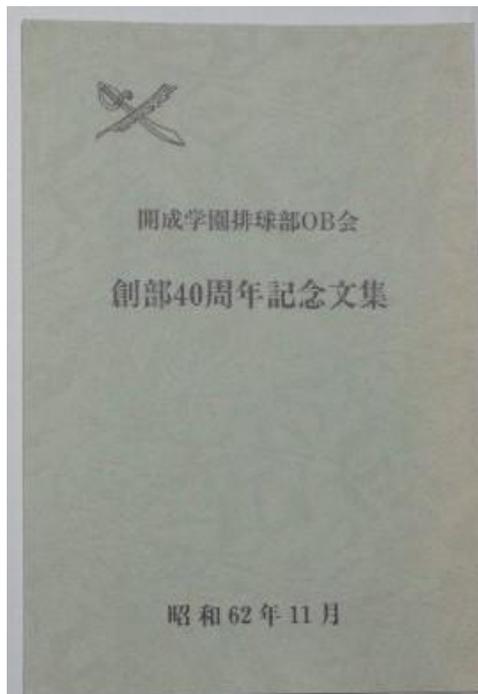


開成

御 氏 名	卒業年
青木秀夫	49年
橋本考司	58年
森田起我	45年
鈴木章弘	56年
中村智博	58
西山祐二	41年
清水誠一	59年
小川宗一	54年
熊谷達秀	54年
松原秀彰	49年
天明宏元	56年
安井高明	37年
明岐久和	37年
山本公純	38
芥川修一	58
藤原光一	58
石井光一	58

第1回開成・麻布定期戦プログラム表紙と参加者名簿

40周年記念文集表紙



50周年記念Tシャツ



60周年記念ポロシャツ

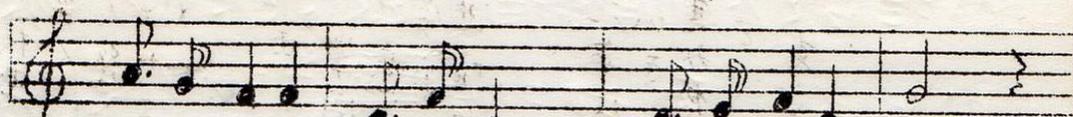
開成学園排球部部歌

1960. 10. 13.

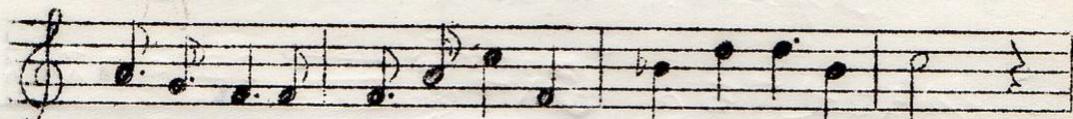
作詞 代表 山本敬先生
作曲 開成学園音楽部



1. ゆ た か な ゆ め E む ね に ひ め
2. ふ る き さ ん と う う け つ い で
3. た く りょう さ か ま く あ ら う み に



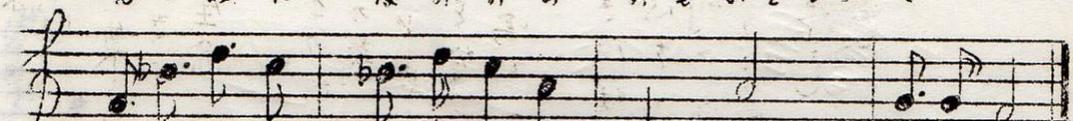
お お し く あ ゆ む ー わ こ お ど の
は な の ひ に お う ー が く え ん に
ち か ら の か き り な み か き め け て



ゆ く て に ふ さ か る い く さ ん が
い だ い を セ お う い き ー た か し
か い セ い け ん い ほ ち す み や く



た が い の こ こ ち に む ち う ち あ っ て
ひ か り E ち ー び て た ー く ー ま し く
む - め に ほ の お の お も い を ひ め て



こ - え て ゆ こ う お ど こ ま ぞ も
と だ つ ほ わ れ ら の ほ い き め ぶ
あ - す の セ か い E さ さ え ん と

開成学園排球部部歌

一、豊かな夢を胸に秘め

雄々しく歩む若人の
行手にふさがる幾山河
互いの心に打ち打ちあつて
越えてゆこうよどこまでも

二、古き伝統受け継いで

花の香におう学園に
時代を背おう 意気高く
光を浴びてたくましく
音つ我等の排球部

三、濁流逆巻く荒海に

力の限り浪かきわけて
開成健思は進みゆく
胸に炎の思いを秘めて
明日の世界を支えんと

開成学園校歌

一、常盤の緑色映ゆる

道灌山の学び家に
あこがれ集ふ若人が
逢けき行手のぞみつ
歌ふや生命の朝の歌

二、黎明日本の夢破り

文化の教開きたる
我が先人と思ふとき
次代を背負ふ健思等が
胸血高鳴りたぎつなり

三、基は遠き伝統に

若き心を培ひて
ペンと剣の旗の下
剛健の意気いや高く
いざや進まんあゝ我等

1976. 6. 20

編集後記

開成時代、成績が悪く劣等生だった私は、バレー部に自分の居場所を見つけ、開成卒業後は、大学でもバレー部の門を叩き、卒業後教員になってもバレーを続け、プレーができなくなった後は審判員、そして所属する連盟の役員として今でもバレーボールに関わっています。

そんな私のバレー人生の原点ともいえる開成バレー部が70周年を迎えました。何か力になることはないかと思っていたところ、佐藤先輩から年史作成の話をお聞きしました。二つ返事でお引き受けしたこと言うまでもありません。

昭和22年創部以降、開成バレー部卒業生は、昭和24年卒の出野先輩から始まり、平成28年卒まで68学年続いています。その間部員のいない学年が4学年あるので64学年にわたります。この70年史には草創の記・昭和31年卒の写真での投稿から始まり全部で61学年の方々よりご投稿いただきました。この場をお借りしてご協力に感謝申し上げます。ありがとうございました。当初全学年網羅することを目標にしていたので3学年投稿いただけなかったことは残念至極です。開成バレー部への思い入れは人それぞれと一人納得しています。

それぞれの学年で千差万別な思いがつつられています。故中村博次先生への思いもその一つです。先生の薫陶を受けた私は、中村博次＝気合・無茶・自分の考えを良くも悪くも変えない、そんなイメージでした。ところが晩年の先生の様子を読ませていただくと、好々爺のイメージしか浮かんできません。いつ頃からどうしてそうなったのが摩訶不思議でした。そういうわけで我儘を言わせていただき先生の審判姿を1ページ使い掲載させていただきました。

また、栗原先生におかれましては中村先生亡き後のバレー部を丁寧に指導してくださいました。先生からの投稿もいただきたく、ぎりぎりまで試みましたがとうとう連絡がつかずタイムリミットとなりお言葉を頂戴できませんでした。これまた残念の極みです。お言葉は別の機会にさせていただきます。

最後に、この70年史が開成バレー部の歴史を紐解くものとして後世まで残していただいたら編集担当として嬉しい限りです。100周年を目にしたいのですが、それは少しばかり無理というものですね……。

片野昭秀（昭和44年卒）